

平城京右京八条一坊十一坪

発掘調査報告書



奈良国立文化財研究所

序 文

大和郡山市の一帯は、旧平城京の西南部にあたり、平城京のなかでも特に重要な羅城門や西市などの遺跡が存在している。

今回、焼却場新営に伴ってその予定地を発掘調査することになったが、当該地は平城京坪付けの上では右京八条一坊十一坪と平城宮南面西門（若犬養門）に通ずる西一坊々間路にまたがっており、調査は西市東部の坪の利用状況と西一坊々間路の確認を目的におこない予想以上の成果をあげることができた。

まず第一に、西一坊々間路は、これまで文献・平安京古図・遺存地割の上から大路と同規模と考えられてきたが、今回の調査でそれを初めて実証したことである。

第二に西一坊々間路西側溝が単に排水施設としてだけではなく、平城宮に物資を搬入する運河として機能していたことが明らかになったことである。

平城宮に南面する他の二門（朱雀門・壬生門）が専ら儀式や祭祀に使用されたのに対し、若大養門と西一坊々間路は、物資の運搬や官人達の通勤等の実用的な目的で使用されていたことが、従前の調査研究成果と宮から遠く離れた八条の地における今次の発掘調査によって明らかになったわけである。このように、平城宮と平城京は一体のものであり、両者の調査研究があいまって都城研究が進展するのである。

大和郡山市では、京阪神のベットタウン化が進行し、西市の保存問題で顕現化したように、開発行為に伴う平城京の破壊が深刻な問題となっている。

言うまでもなく、大和郡山市は中近世の城下町と古代の都城跡という類い稀な歴史的環境に恵まれた土地であり、今後、それらの遺跡保存と活用を一層強化して、伝統的な歴史環境を生かした都市作りを望みたいものである。

最後になりましたが、こうした成果が得られたのも衛生局をはじめとする市当局の全面的な御協力の賜であることをここに銘記し謝辞としたい。

昭和59年3月

奈良国立文化財研究所所長

坪 井 清 足

目 次

I 序 章

1 調査に至る経過.....	1
2 調査のあらまし.....	2
3 写真測量.....	3

II 遺 跡

1 遺構の概要	4
2 遺構	4
3 占地と時期区分.....	8

III 遺 物

1 奈良・平安時代の遺物

A 土器.....	10
B 祭祀用土器・土製品	19
C 墨書土器.....	30
D 瓦類	33
E 木簡	37
F 木製品	38
G 金属製品・ガラス製品	45
H 鋳造関係遺物	52
I 石製品	53
J 動物遺存体	54

2 平城京造営以前の遺物

A 土器	57
B 石器	58

IV まとめ

1 西1坊々間大路と東西両側溝	59
2 祭祀	61
3 結語	64

写真図版

PL.1 調査地周辺の航空写真 (1/7000)	PL.9 西側溝出土土器(2) (奈良時代後半～平安時代)
PL.2 調査区全景航空写真	
PL.3 (1)発掘区全景 (東南から) (2)発掘区全景 (西から) (3)西1坊々間大路路面	PL.10 (1)小型模型土器 (2)墨書き人面土器
PL.4 (1)西1坊々間大路 (西から) (2)西1坊々間大路 (東から)	PL.11 墨書き人面土器 (1:3)
PL.5 (1)西1坊々間大路西側溝 (北から) (2)西1坊々間大路西側溝 (南から) (3)西1坊々間大路西側溝 (南から)	PL.12 (1)土馬 (2)特殊土製品
PL.6 (1)11坪全景 (北から) (2)11坪全景 (南から)	PL.13 墨書き土器 (1:1)
PL.7 (1)S E 930上半部の縦板組 (東南から) (2)S E 930下半部の横板組 (東北から) (3)S E 930 (西から) (4)S E 930全景 (北から)	PL.14 墨書き土器 (呪符)・木簡 PL.15 木製品 PL.16 祭祀用木製品 PL.17 (1)鉄製品 (2)帶金具
PL.8 西側溝出土土器(1) (奈良時代前半)	PL.18 (1)銅製品・ガラス製品・錢貨 PL.19 鋳造関係遺物と錢貨 PL.20 (1)動物遺存体 (2)動物遺存体

表

1 標定点座標値一覧表	5 西側溝出土墨書き土器一覧表
2 条坊座標値一覧表	6 帯金具寸法一覧
3 11坪4周の条坊の推定復原座標値一覧表	7 動物遺存体部位別出土表
4 西側溝出土土馬型式別点数一覧表	

挿 図

- fig. 1 調査位置図
fig. 2 調査地周辺図
fig. 3 平城京条坊図
fig. 4 右京 8 条 1 坊の地区割
fig. 5 標定点配置図
fig. 6 調査区北壁断面土層図
fig. 7 S D920 シガラミ護岸検出位置図
fig. 8 S D920 土層図
fig. 9 S E930 立面図
fig.10 条坊復原概念図
fig.11 11坪の占地
fig.12 土器実測図(1)
fig.13 土器実測図(2)
fig.14 土器実測図(3)
fig.15 土器実測図(4)
fig.16 墓書人面上器実測図(1)
fig.17 墓書人面上器実測図(2)
fig.18 墓書人面上器実測図(3)
fig.19 小型模型土器実測図
fig.20 土馬実測図
fig.21 陶硯実測図
fig.22 円板状土製品・紡錘車・土鍤実測図
fig.23 墨画上器実測図
fig.24 墨書き器実測図
fig.25 軒丸瓦
fig.26 軒平瓦・鬼瓦・異形瓦製品
fig.27 木製品実測図
fig.28 祭祀用木製品実測図
fig.29 木製品実測図
fig.30 木製品・石製品実測図
fig.31 鉄製品実測図
fig.32 帯金具実測図
fig.33 銅製品・ガラス製品実測図
fig.34 銭貨拓影図
fig.35 銭貨計測値分布図
fig.36 鑄造関係遺物実測図
fig.37 馬骨部位名称
fig.38 動物遺存体出土分布図
fig.39 京造営以前の土器・石器実測図
fig.40 現地形と復原条坊
fig.41 西側溝出土祭祀遺物
卷末折込 遺構実測図 (1:200)

例 言

1. 本書は、大和郡山市が同市九条町に計画した焼却場予定地の発掘調査報告である。
2. 調査は大和郡山市の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が昭和58年4月12日～6月30日にかけて実施した。
3. 調査には工楽善通・上野邦一・千田剛道・巽淳一郎・本中 真・深澤芳樹・寺崎保広・橋本善則が参加した。
4. 調査に際しては、大和郡山市衛生局の全面的な協力を得た。
5. 本書の作製は、当調査部部長岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て以下のように執筆分担した。

I-1・2、III-1 B、IV-3 巽淳一郎／I-3、II-1～3、IV-1 本中 真／III-1 A・
2 A 千田剛道／III-1 C・E 鬼頭清明／III-1 D 深澤芳樹／III-1 F・I、III-2 B 工楽
善通／III-1 G 松村恵司／III-1 H 杉山 洋／III-1 J 松井 章／IV-2 金子裕之
6. 遺構・遺物・図版の写真は佃 幹雄が担当し、八幡扶桑・藤田千賀枝の協力を得た。
7. 本調査は平城宮跡発掘調査部の第149次調査として実施したもので、各遺構には平城京右京における調査規準に従い一連の番号を付した。
8. 出土鉱滓の分析と、土器に付着した白色物質の同定については、当研究所埋蔵文化財センターの沢田正昭・秋山隆保が行い、樹種鑑定については、光谷拓実が行った。
9. また大阪市立大学粉川昭平教授には、ミッガシワ層の同定ならびに有益な助言をいただいた。
10. 本書の編集は巽淳一郎が行った。

四条大

五条大

六条大

七条大

八条大

九条大

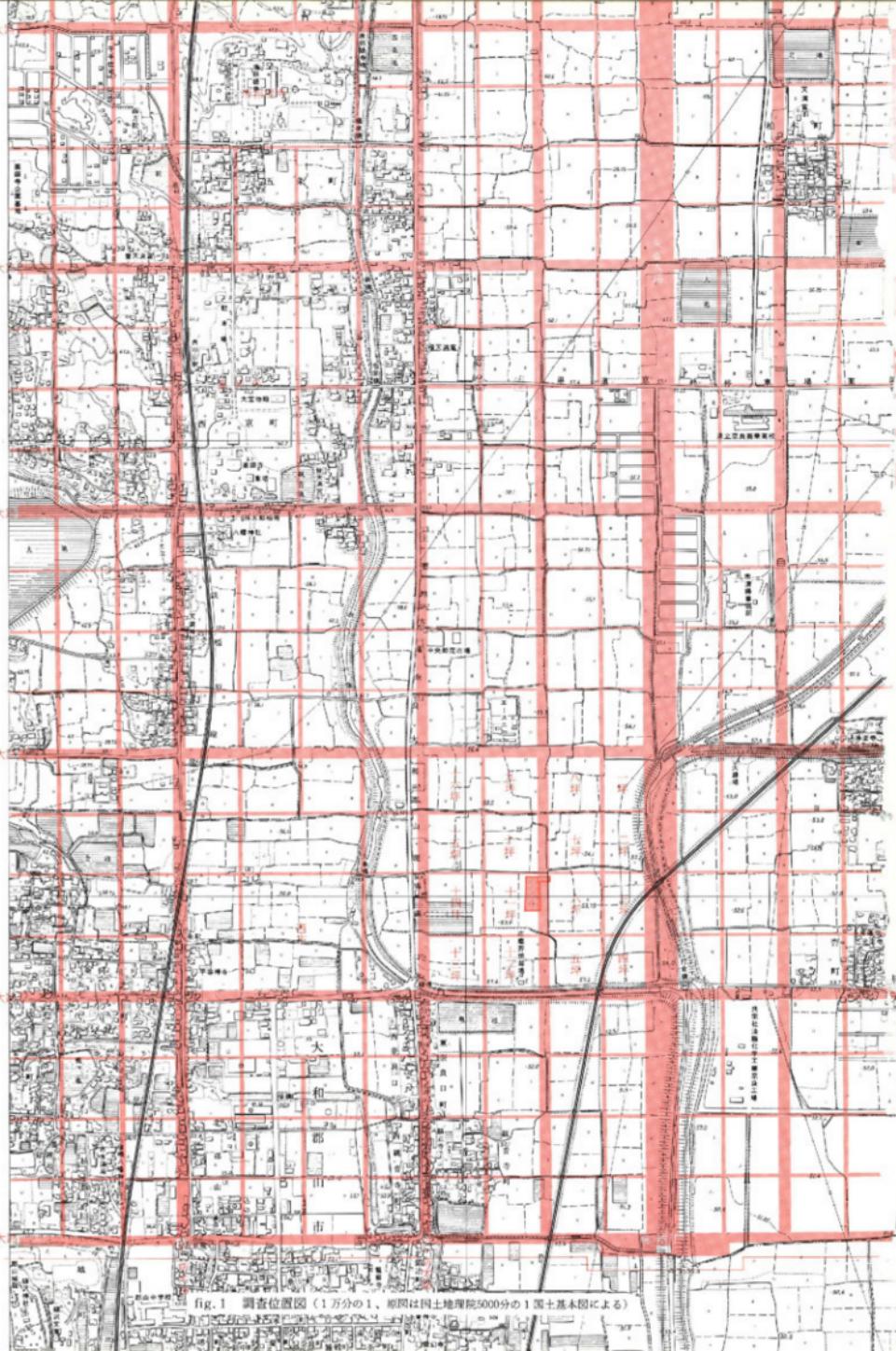


fig. 1 調査位置図（1万分の1、原図は国土地理院5000分の1 国土基本図による）

I 序 説

1 調査に至る経過

平城京右京8条1坊11坪の発掘調査は、大和郡山市が同市九条町に計画した塵芥処理場予定地の事前調査として実施したものである。大和郡山市では、ここ十数年来、京阪神のベッドタウン化が進行し、人口は年々増加の一途をたどっている。市ではすでに昭和46年にこの地に焼却場を設け操業してきたが、人口増に比例して出される大量のゴミを、老朽化した現在の焼却施設では将来効率的に処理できなくなる事態が予想されるため、市当局は現焼却場の北側に近代的な焼却場の新営を計り、また周辺の環境整備を計ることになった。

奈良県教育委員会は、平城京において500m²を超えるような大規模な開発を実施する場合、公共・私営を問わず受益者側の費用負担で事前調査をするように行政指導を行い、国・県・奈良市・大和郡山市の四者が協議して実際の調査を分担することになっている。

塵芥処理場建設予定地は、平城京内でも特に重要な西市推定地に隣接し、また平城宮南面西門（若犬養門）に通ずる西1坊々間路の存在が予想される極めて重要な場所にある。事業主体である大和郡山市衛生局は、県との協議の結果、事前調査を行うことに同意し、調査の実施を奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部に依頼することになった。調査費用・期間・発掘方法等に関しては、上記の機関の関係者の協議により、昭和58年3月に発掘調査計画がまとまった。

発掘調査は、塵芥処理場建設予定地面積の約40%にあたる約3,000m²について、昭和58年4月12日から6月30日までの期間に行なった。

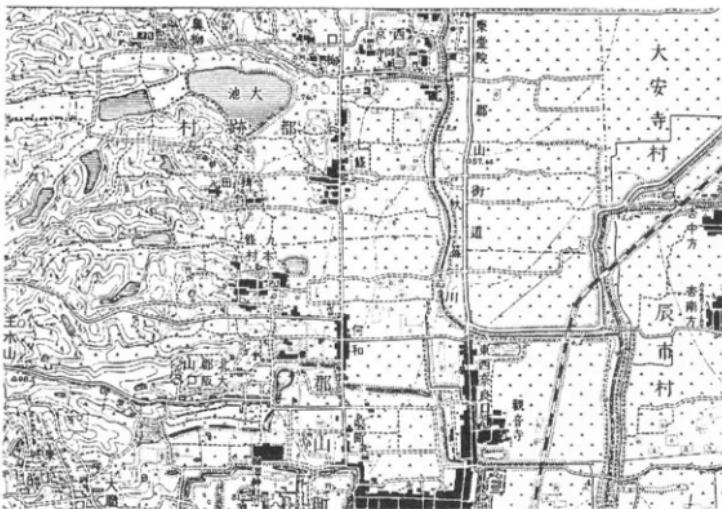


fig. 2 調査地周辺図（明治20年測量、同31年修正発行）

2 調査のあらまし

調査対象地は、平城京坪付の呼称の上では右京8条1坊11坪の一部と、西1坊々間路の路面敷にまたがる範囲にある。調査は西市周辺の坪の利用状況の把握と西1坊々間路の規模の確認を主たる目的として実施した。調査は平城宮跡発掘調査部で実施している京内遺跡発掘調査基準で行った。

右京8条1坊（6A11区）では、奈良県教育委員会が、県立養護学校建設にともなう事前調査として、今回の調査区の北側の10坪を調査しているが、当地での地区設定は初めてであるため調査に先立ち8条1坊全体の中地区割を下図のように行った。実際に調査したのは、11坪のO区とN区の一部である。

発掘区は、前述した調査目的にかなうように、西1坊々間路の条坊痕跡と目されていた水田を基準にして、当初、以下のように設定した。まず11坪の東辺部に南北75m、東西30mの長方形の発掘区を設定し、更に西1坊々間路を検出するため、先に設定した発掘区の東北隅から、南北10m、東西25mの東西トレントを延長した。調査に先立ち、土層の堆積状況を確認するため、設定した調査区の数ヶ所を試掘した結果、旧水田床土までかなり深い事が分ったので重機を入れて床土までを排土した。排土作業が進行している段階で測量調査を実施し、排土完了後、中地区および小地区割を行った。中地区はOとNの2地区にまたがっており、両地区の境界にセクションパンクを設けた。小地区の設定にあたっては、8条大路と朱雀大路との交差点の国上方眼座標をO・Aとして3m方眼を切り、南北



fig. 3 平城京条坊図における調査位置



fig. 4 右京8条1坊の地区割

線を算用数字で東から西へ数え、東西線をアルファベットで南から北へ通して標示する方法をとった。なお、算用数字は1～99までを使い、99以降はまた1から繰返す方法で、アルファベットはA～Tまでを使い数字と同様に繰返す方法をとった (fig. 4)。

調査の進行にともなって、11坪内は中世に行われた土取りのために、奈良時代の遺構が大半破壊されてしまっていることが判明した。この土取穴については、数ヶ所で深さを確認した結果、1.5m～2mにも及ぶことを知った。また、一部残る地山面で検出した掘立柱の柱穴は、比較的深いものでも0.5mに満たないことから上取穴の底で奈良時代の遺構を検出できる可能性がほとんどないため、土取穴については数ヶ所を断ち割り調査をすることにし、輪郭のみを確認することにとどめた。

また、中央発掘区の東辺に予想した坊間路西側溝は、予想外に広く、その東肩が中央発掘区の範囲におさまらないことが判明したので、急拵10m幅で東にトレントを拡張し、西側溝の発掘を調査の主眼にして進めることにした。

この坊間路西側溝は、幅約10mを測る大規模なもので総延長75mを発掘することになった。溝の輪郭

を平面で検出した後、堆積の状況を確認するため、四ヶ所で深掘りを行い、調査員全員で土層を検討した後、層毎に剥いで行く方法で掘り進めた。

遺構検出後、測量調査に入り、まず後述する写真測量を行い、後に遺方実測を行った。実測完了後、柱穴や上取穴の断ち割りを行い、その結果についても実測を済ませ調査を完了した。

上取穴や内側溝の底面、標高約52.5mにあたる深さには調査区全域にわたって氷河期に形成された黒色腐食土層があり、奈良盆地の成り立ちを考える上で重要な資料になると思われたので、大阪市立大学教授川畠平氏の鑑定を仰ぐとともに、合わせて日本アイソトープ協会に試料を送り ^{14}C 年代の測定を依頼した。現在測定中であり、その成果は別の機会に報告する予定である。

3 写真測量

遺跡の測量調査には、一般的に遺方測量が用いられるが、写真測量を併用する場合が多くなってきた。写真測量は遺方測量に比して、作業が迅速で遺構の養生のためにも好適であるし、また精度が均一でいつでも撮影時の状況を再現できる利点がある。今回の調査では遺方実測と写真測量とを併用した。遺方は20分の1の縮尺で行い、写真測量はヘリコプターにステレオカメラを搭載して空中から垂直写真的撮影を行った。今時はまだ図化するまでは至っていないが、この成果から隨時撮影時の状況を再現できるし、遺跡と周辺の土地利用との関連性を把握することができる。また必要に応じて図化が可能である。

撮影仕様と標定点一覧表および配置図は以下のとおりである。

撮影仕様

撮影日時 1983. 6. 10. 撮影縮尺 1/500~1/800
 飛行地 川崎市 K H 4 撮影高度 30m
 カメラ フィルム RMKA 菊山 1/500
 レンズ 極点距離 150 m 実寸倍率 ファイスク 6 V
 フィルム コダック TRI-X

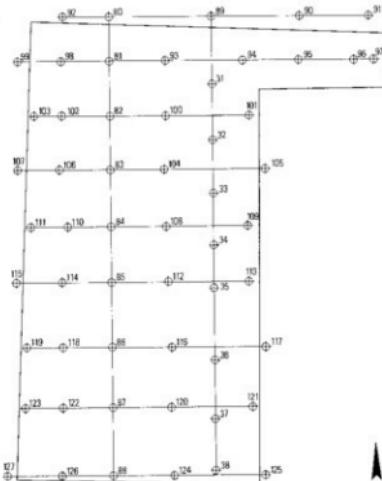


fig. 5 標定点配置図

	X	Y	Z		X	Y	Z
32	-148,972.563	-18,846.402	52.068	91	-148,954.120	-18,820.728	54.485
34	-148,991.815	-18,846.402	52.234	99	-148,961.546	-18,878.459	54.241
36	-149,010.627	-18,846.402	52.080	101	-148,970.692	-18,840.307	53.168
38	-149,028.991	-18,846.402	51.829	107	-148,979.439	-18,878.642	54.080
80	-148,954.120	-18,863.370	54.303	109	-148,968.559	-18,840.835	53.214
82	-148,970.692	-18,863.370	53.492	115	-148,997.740	-18,878.812	54.028
84	-148,988.559	-18,863.370	53.516	117	-149,008.570	-18,838.228	54.336
86	-149,008.570	-18,863.370	53.488	123	-149,018.372	-18,877.944	53.282
88	-149,029.420	-18,863.370	53.387	125	-149,029.420	-18,838.136	54.277
89	-148,954.120	-18,846.402	54.515	128	-149,031.867	-18,863.370	54.076

tab. 1 標定点座標値一覧表

II 遺構

1 遺跡の概要

焼却場建設予定地は現在荒地となっているが、もとは水田耕作地で、地表面の海拔高は約54.30～54.40mである。発掘調査区は、西1坊々間大路の条坊痕跡と目される2筆の長方形の水田と、この西側に南北にのびる細長い水田2筆の計4筆に及んでいる。旧水田耕作土の厚さは約0.2mで、この下に厚さ約0.15～0.30mの床土がある。床土は東で薄く、西に向うに従って厚くなる。調査区の東張り出し部では、この床土の直下が地山となるが、中央部から西側の区域では更に厚さ約0.4mの中世・近世の遺物包含層の堆積がある。

この遺物包含層の上面には、中世以降に行われた土取りのための土壤が多数掘られている。これらの土壤群は調査区東張り出し部の地山面上や調査区西半部のかなり広い範囲に及んでいる。深さは約2.00mで、砂質土の地山が高まっている部分を残して粘質土の存在する部分の大半が掘りこまれ、これによって奈良時代の遺構は大幅に破壊されている。従って砂質の地山面上に掘られた住穴や、埋土に砂質分の多い西1坊々間大路側溝（SD 880・920）などはこの破壊をかろうじて免れている。上取りは、地表下2.0m、標高52.2mに存する黒色腐食土層上面まで達する。この層は奈良盆地形成以前の最終氷河期の湖沼堆積（ミッガシリ層）と考えられる。堆積は層理をなす。

地山はSD 920以西では青灰色の砂質土で、SF 910以東では上下2層に分かれ、青灰色砂質土の上が更に厚さ0.40～0.50mの黄褐色粘質土層となる。青灰色砂質土層は、造営以前の旧河川跡と目される。地山上面の海拔高は調査区東張り出し部東端で最も高く54.05mで、西に向うに従って削平が著しく、土壤群の破壊を免れた部分では53.50～53.70mである。

2 遺構

検出した遺構は、建物1棟、塀5条、溝3条、道路1条、井戸1基、土壙6などである。なおこれらのうち、土壤を除くすべての遺構は地山面上で検出したものである。また、土壤は奈良時代のものに限って独立の遺構番号を付し、中世以降の土取りのための土壤群は地域によって一括して遺構番号を付けた。以下に遺構番号順に解説する。

SD 880 調査区東張り出し部東端に存在する南北溝。上面の幅0.90～1.00m、底幅0.30～0.70m、深さ約0.30mである。溝の埋土は一様に暗灰砂質土で、水が著しく流れた痕跡は認められない。後述するように、西1坊々間大路（SF 910）の東側溝に相当する。

SF 901 SD 880の中央部へ東から合流する東西溝。上面の幅約1.15m、底幅約0.90m、深さ約0.09m。埋土は流水の痕跡を呈さないが、SD 880との合流点が溜りのような状況を示し、若干の表

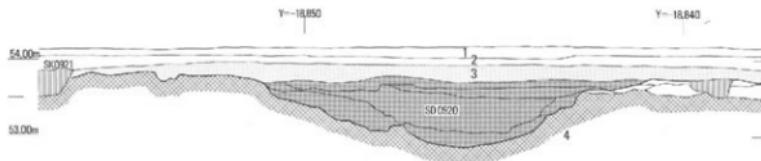


fig. 6 調査区北壁断面土壙図

流水程度の流水はあったものと考えられる。11坪の東隣の6坪宅地内から流れ出る排水溝であろう。奈良時代後半期の土器とともに帶具が出土した。

SK903 S D880の西に南北方向に帯状に重複する土壤群。少なくとも6個以上の土壤が重複しているものと推測される。深さは約0.40~1.00m。14世紀の土師器の羽釜が出土した。

SK904 調査区東張り出し部の北辺で、S D880の西約2.00mの位置に存在する奈良時代の土壤。西端はSK903と重複している。長径2.60m、短径約0.70mの南北方向の楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む。

SK905 奈良時代の土壤。北辺および東南隅部がSK903と、西南隅部がSK907と重複している。深さは約0.12mで、SK904と同様に埋土に炭化物を含む。SK904とSK905とは、西1坊々間大路(S F910)の路面上に存在し、路上で行われた祭祀等に関連して掘られたものであろう。

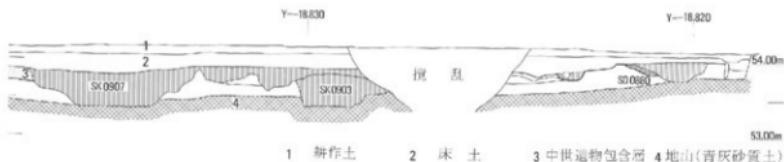
SK907 SK903のさらに西に存在する不整形な土壤で、灰褐粘質土の中世遺物包含層の上面から掘られている。深さは約1.00mで、すり鉢状。中世遺物包含層はこの土壤より東側ではなく、西に向うに従って厚く堆積している。

SK908 調査区東南隅部、S D920の東に存在する土取りのための土壠。北端は地山との高低差が0.57mあるが、南端は徐々にたちあがっていく。南および東は、調査区外へとのびる。

S F910 S D880とS D920とはさまれた道路遺構。畦畔にみる条坊痕跡から、平城宮南面西門(若犬養門)から南にのびる西1坊々間大路であることがわかる。両側溝心々間距離は24.550~25.725mで、天平尺(1尺=0.295~0.296m)換算値は82.9~86.9尺となる。これまでの調査で明らかとなつた平城京大路幅は2条大路が120尺とやや広い以外は、東1坊大路、西1坊大路がそれぞれ80尺で、今回の成果もほぼこれらの数値と近似する。ただ、遺構から読みとれるS F910の東西両端の高低差は約0.50mで、路面の水はけ勾配は2.7%とやや大きい。先述の如く、S D920以西の削平が著しく、路面全体が削平されたものと考えられる。S D920に比して、S D880が極めて小規模であるのは、雨水排水をすべてS D920で受けるよう計画されていたためであろう。

SD920A・B・C 西1坊々間大路(S F910)の西側溝。溝上面の幅は5.50~11.00m、溝底の幅は3.00m~8.00m、深さは約1.50~1.75mを測る。東側溝S D880が小規模で、雨水排水をすべてS D920が受けるとしても、道路側溝としては不相応に大規模である。

埋土の状況から溝は概ね3時期に分けることができる。A期の溝は平城京造営当初の溝で、堆積層は無い。B期の溝は両岸を暗灰色の粘土で護岸している。溝の堆積は最下層が灰黒色の粗い砂層で、流れによるえぐれのためか、1部護岸のための粘土の下層にもぐりこむ。この上に砂層と粘質土層とが互層をなし、溝幅はA期のものより約2~3m狭くなっている。暗灰色粘土層(第4層)からは主として平城宮出土土器編年II・IIIの土器が出土した。



S D920の南部で、B期の溝の中から、溝の護岸に用いられたものと考えられるシガラミを溝内側に向って流失したような状況で検出した（fig. -7）。

シガラミは径約0.10m、長さ約0.50mの杭を用い、径0.01m程度の小枝を横方向に交互に編んでいる。最も残存の良好なもので5連を数え、遺存する延長は計約10mである。おそらく前述の暗灰色の粘土は、このシガラミの裏込めであったものと考えられる。しかし、S D920がすべてシガラミで護岸されていたかどうかは不明である。とりわけ、X=-149.010地点の西岸溝底に打ちこまれた杭は青灰砂質土の地山面上に達し、これより南のシガラミが溝中央へ流された状況を呈していることから、これより以南の限られた部分にのみシガラミ護岸がなされていた可能性もある。

C期の溝はやや狭く浅くなり、堆積土は灰色の細かい砂を主体とする。出土遺物は少ないが、主として奈良時代末期～平安時代初期のものである。これらの3期に区分できる溝を最終的に赤褐色の一層に粘土で埋める。埋土は厚さ0.20～0.30m、幅約7.00mで、西1坊々間大路の路面上にまでおよんでおり、おそらく路面敷を削って埋立てたものであろう。この層から、9世紀代におさまる灰釉陶器片が出土した。

S K921 S D920の西約4.00～5.00mの位置から西側一帯に広がる複数の土壤群。中世に行われた土取りのための土壤で、砂質土壤の地山部分を残して大規模に掘削されている。底はほぼ水平で深さは約2.00m。掘形の東端の肩はほぼ南北に直線的に通っており、S D920の砂質土層を避けて掘削していることがうかがわれる。

S A923 調査区中央西南より、S K921の破壊を受けなかった砂質土壤の地山面上において検

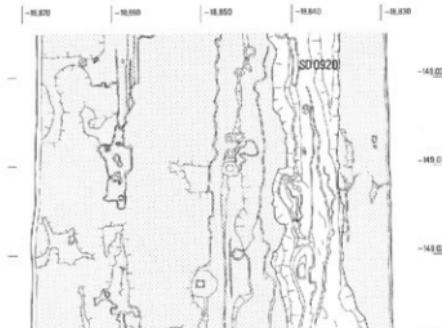


fig. 7 SD920シガラミ護岸検出位置図

出した南北堀。検出したのは4分間で、柱間寸法は7尺（2.1m）等間。柱掘形は小規模で、平均径約0.50mの不整円形を呈する。深さは0.20～0.30mで削平されたため浅い。柱痕跡は認められない。東側がS K921によって深くまで削りとられているため精査できなかつたが、東へのびる南北棟の西側柱列である可能性もある。

S A925 調査区西南部でS K921に削りとられずに残存した砂質土壤の地山面上で検出した南北堀。2分間で柱間寸法は24尺（7.2m）。中央の柱掘

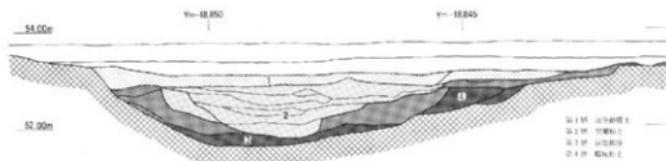


fig. 8 S D920土層図

形はSK921によって失われたらしい。南北棟の妻柱列である可能性もある。柱掘形の径は約0.50mで、柱痕跡の径は約0.20mである。

SE930 調査区南端中央部で検出した奈良時代の井戸。掘形上端の西半部をSK921によって削平されている。井戸枠の据え付け掘形の径は、南北約4.00m、東西約3.60m、深さは約3.50m。井戸枠は底から約2.50mの位置で後に継ぎたしている。

当初の井戸枠は、横板組みで、これを4隅の柱によって内側から支えている。4隅の柱の断面は方約0.10mの正方形で、長さは平均2.50m、1辺の内のりの長さは約0.72m、上端から約0.20m～0.40mの位置と、2.20～2.30mの位置に深さ約0.05mの枘穴をうがって横梁を2段に組む。横架は、木口が縦横0.07mで、長さは約0.75mである。横板は、大きさが揃わず縦0.10～0.50m、横約0.80m、厚さ約0.65mを測る。横板には枘穴や出枘の仕口ではなく、横板を直接支柱に添わし1段積む毎に掘形を埋めて固定している。

この当初の井戸枠の上に後に縦板組みで継ぎたしている。すなわち当初の井戸の4隅の柱の上面に相欠き仕口を施して長さ0.90～1.10mの後補の柱を立てる。この柱の中程に、木口の縦横約0.05m、長さ0.72mの横梁を組む。縦板はこれららの4隅の柱と横梁によって支えられている。残存する縦板材は、縦約0.70m、幅0.20m～0.24m、厚さ約0.05mで、枚数は各辺に平均4～5枚、計22枚である。4隅の柱と同様に上端がSK921の削平を受け、据え付け時の規模を復原し得ない。当初の井戸枠埋土からは、奈良時代前半の土器や曲物が、後補の井戸枠埋土からは奈良時代末期の土器や瓦片が出土した（fig. 9 参照）。

SB935 調査区中央のやや北西よりで検出した掘立柱建物で南に庇が付く東西棟と思われる。検出したのは東妻部分と庇の桁行1間分であり、西側がSK921の搅乱を受け、建物全体の規模は知り得ない。桁行の柱間寸法は9尺（2.7m）、梁行は2間で12尺（3.6m）等間で、これに梁行9尺の南庇が付く。SA923と東妻柱筋をそろえる。柱掘形は径約0.50m、深さは0.40m程度で、東南隅部の柱掘形で確認した柱痕跡の直径は、約0.30mである。

SA940 調査区北西隅部にある掘立柱の東西塀。検出したのは2間分で、東はSK921によって破壊され、西は調査区外へのびる。柱間寸法は13尺（3.9m）等間である。なお柱掘形は円形であり、直徑が約0.40～0.60m、深さは0.20mと極めて小規模で、柱痕跡は認められない。

これ以外にSA923と重複する柱掘形（1間分、柱間寸法7尺）や、SB935の南にも奈良時代の柱掘形をいくつか検出しているが、SK921の搅乱のため性格は不明である。いずれにしても小規模な掘形であり、雜舎やそれを囲む塀になると思われる。

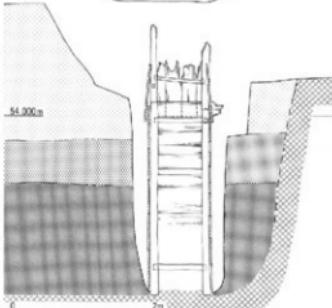
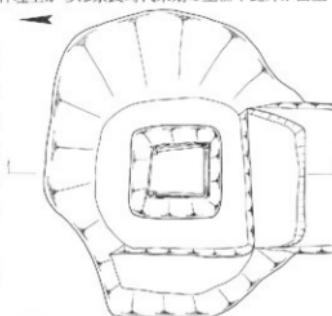


fig. 9 SE930立面図（西から）

3 占地

今回の調査の結果明らかとなった西1坊々間大路両側溝心および大路心の座標値（国上調査法に定める国土方眼第6座標系を基準とする）は tab. 2 のとおりである。この座標値をもとに、平城宮跡第133次調査で得られた平城宮南面西門（若犬養門）心の座標値との関係を求めるとき、西1坊々間大

路中軸線は、北で西に $0^{\circ} 21' 40''$ 傾していることになる。

従来の調査で平城京朱雀大路の中軸線は北で西に $0^{\circ} 15' 41''$ 傾していることが明らかになっているから、西1坊々間大路の方が傾りがやや大きいといえるであろう。

また、平城宮跡第133次調査で得た2条大路心と、南面西門（若犬養門）心の座標値とから、門前における2条大路と西1坊々間大路との交差点の復原座標を求めるとき、 $X = -146,024.796$ 、 $Y = 18,851.961$ となる。

一方、平城宮跡第125次調査で得た右京9条1坊5坪付近における9条大路北側溝心の座標値 ($X = -149,739.47$ 、 $Y = -18,795.17$) と、羅城門調査で得た右京9条1坊5坪南における平城京外濠（9条大路南側溝）北肩の座標値 ($X = -149,757.14$ 、 $Y = -18,780.24$) とから、9条大路の路面幅は約 17.67 m (60尺) を得る。外濠による路面の浸食も考えられるから、9条大路の計画幅員は 60~80 尺であったことになる。従って、西



fig.10 条坊復原概念図

1坊々間大路中軸線上における平城宮若犬養

地点	X	Y	備考
1	-148,956.500	-18,845.650	
2	-148,956.500	-18,821.100	本調査
3	-148,956.500	-18,833.375	
4	-145,994.578	-18,852.045	
5	-146,006.584	-18,824.538	第133次調査
6	-146,042.934	-18,824.455	
7	-146,024.796	-18,851.961	推定復原座標
8	-146,074.691	-18,841.633	第141~4次調査
9	-149,739.470	-18,795.170	第125次調査
10	-149,757.140	-18,780.240	羅城門調査

tab. 2 条坊座標値一覧表

門前の2条大路心から9条大路北側溝までの計画寸法は12,560~12,570尺となり、この寸法で実長を除した値、すなわち $3,714.674\text{ m} \div (12,560 \sim 12,570\text{ 尺}) = 0.2955 \sim 0.2958\text{ m}/\text{尺}$ が単位尺あたりのメートル法換算値となる。従来の調査で明らかとなっている造営単位尺は、0.294~0.296mで、今回得た数値もこの範囲内におさまる。この単位尺と、前述の西1坊々間大路の振れをもとに右京8条1坊11坪4周の条坊を復原したものがfig.11とtab.3である。

次にこれらの成果をもとに、本調査で明らかになった遺構の平城京内における占地および坪内における配置について考えてみよう。

fig.11によって南北溝S D880とS D920とは、西1坊々間大路S F910の東西両側溝であることが明白である。

またS E930は、11坪をほぼ南北に2分する中軸線上に位置している。土取り穴S K921によって遺構が人手破壊されているため、宅地割の情況はまったくとらえられないが、S E930は奈良時代当初に掘られ、一時期廃絶するが、奈良時代後半代に修理して再び使用されていることから、宅地割の変更が行われた可能性もある。

またS A940は11坪の北限に近い位置に存在し、11坪の北を限る塀であった可能性もある。しかし、S D880とS D920とが西1坊々間大路の東西両側溝であることは疑う余地がないとしても、今回の調査では東西条坊を確認していないため、S E930やS A940の位置についてはなお疑問の余地を残す。そしてS K921による削平のため、これらの遺構の時期区分を行うことは困難である。

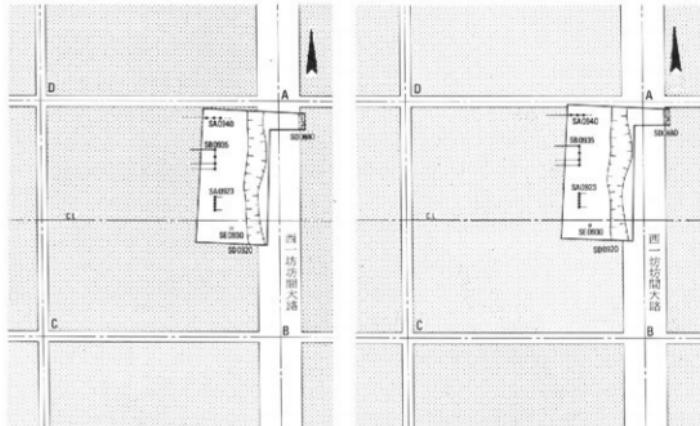


fig.11 11坪の占地（左は1尺=0.295m、右は0.296mの場合）

	X	Y		X	Y
A	-148,950.188	-18,833.523	A	-148,953.158	-18,833.505
B	-149,083.160	-18,832.685	B	-149,086.265	-18,832.666
C	-149,083.160	-18,965.660	C	-149,086.265	-18,965.776
D	-148,950.188	-18,966.498	D	-148,953.158	-18,966.615

tab.3 11坪四周の条坊の推定復原座標一覧表（同上）

III 遺 物

1 奈良・平安時代の遺物

今回の調査では、土器、瓦、木製品、金属器等の遺物が整理箱にして二千箱近い量が出土している。これらの大半は西坊々間大路西側溝 S D920の堆積層から出土したものである。

A 土 器 (fig.12~15, PL 8・9)

大量の土器が出土している。奈良・平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・縄釉陶器・製塙土器のほか弥生時代の土器、古墳時代の土師器や須恵器それに埴輪がある。土器の大部分は S D920から出土したものであり、他に井戸や土壙、遺物包含層からも土器が出土している。なお土器の記述に際しては奈良県立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠する。

(i) 井戸 S E 930出土の土器

土器は上層と下層の両層から出土している。上層は井戸改修後の堆積である。1・3・4・7・8・9は上層、2・5・6・10および呪符を記した土師器蓋は下層から出土した。奈良時代の土師器・須恵器のほか弥生式土器が出土している。弥生式土器については別項に譲る。

土師器 盆 A (7) は a₉ 手法。口径14.8cm。蓋 C (6) は底部に粘土紐接合痕を残す。内底面に漆が付着する。杯 B 蓋 (fig.24-1) は井戸の最下層から出土した。頂部外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヨコナデで調整する。内外両面に呪符を墨書きする。口径14.4cm。なお呪符については後述する。
須恵器 杯 B には杯 B I (3)・杯 B II (2)・杯 B III (1・5) がある。3は底部ヘラキリのまま。口径19.3cm、高さ5.0cm。2は底部ヘラキリの後ナデを加える。底部外面に「令」の墨書きがある。口径17.3cm、高さ5.6cm。1は底部ロクロケズリの後ナデを加え、口縁部下半をロクロケズリする。口径13.2cm、高さ4.0cm。5は口縁部がゆるく内湾してひらく。底部はヘラキリのままである。口径13.0cm、高さ3.6cm。4は杯 B III 蓋である。頂部外面はロクロケズリする。口径12.8cm。蓋 H (8)、底径7.5cm。蓋 (10) はほぼ完形で出土した。球形の体部に端部が軽く細曲してゆるい段をなす「く」の字形の口縁部がつく。体部最大径は中位よりやや上にあり、内面に内心円当具痕を残し外面は格子目叩きで調整する。底部は小さな平底状をなす。口径23.4cm、高さ39.9cm。9は蓋 N で肩部と体部中位に縦の把手がつく。体部外面はロクロケズリする。内面肩部から底部にかけて白色物質が厚く(底部で2cm)付着する。この物質は分析の結果、水銀土 (gibbsite) であることが判明した。

下層の土器は平城宮土器Ⅲに、上層の土器は平城宮土器Ⅴに属する。

(ii) 包含層・土壙 SK 903出土の土器

11坪の西辺部には土取りの及ばない面があり、厚さ30cm程の暗灰色の遺物包含層があり、奈良時代の土器が出土した。四周を土取り穴で破壊されているため土壙の可能性もある。

土師器には杯 C・高杯・甕がある。杯 C は放射暗文をもつ。高杯 (15) は断面9角に面とりした脚部で、内面に棒を芯にして成形した痕跡がある。須恵器は盆 A・杯 B・杯 B 蓋・鉢 A・甕がある。杯 A (13) は底部ヘラキリ後ロクロケズリ仕上げ。口径15.4cm、高さ4.7cm。12は杯 B で底部切離のまま。口径12.0cm、高さ4.6cm。11は杯 B 蓋である。口径18.4cm。17は甕の破片である。口縁部外面はロクロナデ、肩部内面は同心円当具痕、外面にはカキメがある。口径28.6cm。16は長い体部に「く」の字形の口縁部がつく。土師器長胴甕に良く似た形態である。口縁部内外面のヨコナデはロク

ロ回転を利用している可能性がある。体部外面は継位の平行叩目があり、その上に間隔を置いて細い帯状にスリケシを加える。14は鉢 A で口縁部を除く外側をロクロケズリする。口径22.2cm。これらの土器には平城宮土器 I の特徴をもつものが含まれる。

西 1 坊間大路路面に掘られた土取穴 S K903 の底面から完形に近い土師器の羽釜が数点出土した。
18はその一例である。口径20.7cm、高さ16.7cm。

(iii) 西 1 坊々間大路西側溝SD920出土の土器

土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、転用硯、漆付着土器、白色物質付着土器があり、土器の総量は整理箱で500箱を越える。そのうち土師器は160箱、須恵器は350箱、黒色土器1箱、製塙土器6箱で圧倒的に須恵器が多い。

土師器　杯 A・杯 B・杯 B蓋・杯 C・皿 A・皿 B・皿 C・高杯・椀 A・椀 C・椀 D・椀 E・壺 A・壺 A蓋・壺 B・壺 E・壺 A・壺 B・鉢 A・盤 A・盤 B・鍋・竈等の器種がある。

杯 A　20は底部内面にラセン暗文・口縁部内面に一段放射暗文・連弧暗文をもつ。b₁ 手法。口径20.3cm、高さ4.1cm。21は一段の粗い放射暗文がある。b₁ 手法。口径20.0cm、高さ3.5cm。24は密な一段の放射暗文をもつ。a₆ 手法。口径17.4cm、高さ3.5cm。22-c₉ 手法。口径19.0cm、高さ5.3cm。23-c₃ 手法。口径19.0cm、高さ4.7cm。29-b₆ 手法。口径15.6cm、高さ2.6cm。26は口縁部内面及び口縁部外面上端をせまくヨコナデする。口径13.6cm、高さ2.7cm。25は平底に直線的な口縁部がつく。口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。口径13.8cm、高さ4.0cm。20・26・29は第2層出土。21・22・24・25は第3層出土。総数905点出土。なお杯Bは、総数20点出土している。

杯 C　27は放射暗文をもつ。b₆ 手法。口径14.8cm、高さ2.9cm。33はa₆ 手法。口径19.2cm、高さ2.5cm。32はa₉ 手法。外底面に木葉圧痕がある。口径16.6cm、高さ3.1cm。34は暗文をもたない。a₉ 手法。口径19.6cm、高さ2.6cm。27は第2層出土。32・33・34は第3層出土。総数97点出土。

皿 A　31はc₉ 手法。口径16.6cm、高さ2.8cm。30はc₉ 手法。口径16.2cm、高さ3.0cm。35はc₉ 手法。口径22.0cm、高さ3.0cm。28はロクロ成形で、底面にヘラキリ痕を残し、口縁部内外面をロクロナデする。口径15.0cm、高さ2.4cm。これらは第3層出土。総数1546点出土。

皿 B　いずれも内面にラセンと一段の放射暗文をもつ。60・62は口縁部外面上に粗いヘラミガキを加える。62は口縁部下端にヘラケズリがある。60は口径29.6cm、高さ3.4cm。61は口径32.6cm。62は口径35.5cm、高さ3.3cm。60・62が第2層出土、61は第3層出土である。総数6点出土。

皿 C　すべてe手法。底部中央を小さくくぼませるもの(41・42)がある。口径は9.0~11.8cm、高さは2.1~2.6cm。39は灯火器。38・40・41は第2層出土。39・42・43は第3層出土。436点出土。

椀　椀 A (47~51)、椀 C (57・58)、椀 E (53)などがある。椀 A は51が口径9.4cm、高さ3.4cmでやや小型で、他は口径12cm前後、高さ3.0~4cm。外側の手法は47-c₉ 手法、48-a₉ 手法、49-a₁ 手法、50-c₉ 手法、51-a₉ 手法である。48・49・51は第2層出土、47・50は第3層出土。椀 A を除く椀類は共通して内面と口縁部外側をヨコナデし、底部は不調整とする。53-口径14.4cm、高さ4.1cm。54-口径13.8cm、高さ3.8cm。56-口径13.0cm、高さ4.0cm。57-口径14.2cm、高さ4.8cm。58-口径13.6cm、高さ4.5cm。底部外面に粘土紐接合痕跡がある。59-口径13.8cm、高さ5.1cm。53は第2層出土、他は第3層出土。椀 A 509点、椀 C 355点、その他の椀は101点出土。

高杯　68は脚部内面に棒を芯にして成形した痕跡がある。裾部内面に「政所」の墨書きがある。杯部径18.2、高さ14.9cm。第3層出土。65は内面にラセン暗文と放射暗文を飾る。口径30.3cm。第3層出

土。66は暗文をもたない。口径29.6cm。第4層出土。67は杯部が通常とはことなって、杯・皿類と共通する形態をとり、杯底部端に鈎をめぐらす異形の高杯である。脚部を縦のヘラケズリで面とりする点は一般的の高杯と変わらない。口縁部には杯・皿類と同様の屈曲があり、端部は巻き込むものであろう。杯部内底面にラセン暗文、口縁部内面に一段放射暗文と連弧暗文がある。口縁部と鈎の部分はヨコナデし、杯部外底面はヘラミガキする。第3層出土。総数595点出土。

蓋 36は杯Bの蓋で、37は壺Aの蓋と考えられる。ともに口縁部外面・頂部外面を丁寧なヘラミガキを施す。36は口径16.4cm、37は口径17.8cm。杯B蓋は総数92点、壺蓋は2点出土。

壺A 69は須恵器壺Aと同形である。体部に三角形の把手を貼りつけ、口縁部外面と高台外面を除く外面全体をヘラミガキする。口径14.0cm、高さ12.5cm。総数17点出土。

甕 70は小型の甕である。ほぼ完形。体部上半はまるくならず直線的にのびる。体部内面上半は縦のヘラケズリ、下半は同心円状具痕を残す。体部外表面を平行叩きした後、ハケメ調整する。口径14.5cm、高さ12.9cm。第2層出土。71は小型の甕もしくは壺である。器面が荒れ手法は観察できない。口径12.2cm、高さ7.3cm。埋立土から出土した。74は球形体部の中形甕である。体部外表面はハケメ、内面上半及び口縁部内面にもハケメがある。口径22.6cm、高さ21.6cm。第2層出土。73は長胴ぎみの大形の甕。口径31.8cm、高さ34.6cm。第2層出土。72は高台状の台脚がつく甕で、平城宮S-B7802(『平城宮発掘調査報告X』pl.131-36)に類例がある。第3層出土。甕Aは総数3063点出土。

鉢 64は平らな広い底部に内湾ぎみの口縁部がつく。口縁端部が小さく屈曲する。a₃ 手法。口径20.2cm、高さ6.0cm。第2層出土。55は小さな平底に大きく内湾する口縁部がつくもの。口縁端部は内側に小さく肥厚する。内面全体に煤状の物質が付着する。b₁ 手法。口径13.0cm、高さ4.9cm。第3層出土。総数7点出土。

盤A 63は底部外表面をヘラケズリする。口径22.4cm、高さ5.3cm。第2層出土。総数23点出土。

甕 総破片数は1000点に及ぶが、全形のわかるものは2個体に過ぎない。75は背面を欠く他は大部分の破片が残るもので前面に方形の焚き口をくりぬき、肩を貼りつける。体部両側面の対称位置に円孔をあける。体部外表面は縦方向のハケメ、体部内面及び肩面にはナデとヨコナデで仕上げる。肩前面及び体部内面には煤が付着し、使用の跡が著しい。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。前面幅35.6cm、前面肩部分での高さ35.2cmである。甕はそのほとんどが小破片であって、破片の接合に努めたものの接合するものは少なく、個体数の算定には困難な条件が多い。ここでは個体の識別が比較的容易な肩部分をとりあげ、破片数、出土層位について述べる。肩部分の総破片数は438点である。肩の向かって正面、右側、左側の各部分毎に記す。正面は第1層-1点、第2層-42点、第3層-145点、第4層-7点である。右の部分は第1層-1点、第2層-25点、第3層-80点、第4層-2点である。左の部分は第2層-30点、第3層-85点、第4層-11点である。総体的にみて、第2層および第3層が多くを占める。これから敢えて個体数を算定するならば、最大値は各部分の総和から、429個体、最少値は部分数で最も少ない値から、108個体ということになろう。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯E・杯L・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・皿E・椀B・高杯・鉢A・鉢F・盤・壺A・壺A蓋・壺B・壺C・壺G・壺H・壺K・壺L・壺M・壺N・平瓶・横瓶・甕A・甕Eなどの器種がある。

杯A・E・L 84・85は杯L。84は口縁部と底部との境が稜をなす。口径19.5cm、高さ4.6cm。第3層出土。85は口径17.9cm、高さ3.0cm。第4層出土。89は口縁部中位に2条の凹線を巡らし口縁部

上半は薄く立上がり、1条の凹線を巡らす。口径17.3cm、第3層出土。88は杯Eで、口縁端部は内傾面をなす。口縁部外面中位と底部外面をロクロケズリする。口径16.8cm、高さ4.6cm。第3層出土。杯Aはいずれも底部ヘラキリのまま。94-口径11.8cm、高さ3.5cm。87 口径15.1cm、高さ3.4cm。95-口径10.8cm、高さ3.0cm。81-口径16.6cm、高さ4.4cm。80-口径16.5cm、高さ5.1cm。80・81・94・95は第3層出土、87は第4層出土。杯A460点、杯E 8点、杯L 40点出土。

杯B 106-口径15.3cm、高さ4.6cm。90-口径16.5cm、高さ5.1cm。107-口径13.0cm、高さ4.2cm。108-口径10.6cm、高さ3.6cm。106は第2層、90、108は第3層、107は第4層出土。2198点出土。

杯B蓋 82・83は環状つまみをもつ。82は頂部が高く端部で強く屈曲する。口径20.0cm。83の頂部は低平で端部の屈曲は82に比べて弱い。口径20.0cm。いずれも丁寧なロクロナデとナデで仕上げる。82は第3層出土、83は第2層出土。105 口径16.1cm。104-口径14.6cm。101-口径12.1cm。102-口径13.3cm。99-口径9.4cm。103-口径13.0cm。98-口径12.1cm。105は内面を硯に転用している。102が第2層出土、他は第3層出土。97は縁部が強く屈曲し頂部に突帶をめぐらす蓋である。口径13.0cm。第3層出土。総数2423点出土。

皿 91は口縁部に屈曲がある。口径22.0cm、高さ2.6cm。92は口径21.0cm、高さ2.8cm。86・93は皿Cである。86は口径17.6cm、高さ2.2cm。93は口径15.0cm、高さ1.8cm。96は皿Eで口径10.1cm、高さ2.0cm。いずれも第3層出土。皿A115点、皿B106点、皿C246点、皿E 4点出土。

椀B 100は口径9.8cm、高さ8.0cm。第2層出土。総数5点出土。

壺A 134・135とも体部下半はロクロケズリする。135の底面には爪状圧痕がある。134は高さ14.5cm。135は高さ16.0cm。ともに第3層出土。総数33点出土。

壺B 131は肩部と体部の境に凹線をめぐらす。第2層出土。総数2点出土。

壺C 110は口径3.7cm、高さ5.2cm。第2層出土。総数3点出土。

壺G 125は底部糸切りで体部下半をヘラケズリする。高さ20.2cm。126は壺Gの祖型的なものである可能性がある。いずれも第3層出土。総数12点出土。

壺H 118は高さ8.5cm。115は高さ5.1cm。いずれも第3層出土。総数18点出土。

壺K 137は高さ22.0cm。第3層出土。総数11点出土。

壺L 120・130は体部中位以下を軽くロクロケズリする。120は高さ11.0cm。120は第2層出土。123・124・130は第3層出土。総数34点出土。

壺M 121・123は体部外面をロクロケズリする。すべて底部糸切り。122は第2層、121・123は第3層出土。総数19点出土。

壺蓋 113は壺Aの蓋。口径6.6cm。117は、口径5.3cm。いずれも第3層出土。63点出土。

平瓶 111・112は小型品で、古いタイプ。129は把手・高台をもつ新しいタイプで、口縁部が受け口状をなす。いずれも第3層出土。111は第4層出土、他は第3層出土。21点出土。

横瓶 136は内面に同心円当具痕、外面は平行叩きのちカキメを施す。3点出土。

甕 132は「く」の字状の口縁端部が外に肥厚する。体部内面に同心円当具痕、外面は縦位の平行叩目をめぐらす。口縁部外面に「十」の籠書きがある。口径17.5cm。第3層出土。152点出土。

黒色土器 総破片数97点ある。杯A・杯B・皿A等の器種がある。完形が2点、3分の1ほど残るもののが2点、他は細片である。両面を黒色処理する黒色土器Bは小片1点（第2層）、他はすべて内面のみを黒色処理する黒色土器Aである。内面に渦文状の暗文をもつものがある（18点）。杯A（46）

は口径13.6cm、高さ3.2cm。第2、第3、第4の各層から出土したものが接合する。

杯B 44は口径16cm、高さ4.6cm。第3層出土。45は口縁部内面が沈線状をなす。口径は16.6cmで高さ4.6cm。第2層出土。いずれも黒色土器A類。

44は奈良時代の土師器杯Bと共に通する器形で、8世紀に入る可能性がある。これに対して45は黒色土器の盛行する段階に出現する新たな器形（楕形）であり、9世紀後半に属するものであろう。

転用硯 他の器種を硯に転用した転用硯がある。すべて須恵器であって総破片数211点ある。最も多いのは須恵器杯B蓋内面を利用したもので185点ある。ほかに皿B底部内面（2点）、皿B蓋内面（2点）、杯B底部17点（うち内面利用2点、外顔利用15点）がある。また蓋底部内面、蓋底部外顔や壺体部破片内面を利用したもの（各1点）もある。いずれも硯に用いた面はつるつるに磨滅し、墨痕が残る。朱墨の硯に用いたもの（杯B蓋内面利用）も7点ある。総破片数211点の内、第2、第3層の両層で200点と全体の90%以上を占める。平面的にみた場合も出土状況に特に偏りは認められない。なお転用硯のうち、杯B蓋には環状つまみを持つものが2点ある。個体ごとの所属年代の判明するものでは8世紀の前半から後半にわたる各時期のものがある。

漆付着土器 土師器・須恵器に漆の付着したものがある。土師器が113点、須恵器が608点で総破片数721点を数える。土師器、須恵器ともに第3層が最も多く第2層がこれにつぎ、他の層は少ない。土師器・須恵器とも出土状況をみると特に分布の集中する箇所ではなくほぼ一様に出土している。

土師器では壺Cが60点と54%を占め、他は杯A（4点）、皿A（4点）、皿C（3点）、楕A（3点）、楕C（1点）、壺（3点）、盤（2点）、不明（33点）。出土層は第3層が最も多く52点、次いで第2層38点、第4層10点、他13点である。

須恵器では器種別にみると、壺類（壺A、壺しなど）が480点と79%を占める。その他は杯A（11点）、杯B（10点）、杯B蓋（5点）、鉢A（4点）、平瓶（3点）、皿A（2点）、皿E（1点）、盤（1点）、不明（91点）である。層位別では第3層が462点で最も多く、次いで第2層（101点）、第4層（41点）、第1層（4点）と続く。これらの土器は漆容器として用いられたことは明らかである。多くの例では漆は器体の内面に付着するが、漆が上器の破れ口にまで及ぶものも少数ある。

白色物質付着土器 土器の内面に石灰状の白色物質の付着するものがある。この物質は先にも記したように水算土（gibbsite）である。総破片数50点あり、すべて須恵器に限られる。出土層位は第2層がもっとも多く27点、第3層18点、第4層4点、第1層1点となる。平面的にも分散して出土している。器種の判明するものでは壺N3点、平瓶1点、壺H1点、他は壺類の小片である。土器には厚さ1～2mmに付着している例が多く、前述した井戸S E930出土の須恵器壺N（10）のように厚さ2cmに達する例もある。

製塙土器 総破片数3000点を越す。第2、第3層出土のものが大部分を占め、平面的に見た場合も特に分布の集中はみられない。製塙土器のほとんどは細片で形態が完全に分かれる資料はなく、個体数の算定も困難である。52は内消する厚い口縁部に薄い体部が続くもので、内外面とも粗いナデで仕上げる。底部の形態は明らかでない。赤褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は脆い。口径10.4cm。他の大部分の破片もこれと同様の形態、胎土、色調、焼成の特徴をもつ。器壁の厚さは0.5～1.0cm前後のものが大部分である。外面には粘土紐接合痕をとどめるものも多い。また少数例には外面に粗い叩目を残すものや、内面に布目压痕を残すものがある。布目の密度は1cmあたり10×10本程度の粗いものと30×30本あるいはそれ以上の細かいものとがある。

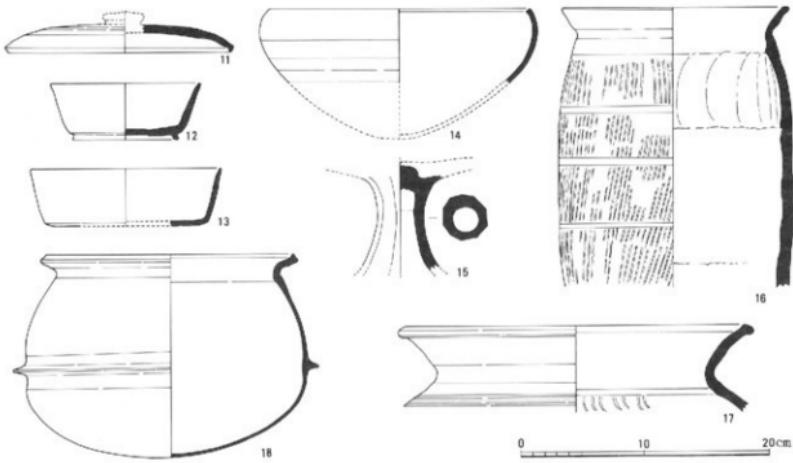
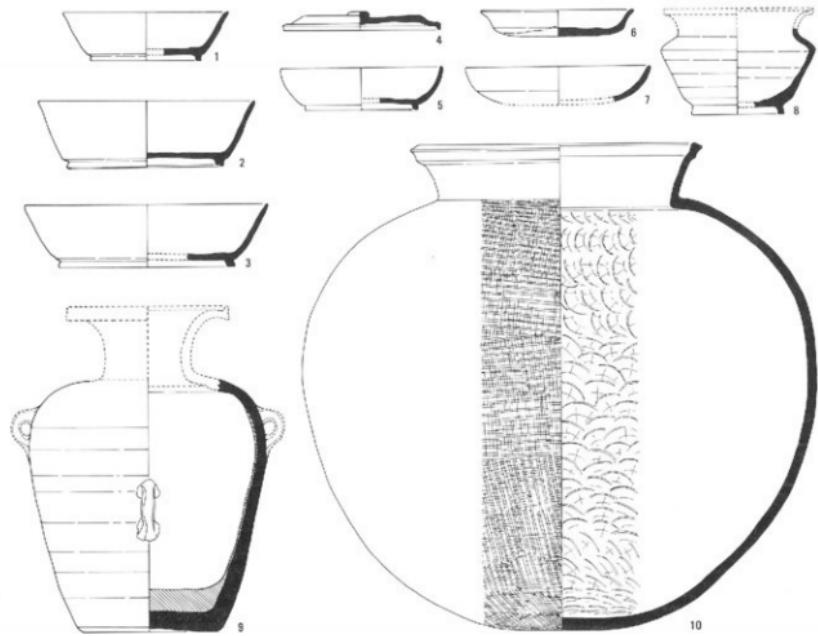


fig.12 上器実測図1) (1~10: S E930, 11~17: 包含層, 18: S K903)

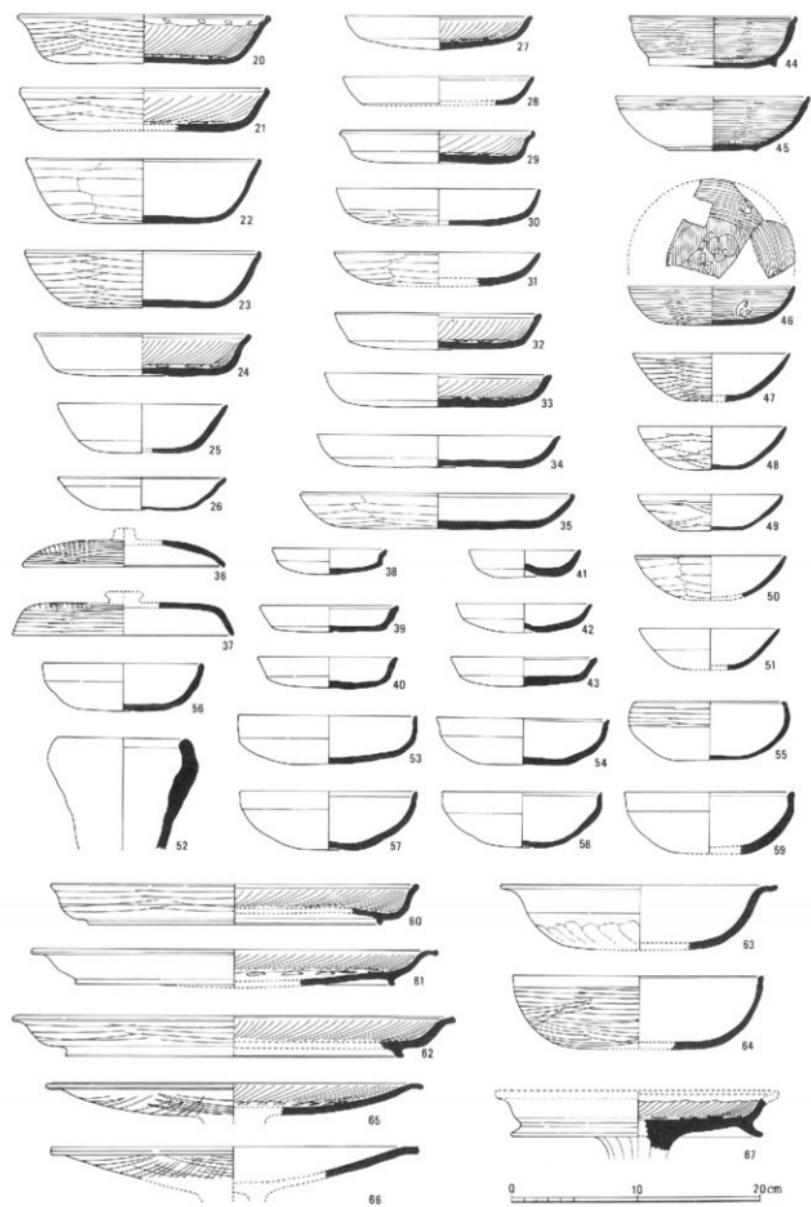


fig.13 土器実測図(2)

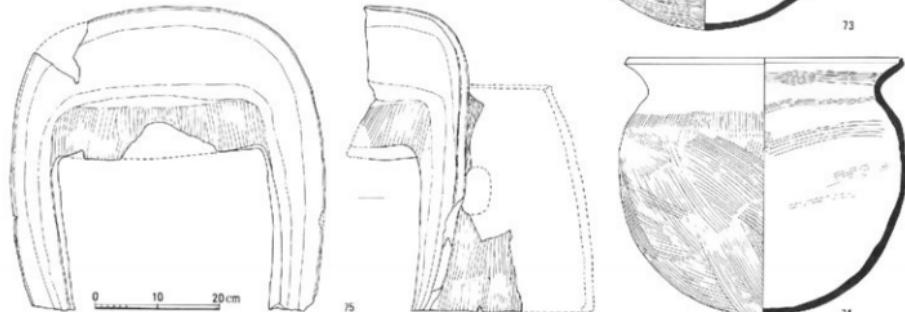
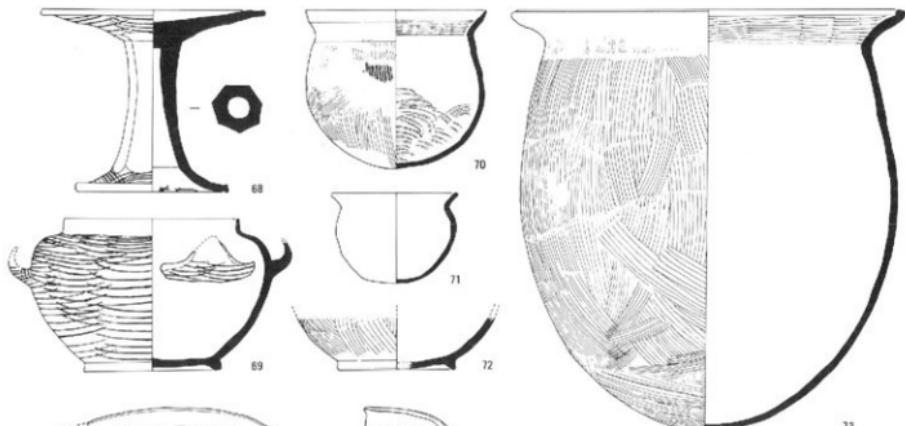
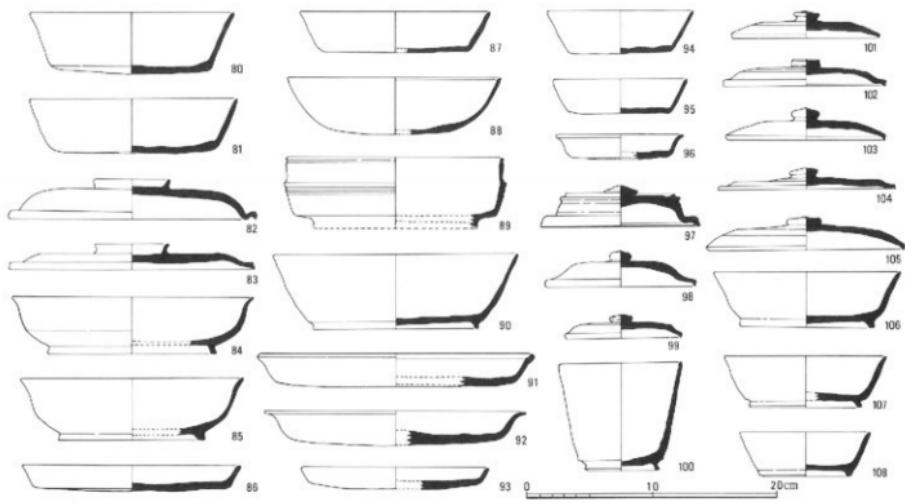


fig.14 土器実測図(3)

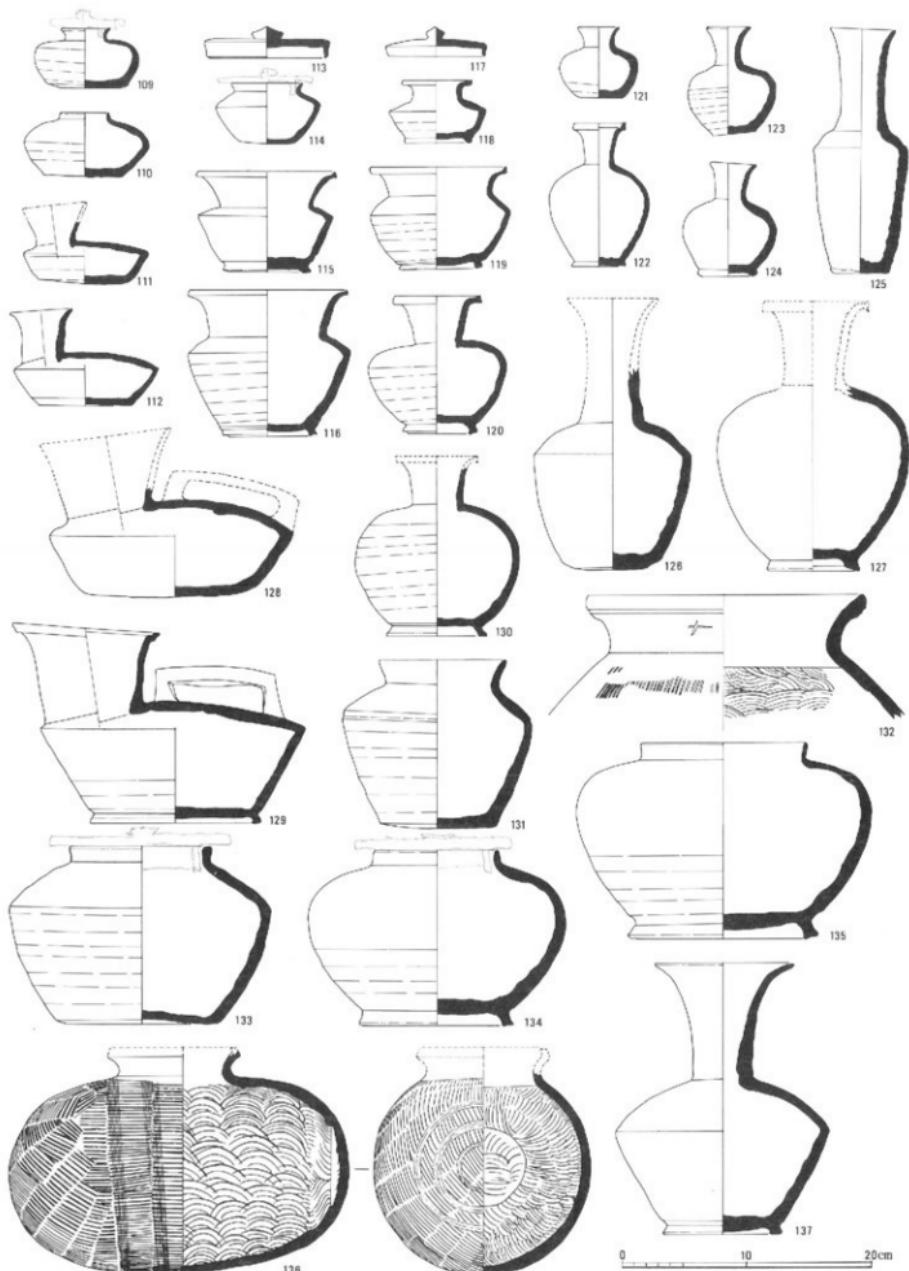


fig.15 土器実測図(4)

B 祭祀用土器・土製品

(i) 墨書き人面土器 (fig.16~18、PL.10・11)

西側溝 S D920の堆積層から人面や墨線を組み合わせた文様を描いた土器が総数509点出土した。層位毎の内わけは、第1層8点、第2層114点、第3層347点であり、第3層が圧倒的に多い。第4層出土のものは、人面や人面を描いた土器で全容が知れるものはない。他の遺物と同様に肩を越えて接合するものや、同じ形態のものが肩位を超えて認められるので、主として第2層・第3層出土のものについて一括して記述する。人面や墨線を組み合わせた文様が描かれた器種は、高杯の1例 (fig.24の2) を除く他は、疊か壺のいずれかである。壺形態には、日常生活で使用する壺と同形態のものと人面を描くために特別に作られたものがある。後者については、形態的には壺であるが、前者と区別する意味で以下壺Bとして記述する。人面が描かれるもう一つの器種には口径10cm、器高5cm程度の小型壺があり、これについては壺Cとして記述する。また墨線を組み合わせた文様については、人面ではないか、墨書き人面土器の祭祀と関連があるのでここで扱う。また人面を描いていないが、人面を描いた壺Bと同形態のものも約200個体程出土しており、これらも人面を描いたものと一緒に祭祀に使用されたと考えられるので、これについても合わせて記述することにしたい。

日常使用する壺に人面を描いた例は50点ある。口径14.5cm、器高11cm程度の小型壺(10)と口径23cmを超える大型壺(21)があり、量的に見れば後者が多い。10は完形品であるが、底部には焼成後穿たれた小孔をもつ。おそらく、仮器としての性格を付与するために人面を描く前あるいは後に穿孔したものと思われる。球形の体部と外反する口縁部からなり、口縁端部を内側に折り返し丸く肥厚させている。胴部外面をハケメで内面をナデで調整する。胴部の相対する面に同趣の人面を描く。人面は丸い輪郭の内に顔の要素を描くが、耳・ひげの表現はない。21は別形の長い体部と外反する口縁部からなり、口縁部を小さく上方につまみ上げる。胴部外面をハケ目で内面をナデで調整。破片のため人面の全容は定かでないが、輪郭線はなく耳の表現をもつ。

人面用に特別に作られた壺Bには、さまざまな形態があるが、形態の差を超えて次のように共通する特徴がある。一つは、製作法であり、楕や皿状のものを型として使い、型の内に粘土板・粘土紐を押し付けて底部を作り、その上に粘土紐を巻き上げ上部を構成する点である。もうひとつは、調整における共通性であり、胴部内面をナデや削りで調整するが、外面は頸部直下もしくは底部近まで軽くハケメを加える例(35)も若干存在するが、多くは調整を加えず体部外面に粘土紐痕跡と型のあたった痕跡をとどめる。壺Bで全体の形が知れるものは数例にすぎないが、以下のようないわゆる形態がある。

A形態 (1・2)は出土した壺B類では最も大きく、比較的狭い底部と直線的に外方に開く、頸部直下で内側に折れ曲る体部と外反する短い口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。**B形態 (8・19・35・36・38)**は、比較的広い底部と丸味をもつ胴部と外反する長い口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。頭部のやや下位に上向きの把手を付す例(35)もある。胴部内面をナデ調整するもの(8・19)、ハケメを施すもの(36)、ヘラ削りを施すもの(35)がある。**C形態 (11・13・14)**は、丸味を有する胴部と外反する比較的長い口縁部からなり、口縁端部を内側に折り返し丸く肥厚させる。**D形態 (15・39)**は、比較的広い底部と張りのない長胴部と直線的に外方に開く口縁部からなる。口縁端部を小さく上方につまみ上げる。胴部内面をヘラケズリするもの(39)とハケメを施すもの(15)がある。**E形態 (31・37・40)**は、比較的狭い底部と内湾気味に外方に開く胴部と外反する口縁部か



fig.16 墓中人面土器実測図(1)

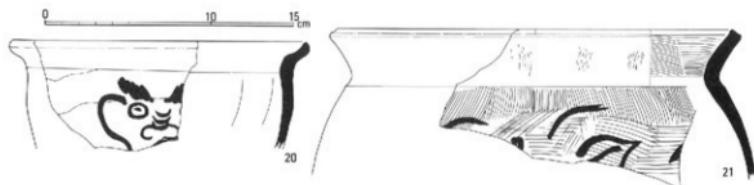
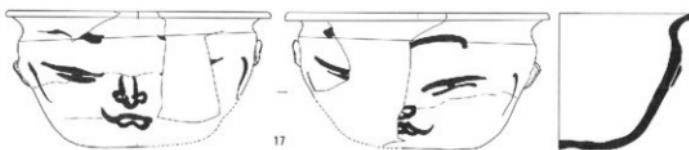
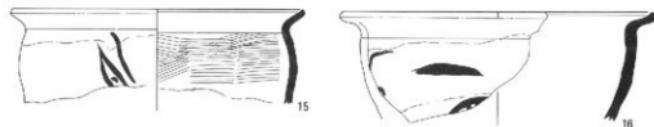
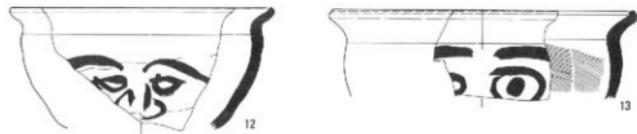


fig.17 墓書人面土器実測図（2）

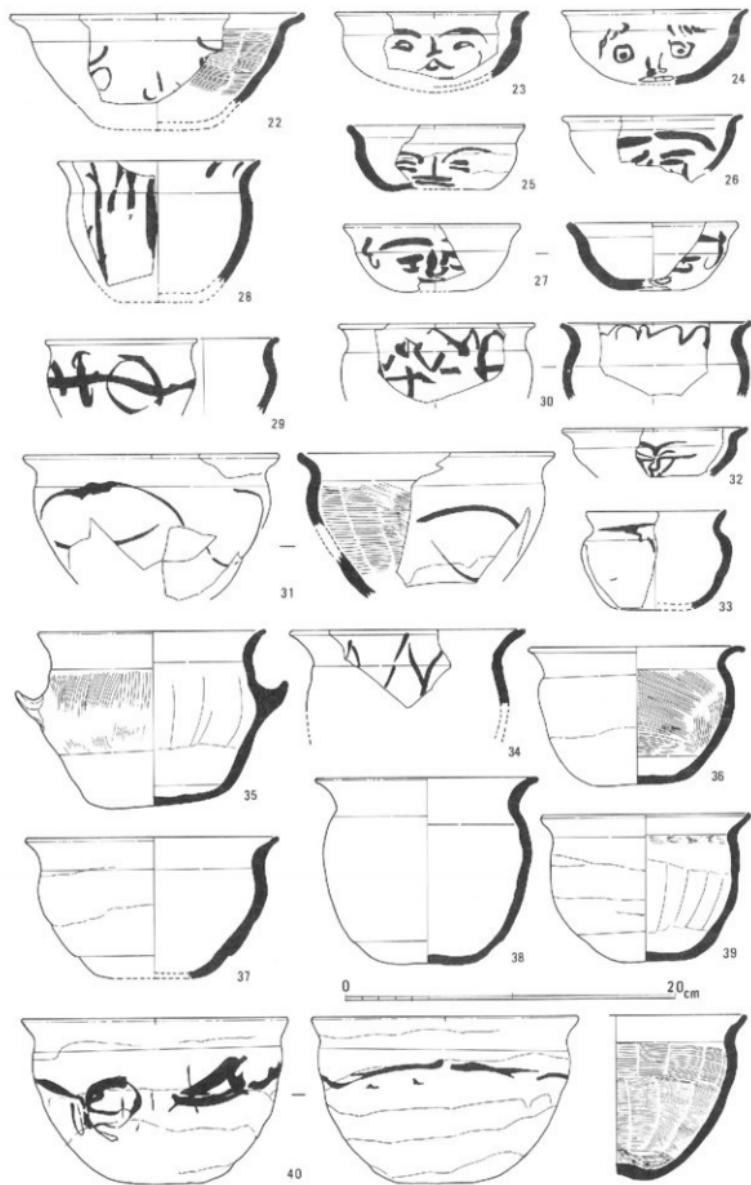


fig.18 墨書き面土器実測図（3）

らなる。口縁端部はわずかに肥厚する。胴部内面をヘラケズリするもの（37）とハケメを施すものがある。F形態（7・16・17）は、比較的狭い底部と大きく外側に開く胸部と直角に近い角度で折れ曲る短い口縁部からなる。G形態（20）は、長胴と内済する口縁部からなる。H形態（6）は胴部以上を欠損するが、外反する口縁部で端部近くを水平方向に引き出している。端部は丸くおさまる。I形態（12・18・22）は、器高が口径の半分程度で外方に開く胸部と内済気味に外方に開く口縁部からなる。端部は小さく肥厚する。J形態（3～4・9）は、I形態に近いが、さらに小型化し、口縁端部は、小さく上方に突出する。F・J形態にはボタン状の貼り付け把手を持つ例がある。

壺C（fig.19の28～39）は前述の壺Bと異なり、粘土紐を巻き上げて成形している。胴部内面は、ヘラケズリやナデで調整するが、外面は調整せず粘土紐の痕跡をとどめる。壺Cにもさまざまな形態があり、ここでは、器高が口径の半分前後のものについて、口縁部が外反気味に開くもの（A形態-23）、外反気味に開き、端部が小さく肥厚するもの（B形態-30）、口縁部内面がわずかにくぼむものの（C形態-25）、小さな肩をもつ体部と直角に近い形で立ち上る口縁部をもつもの（D形態-31、69）に分類できる。この他に長胴で比較的長く外反する口縁部をもつE形態（29、34）がある。壺Cは、総数180点程出土したが、このうち人面もしくは墨線で文様を描いた例は16点しかない。人面を描かない壺Cは描いたものと同様に人面土器祭祀に使用される場合と、後述する小型炊飯器セットの壺としても使用された可能性がある。

壺B・Cで描かれた人面の数が分る例では、1面だけ描かれた例は2例（3・5）だけで、他は脇の相対する2面に描かれている。1面だけ描いた例では、対する面に縦線を描くもの（3）と「+」の墨書きを2ヶ所に描くもの（5）がある。2面に描く例で両面が観察できるものでは、両面ともほぼ同様の人面を描いており、両面とも同一人物の手によるものと思えられる。顔の輪郭を描く例は少なく、9・19は耳以下の輪郭を11は全体の輪郭を表す。頭髪を表す例も少なく、11・18の2例しかない。眉の表現は、一本の横線で表現するものが正倒的に多い。墨線を數本組み合せて眉を表現する例（2・11・14・20・24）も少數ある。目の輪郭は、一筆で丸く表現する例（2・13・20・24）、一本の横線だけで表現するもの（4）、二筆で表現するものとがある。二筆で表現する例では、横線を連結して輪郭を示すもの（1・10・12・18・23）と独立した2本の線で表現するもの（3・7・8・17・25～27）がある。目玉は点もしくは短線で表現する例が多くを占めるが、二筆で目の輪郭を表現するものには省略される場合もある。鼻は二筆ないし三筆で下側面を丸く左右対称に表現する例が正倒的に多いが、ボタン状の貼り付け粘土片や把手を鼻にみたてたもの（9）、逆「T」字形に表現した例（23）、一本の縦線で表現する例（4）、弧線を數本組み合わせて表現する例（20）等がある。口の表現についてはさまざまであり類別しないが、2・24のように歯を表現する珍しい例もある。口ひげ、あごひげ、ほほひげをすべて表現する例は少ない。みけん部にはくろあるいは白毫状の点を存する例（6）もある。顔の表現とは直接関係ないが、口縁部内面や胴部内面に連続する弧線（14）や縦棒（11）を描く例がある。後者については、人面を描く際の割り付け線の可能性もある。

壺Bの形態と人面の表現法、表情とは、例えば8と19のように対応関係が認められるが、全容を知れる例が少なく今後の課題としておこう。

棒線や弧線を組み合わせた文様をもつ例は、10個体程あるが、壺Bは2例（31・40）しかなく、他はすべて壺Cに描かれたものである。墨線で文様を表した例には口縁部内面や胴部内面に連続する弧線や縦線を描く例（28・30）もある。

(ii) 小型模造土器 (fig.19・PL.10)

西側溝 S D920の主として第2・第3層から小型模造土器が出土した。須恵器は、壺蓋の1例だけではすべて土師器である。瓶・瓦・壺・高杯・横瓶・壺等の器種があり、すべて粘土紐巻き上げ成形によるもので手捏製のものはない。

壺は総数31個体あり、次の4型式に分類できるが、型式と構造とは、整合する関係ないので一括して記述する。

第I型式 (16・17) 実用の壺を忠実に小型化した形で、円形に穿孔した底部と外傾度の小さい体部からなる。底部を焼成前にヘラで穿孔し、体部の相対する位置に上向きの把手を貼り付けている。7個体出土。16は胴部内面を横位のハケメで調整したのち、口辺部内外面をヨコナデで、体部内面ド半をナデで調整する。17は、体部内面をナデで調整する。

第II型式 (14) 口径8.5cm、器高7cm程度で、丸底と外傾する体部からなる。完形品がないため底部の穿孔、把手の有無については定かでないが、14の例では少なくとも焼成前の穿孔はない。

第III型式 (15) 口径10cm、器高6cm程度で尖底に近い底部と急激に外傾する体部からなる。把手を持たず底部を穿孔した例はない。口辺部内外面と体部内面をナデで調整する。2個体出土。

第IV型式 (1~8) III型式をさらに小型化した形態で、法量により更に細分できる余地もある。8個体出土。体部内面にハケメを施す例(5)は少なく、多くは体部内面をナデで調整する。

壺には、第IV型式の壺に組み合う小型品(9~13)と第I型式の壺と組み合うと思われるもの(18)がある。前者には、肩が張り口径に較べ器高が低いもの(9・10・13)と丸みのない長肩タイプのもの(14・15)がある。いずれも外反する短い口縁部をもつ。胴部内面をヨコナデ調整するものが大半を占めるが、ハケメを施した例もある。30個体出土した。後者は、球形の体部と外反する短い口縁部からなる。胴部内面は横方向の削りを施す。18と同形態のものは2個体しかなく、また、18と同様な形態で、II・III型式に組み合うと考えられる小型品はない。おそらく、I・II・III型式壺に組み合うものは、前述した人面土器の頃で壺Cとして分類した1群(28~39)が使われたのであろう。

壺は総数40個体出土した。やはり壺に対応して3型式に分類できる。

第I型式 (19) 完存する例はないが、比較的大型で実用品を忠実に模す。体部内面はナデで調整、口縁部周辺をヨコナデする。肩は粘土帯を貼り付け、丁寧にナデ調整する。14個体出土。

第II型式 (20) 型態や調整面ではI型式と同じであるが、幾分小型になる。3個体出土。

第III型式 (23~25) 口径5cm、器高4cm程度の大きさで瘤が矮少化し、調整も難になり、粘土紐を押しつけたままナデ調整を行わない例(23)もある。内面をナデで調整する。6個体出土。

横瓶(27)は、須恵器のそれを忠実に模倣したもの。製作技法まで須恵器のそれを模しており、まず平底筒状の体部を作り、体部の一側面に穿孔し、口を付す。その後に、体部上位の開口部を粘土板でふさいで成形している。2個体出土。

高杯は、すべて破片で、杯部・脚部合わせて6片出土した。脚柱部を面取りせず、縫部が狭いもの(22)と8~9世紀の高杯に普通一般に見られる脚柱部を多面体に面取りするものがある。21は杯部片であり、内面はナデで調整するが、外面は調整せず粘土紐の痕跡をとどめる。

須恵器の蓋(26)は、平坦な頂部と直角に近い角度で折れ曲る縫部からなる。口径2.8cm、器高1.7cmで、頂部には自然釉が附着する。類例には、坂寺田企堂墓地から出土した双耳瓶の蓋がある。鎮墳具として使用された例であり、本品と同様に愛知県猿投山古窯で生産されたものである。

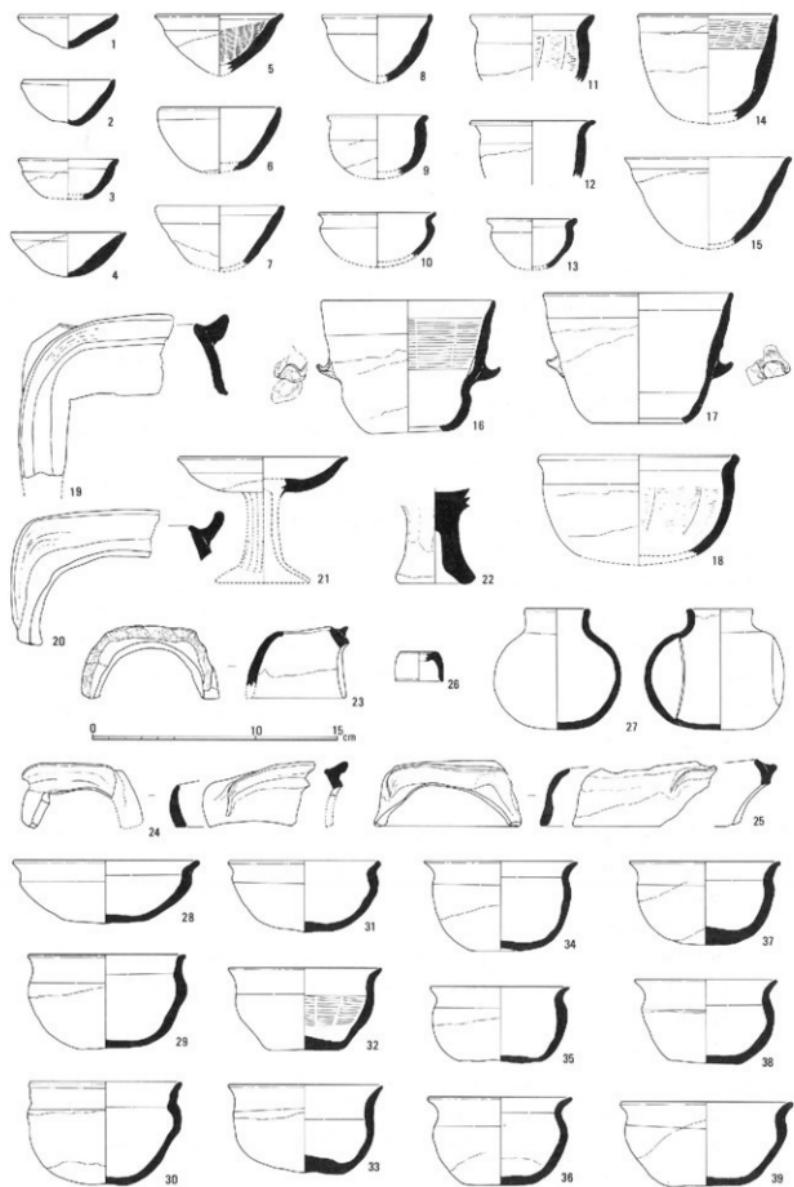


Fig.19 小型模型土器复原图

(iii) 土馬 (fig.20・P L.12)

土馬は、全形をとどめる例ではなく、すべて破片で総数142点（80個体以上）が出土。上取穴出土の1点を除き、すべて西側溝の堆積土から出土した。出土範囲は西側溝の全体にわたり散在的に出土した。西側溝出土土馬は、8世紀初頭から9世紀前半までの時期のものを作り、大きく7型式に分類できる。

（第Ⅰ型式…7・10・12） 頭部に較べ頸部が小さく、顔の側面形は頭部上位がやや立ち上がるが、全体的に反りがない。口は明瞭

な面をなさず、顎と頭部との区別がない。目・

鼻は竹管を押し付けて表現する。また鼻は、面を押し付けて表現した例（10）もある。胸の横断面は蒲鉾形～隅丸長方形を呈し、背には粘土をつまみ出して作った鞍をもつ。尾は下を向き、前肢・後肢の開きは少なくV字形を呈する。第Ⅰ型式の土馬は、いくつかの破片の観察から製作手順を以下のように復原できる。まず粘土を棒状に作り胴部から尾部を作り、四肢の付く位置を小さくつまみ出したり、凹めたりして、その位置に別に作った肢を接合する。次に別に作った頭部を胴体に接合し、粘土を延ばしてたてがみを表現する。次に粘土小片を貼り付けたたずなを作り、さらに粘土円板を折り曲げたものを頭部先端に被せ顔を表現する。後述するⅣ型式までの土馬も同様な手順で製作されている。

（第Ⅱ型式…6・13） 頭部は長くなり、顔の側面形が大きく湾曲するようになる。下顎と頭部を明瞭に区別し、口を平坦な面で表現する。目と鼻は竹管を押し付けて表現する。胸は比較的分厚く隅丸方形を呈し、背には強いナデで凹部を作り鞍を表現する例（13）と鞍の表現のない例（6）がある。尾は下降し、前肢・後肢の開きが大きくなり、丸味を有するV字形を呈するようになる。

（第Ⅲ型式…11・13） Ⅱ型式に近い形態をとるが、全体的に大きくなり、顔の反りが一段と大きくなる。頭部先端を指で押えて小さな面を作る例も出現する。胸の横断面は蒲鉾形を呈し、背にはナデで凹部を作り鞍を表現する。尾は、ほぼ水平に延び先端が上を向く。土馬としては、この型式が最も洗練された形態であり、後述する以下の型式は次第に退化傾向を示す。

（第Ⅳ型式…6） 全体的に小型化し、顔が大きいわりには頭部が短かく、四肢が太くなる。たてがみの表現も顯著でなくなる。鼻や鞍を表現する例は少くなり、尾は斜め上方に反り上る。

（第Ⅴ型式…1・4） 大きさや形態的にはⅣ型式とほとんど変りがないが、前述の型式の土馬とはまったく異なる手順で作られている。すなわち、平面形が円形もしくは橢円形を呈する粘土板から直接頭部・尾部・四肢をつまみ出し、次に適当な形に内側に折り返し、折り返した面（腹部から尾部）をナデで調整する。そのため胴部横断面は例外なく腹部面がくぼみ、尾は扁平な形になる。頭部・四肢をナデで調整した後、たたずなや顔を貼り付けている。

（第Ⅵ型式…5・8） 全体的な形や製作手順はⅤ型式に通ずるものがあるが、更に小型化の傾向を示し、調整も難になる。頭部・四肢・尾部をひねり出す粘土板が次第に薄くなり、折り返したまま調整しないため全体的にやせた感じになり、たたずなや顔の表現も痕跡程度のものになる。

（第Ⅶ型式…2・3） 更に小型化と調整の簡略化が進行し、たたずなや顔の表現もなくなる。

型式	層位	層位				不 明	計
		第1層	第2層	第3層	第4層		
I			5	1			6
II				1			1
III		3	8				11
IV		2	8				10
V		3	10				11
VI		3	4				7
VII		2					2
不 明		3	8	69	4	7	91
計		5	19	105	5	7	141

tab.4 西側溝出土土馬型式別点数

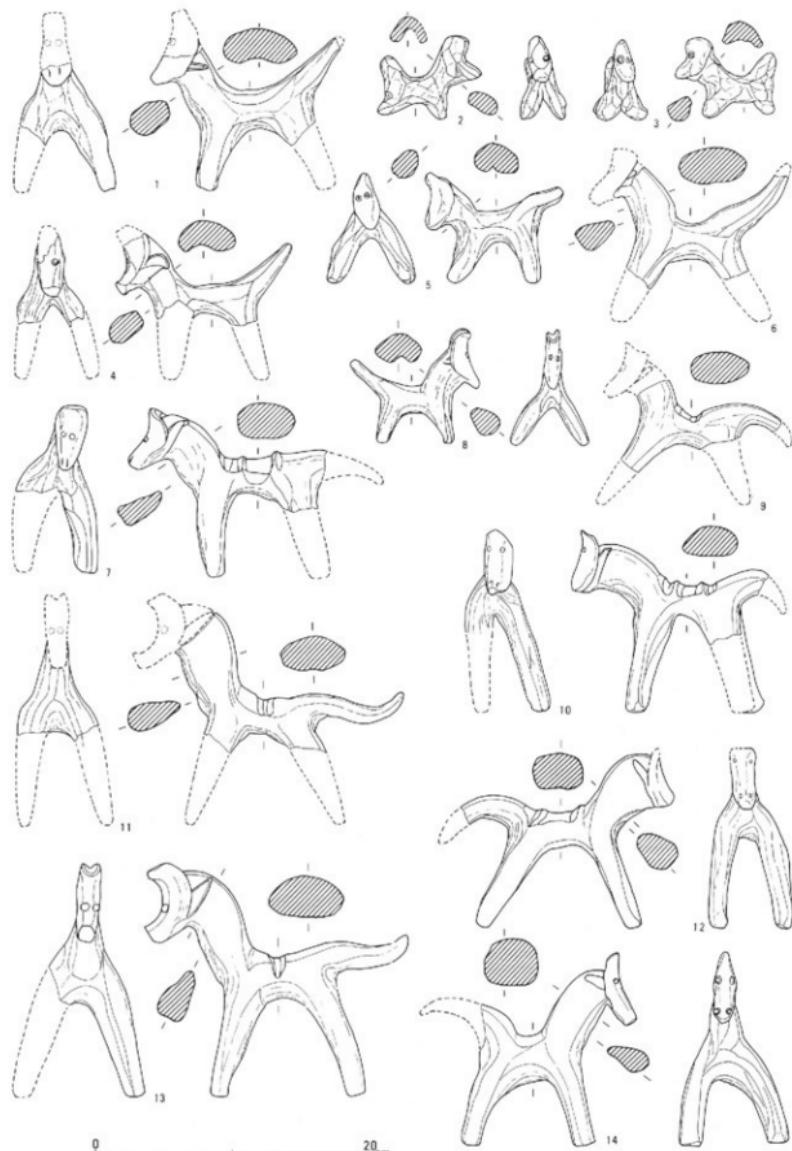


fig.20 土馬実測図

型式と層位は、tab.-4 のようになり、必ずしも整合する関係はない。次に各型式の年代について若干付言する。I 型式は、平城京左京 1 条 3坊 15坪で検出した 8世紀初頭の溝 S D485から出土したものと同型式であり、III 型式は平城京左京 4 条 4坊 11坪の土壤 S K2412や西市の井戸 S E395出土のものと同型式であり、これらは天平年間の土器を伴出している。V 型式は平城宮馬寮域にある溝から出土し、奈良末の土器類を伴出している。またⅥ型式は東 3坊 大路 東側溝出土例では 9世紀前半代の土器を伴出している。以上のような点から、前述の型式は I ~ VII の順で成開を遂げたと言えよう。

(iv) 陶硯 (fig.21)

陶硯は西側溝第 1 層から 1 点 (5)、第 2 層から 2 点 (1)、第 3 層から 6 点 (4・6~8)、第 4 層から 1 点、遺物包含層から 1 点 (2)、総数 11 点が出上した。いずれも破片であり、出土土器の全体量からみれば微々たる量にすぎない。しかし、杯 B・杯 B 盖・壺・甕の胴部を硯として使用した例が、約 200 点あり、普通一般には、こうした転用硯が使用されていたことが分る。転用硯の多くは黒墨を塗ったものであるが、朱墨を塗った例も 7 点あり注目される。

出土した陶硯には、蹄脚硯 5 点、圓足円面硯 5 点、獸足円面硯 1 点の 3 種がある。蹄脚硯には、硯部と台部とを別々に作って両者を多数の足で結合させる型式のもの - 蹄脚硯 A (6) と硯部と脚部を連続的に成形し、台部下部に粘土を分厚く巻いて基底を安定させた後、逆三角形のえぐりを入れ、三角柱状の脚柱を作り出す型式のもの - 蹄脚硯 B (7) がある。前者は、黒灰色を呈し、外堤部が極端に分厚い。外堤部外面の口脣部近くに 1 条の浅い沈線を下部には 1 条の突線をもつ。脚部を欠損するが透しの数は 26 個に復原できる。後者は、灰白色を呈し、全体的に薄く作られている。外堤部下面下半に 2 条の突帶を施し、透しの数は 24 個に復原できる。

圓足円面硯 (1) は、硯部を欠損するが、圓足部に綫長の長方形透しを 8 個配し、透しと透しの間には人面風のヘラ描き文様を施す。2 は圓足部を欠損するが、硯部が外堤より高い。3 は硯部を欠損するが、圓足部下半に突帶を付す珍しい例。4 は、底径 10.4cm を測る小型硯で圓足部 6 個の長方形透しと透しの間に格子状のヘラ描き文様を施す。獸足円面圓 (8) は、外堤部下端の内外両面を抉む形で粘土塊を取り付け、ヘラで獸足風にケズり出したもので圓足部下端外側の径は約 20cm を測る。

(v) 施釉陶器 施釉陶器類も極めて少なく次に述べる 5 点しか出土していない。西側溝の第 3 層からは、遅元され銀化しているため二彩か三彩の区別はつかないが奈良三彩の破片が 2 点出土した。1 点は長頸瓶、他は小壺である。また西側溝の最後の堆積である第 1 層から黒縞 14 号様式の灰釉碗片が、西側溝を埋立てた赤褐粘土中から黒縞 90 号窯式の灰釉陶器片と軟陶綠釉の花瓶片とが出土しており、西側溝の存続時期を知る手掛りとなる。

(vi) 土製円板・紡錘車・土鍬 (fig.32・PL.12)

直径 3cm 未満・厚さ 5~7mm 程度の小円板 2 点 (3・4) が、床土下の暗青灰粘土層から出土した。いずれも土師器片を利用したもので全面をすべて成形している。暗青灰粘土は奈良時代から江戸時代までの遺物を含んでいたため、その時代については特定できない。

紡錘車は、西側溝の第 2 層から 1 点 (5)、第 3 層から 3 点 (7~8)、第 4 層から 1 点 (6) 出土した。いずれも土器片を円板形に加工したものである。5 は土師器の壺の胴部片を加工したもの。6・9 は土師器の杯あるいは皿片を加工したもので、穿孔は上下両面から行っている。9 は格子状の

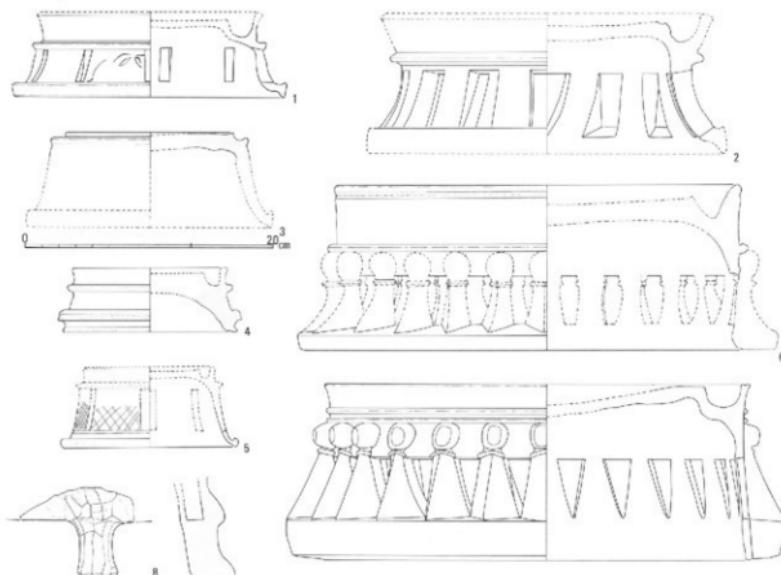


fig.21 陶器実測図

ヘラ描き文をもつが、円板製作時に施したものでなく、本来の器に焼成後に線刻されていたものである。いずれも周縁部をうち欠いたまま調整せず未製品の可能性もある。

7は須恵器の壺の胴部片を円板状に打ち欠き、片面から穿孔しかけた未製品である。8も須恵器の杯あるいは皿片を円板に近い形に荒く打ち欠いたままで調整を加えていない未製品である。

土鍤は西側溝第1層と第3層から各1点ずつ出土した。いずれも土師質で棒状品に粘土を巻き付け訪籠状に成形したもの。

(vii) 用途不明土製品 (PL.12)

11は丸瓦を半載したような形態で凸面に格子状のヘラ描き沈線文を施し、その後さらに突き刺し列点文を配したもの。須恵質で側端面・上端面を箇削りで、凸面凹面はナデで調整する。内面には粘土紐痕跡をとどめる。西側溝第3層出土。厚さ2cm、残存最大長17cmを測る。10は側面形が分銅形を呈し、上端側面に円孔が穿れた土製品で、体部を欠損する。須恵質であるが焼きが甘く全面磨耗している。壺壙上端部片の可能性もある。西側溝第1層出土。

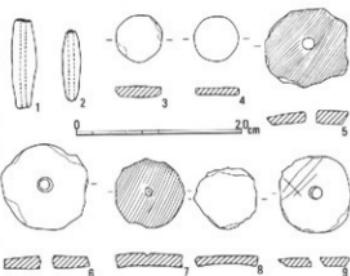


fig.22 土製円板・紡錘車・土鍤実測図

C 墨書土器 (fig.23・24, PL14, tab. 5)

墨書き土器は右京8条1坊々間大路の西側溝 S D920・井戸S E930から計615点出土し、そのうち土師器が144点、須恵器が471点となっている。以下、墨書き土器のうち注目されるものを選んで、それぞれ若干の注釈をつけておくこととしたい。特に記述のないものは、S D920出土である。

政所（1） 政所は官司・貴族等の家・寺院等の政務を執る事務機関で、正倉院文書に多数散見するが、平城宮内から出土した墨書き土器には政所はみえない。この墨書き土器の政所もこれらの類の機関であろうか。所属する官司・貴族等についてはわからない。

余戸郷／道□□部／鴨□万呂（90） 郷名と人名とを記したもの。倭名抄によれば、京付近の余戸郷としては、大和国葛上郡・山城国宇治郡・綾喜郡・河内国石川郡・若江郡・淡川郡などにみえる。

□□／九々八十一／□（8） 土器に九九を記した例は他に例をみないが、木簡・漆紙等にはしばしばみられる。九九を記した木簡の例は、平城宮 S D3154（平城宮本筒II-2730号）・平城宮 S D5788（概報6）・平城宮 S D3236-C（概報12）・藤原宮 S D170（木簡番号666）がある。また、漆紙では宮城県下塙遺跡で出土したものがある。

□／大田部人足一（外面） 頬田一（内面）（37） 内外面の筆は異筆、大田部人足の人名は他の史料にはみえない。大田部氏は陸奥・相模・下野・常陸・下総等に分布している。頬田もあるいは氏姓か。頬田は京近辺では頬田宿禰が大和国平群郡8条3里26坪にその祖の墓をもっていたことが頬田寺班田図から知られる。

南家（17・78） 墨書き土器中にみえる南家・東家などの用語は多く、ある区画、たとえば駅家・郡家などの一区画の中で家屋の方位による位置関係から生じた名称のように思われる。類例としては静岡県袋井市坂尻遺跡からは東家と記したものの2点、平城京東3坊大路の東側溝から中家（1点）、また石川県寺家遺跡から中家（1点）などがある。もっとも、藤原氏の北家・南家は家の位置関係を示しているので、同一区画の中での呼称ではない例もある。

林（7・10・11・16・18・23・28・32・67・71・79・89）

計12点あって、おそらく林は氏の名を記したものと思われるが、右京計帳の8条1坊の分には林氏はみえない。姓氏録には左京の諸蕃に林連がみえるが、この林の墨書き土器とは関連不明。林の文字の下に○印や上に合点をほどこしたもの、林神と記したものがあるのは、林の氏の集団内部での土器の帰属関係を示すものか。このように氏の名前を記した墨書き土器が多数出土したのは、平城宮・京跡内の発掘調査でも現在では他に例がない。その集中的な出土状況から、林氏の住居が右京8条1坊11坪近辺に存在した可能性が極めて高いと言えよう。

桑（21・35） これも林と同じく氏の名を記したものである可能性がある。桑のつく氏としては、桑内・桑原などが考えられ、前者は桑内連乙虫女か左京人として統日本紀神護景雲二年十月条にみえ、また桑内真公は左京8条4坊に家一区



fig.23 墨書き土器実測図

をもっていた（大日古-6-427）。また左京8条3坊から桑内と記した墨書き土器が出土している。後者は桑原連真島が左京人として続日本紀の天平神護2年2月の条にみえる。

大宅（25・80） 同じく氏の名前であろう。大宅氏は姓氏録左京別にみえ、右京人として大宅廣麻呂が続日本紀神龜三年正月に、また右京3条4坊に本貫をもつものとして大宅岡田臣虫麻呂、同戸口人上（大日本古24-92）、右京に本貫をおくものとして大宅岡田臣末足（大日本古24-554）、がみえる。また左京については左京8条3坊戸主として大宅首童（大日古6-567）子がみえ、同坊に板屋五間をもっていたことが知られる。大宅氏は春日氏と同祖で、添下郡に古くから根据地をもつ氏族で、おそらく、これらの大宅氏は平城京造営にともなって京内に編附されたものであろうか。

民使（4） 氏の名を記したもので、民使は大和の輸陳を出身とする渡来系氏族。西市員外令史に民使毗登日理が続日本紀宝龟元年三月にみえる。

右京（54） 行政区画としての右京を土器に記すことは不自然であり、あるいは右京職に属す土器として註記したものかも知れない。

壹月女（27）、□年女（68・73）、七女（34）、真刀自（49）、御女□（24）、いずれも女性の名を記したもの。

（呪符） 土器の蓋内外両面に呪符を墨書きしたもの（fig. 24）。文字としては、「急々」・「々如律令」・「□申/大將軍」などがみえる。前二者は「急々如律令」の一部。奈良時代の例で土器に呪符が記されたものとしては初出例である。SE 930出土。8世紀にみられる呪符の例は、静岡県浜松市伊場遺跡から出土した木簡2例があるが、今回出土したものは、特に符籤を明確に記している点では注目される。7世紀の例としては、藤原京本薬師寺の西南隅の発掘調査で本薬師寺に南面する大路の北側溝から出土した木簡がある。²呪符としては最古の例で、この例は符籤を一面に、他面に呪語と文字とを記しているようにみえるが、文字は判読できない。今回出土した呪符ならびに上述した例は、日本における道教的呪符の始源を語る史料として注目される。呪符は中国・朝鮮から伝來したもので、古くは漢代の顎墓文・晋の「抱朴子」にみえるが、中国・朝鮮の呪符、特に呪符をともなう同時代の史料は、よくわかっていない。たまたま管見にはいたるものとしては、スタイン収集の5775文書、ペリオ収集の2153文書にみえ、呪語・符籤をのせている。

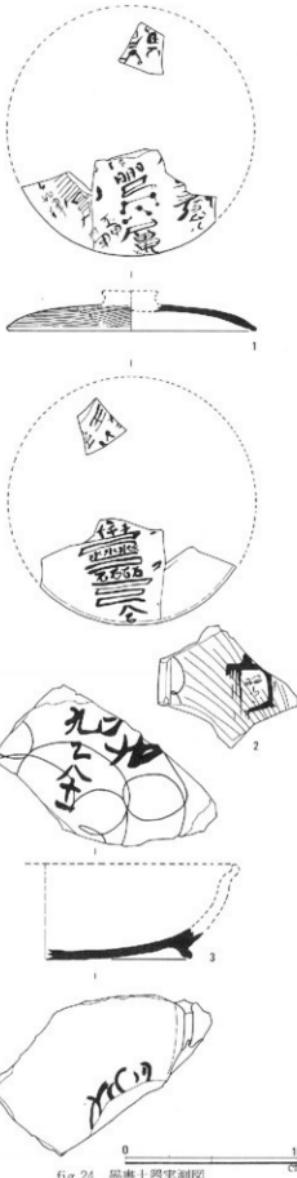


fig.24 墨書き土器実測図

両書の年代については、書風からみて古いものではなく、隋～唐代のものかと思われる。

この他に鳥と馬を描いたもの（fig.23）、人面を描いた墨画がある（fig.24-2）。

今回の調査で出土した墨書土器は、平城宮内から出土するそれとは性格を異にしている。宮出土の墨書土器は官司名・人名・物品名・氏名・習書等であって、林の例にみるような同一氏の多数の墨書土器がまとめて出土した例はない。このような例は、むしろ集落跡から出土する墨書土器の場合にまみられるものである。また右京の墨書土器は西侧溝が西市に近い堀川であったことと関連するのであろうか、その点では西と記された二点の墨書土器の存在も注目される。

註1 浜松市教育委員会『伊場木包』1976年

2 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告6』1976年

番号	墨書内容	器種	記載場所	番号	墨書内容	器種	記載場所
1	政所	高杯	幅内	46	船木口染 / 凡	兼	底外
2	定	“	脚柱外	47	土	杯B	“
3	千	皿A	底外	48	王	“	“
4	民使	—	—	49	真刀自	杯B蓋	頂外
5	上	杯か皿	底外	50	家	“	“
6	尔	杯C	“	51	水	杯B	底外
7	林□	杯か皿	“	52	甲	—	外面
8	□□/九々ハト一/□	杯B	“	53	乎賣	杯か皿	底外
9	天	杯A	口外	54	右京	杯B蓋	頂外
10	林○	杯か皿	底外	55	千	杯A	底外
11	林	“	“	56	伊都器	杯B	“
12	上	杯A	“	57	達	杯B蓋	頂外
13	平	杯か皿	“	58	十	杯B	底外
14	今人	“	“	59	一	杯B蓋	頂外
15	速	“	“	60	片	杯	底外
16	林神	杯B	“	61	“	“	“
17	南家	杯B	“	62	“	畫蓋	頂内
18	林	杯か皿	“	63	か	杯B蓋	頂外
19	大□	皿A	口外	64	□□/吉	—	頂内
20	友	杯B蓋	頂外	65	大	杯	口外
21	桑	“	“	66	美	杯B蓋	頂外
22	器	“	つまみ	67	林□	杯B	底外
23	林	“	頂内	68	■印女	“	“
24	御女□	杯B	底外	69	行	杯A	“
25	大□(宅カ)	“	“	70	目々	杯	“
26	伎	杯	“	71	林	杯か皿	“
27	(外) 壱月女(内) 付/□	杯A	“	72	國刀	杯B蓋	頂外
28	林○	杯B	“	73	午女	杯か皿	底外
29	柒	杯B蓋	頂内	74	東□	杯B蓋	頂内
30	(外) □女(内) 七□	皿B	底外	75	忍	—	頂外
31	大	杯B蓋	頂外	76	林□	“	“
32	林	“	頂内	77	魚	杯A	底外
33	背	杯か皿	底外	78	南家	杯B蓋	頂外
34	(外) 七女□(内) 七	杯B蓋	頂内外	79	林	蓋E	底外
35	桑	杯か皿	底外	80	大宅	杯B	“
36	白万品	杯B蓋	底外	81	魚	杯B蓋	頂外
37	(外) □大田郎人口	“	頂内外	82	真	“	“
38	(内) 藤出	“	底外	83	黒	杯	底外
39	大	“	“	84	□寸八□	裏	胸内
40	鹿	“	“	85	田	杯B蓋	頂内
41	西	“	“	86	臺	杯	底外
42	三升	帶	“	87	片	杯	底外
43	壹	杯B蓋	“	88	鼎/□	杯	底外
44	西	杯	“	89	林	杯A	底外
45	貴	帶	“	90	余戸櫛/通□部	蓋K	底外

tab 5 西側溝出土墨書土器一覧（1～19土器、他は須恵器、／は改行を示す）

D. 瓦類 (fig.25・26)

大量的瓦類のはとんどは西1坊々間大路西側溝 S D920から出土した。内訳は丸・平瓦が圧倒的に多く、ついで軒丸瓦23点、軒平瓦16点、鬼瓦2点、熨斗瓦2点、面戸瓦1点、異形瓦製品1点である。

軒丸瓦 既に知られている11型式12種のほか、新型式が2種類ある。

6012Aは中央に珠点をもつ三重圓文で、第3圓線が外縁に近接し、第1・第2圓線の間隔が第2・第3圓線のそれより広い。瓦当裏面下半から丸瓦接合位置に至るまで布目が残る。平城京左京1条3坊15・16坪、同3条2坊7坪、羅城門地域に同范例がある。平城宮軒瓦編年第II期（養老5年～天平17年）（以下、「平城宮軒瓦編年」を省略する）。溝 S D920から1点出土。

6135Aは小型の中房に蓮子を1+6配した単弁12弁蓮華文である。平城宮内裏東方官衙地区から多く出土し、平城京左京2条2坊12坪、同8条3坊10・15坪、東2坊坊間大路、西大寺、法隆寺に同范例がある。第II期。溝 S D920から1点出土。

6138Bは単弁12弁蓮華文で、内区が外区より一段高い。平城宮のほか、平城京左京1条3坊15・16坪、東3坊大路、法華寺阿弥陀淨上院、山城音如ケ谷瓦窯に同范例がある。第IV期（天平宝字元年～神護景雲年間）。溝 S D920から3点出土。

6225Aは複弁8弁蓮華文で、中房が大きい。平城宮第二次朝堂院地区から多く出土し、平城京左京2条2坊12～14坪、同3条2坊7坪、同5条2坊14坪、同8条3坊10・15坪、同9条3坊10・11坪、東3坊大路、朱雀大路、西隆寺に同范例がある。第III期（天平17～天平勝宝年間）。溝 S D920から1点出土。

6291Cは複弁8弁蓮華文である。從来6308Fとしていたが、闇弁が弁の周囲をめぐるので、6291に編入した。大和押熊瓦窯に同范例がある。第II期。溝 S D920から1点出土。

6301Cは複弁8弁蓮華文で、中房に蓮子を1+5+10配す。興福寺式軒丸瓦の一つ。平城宮のほか平城京左京1条3坊15・16坪、同2条2坊12坪、同8条3坊9・15・16坪、東3坊大路、西1坊大路に同范例がある。第II期。溝 S D920から2点出土。

6316D_aは複弁9弁蓮華文で、弁子葉2本を分離する弁中央の線がない。また、闇弁がめぐって複弁を形作る。蓮子は当初1+4(Da)で、1+8(Db)に膨り直す。平城宮のほか、平城京羅城門地域、西隆寺、元興寺に同范例がある。第III期。溝 S D920から1点出土。

6316KはDに近似するが、Dの中房が弁区上り一段高いのに対し、Kは一段低く、弁形が不揃いである。平城宮に同范例がある。第III期。溝 S D920から1点出土。

6320Abは複弁12弁蓮華文で、弁が細く間弁を欠く。当初外区外縁に唐草文、外縁に線鋸齒文であったもの(Aa)を、凸鋸齒文に膨り直した。平城宮のほか、平城京左京3条2坊9坪、東3坊大路、法華寺阿弥陀淨上院に同范例がある。第IV期。11坪の東を画す築地壠想定位置の包含層から1点出土。

6348Aは複弁7弁蓮華文で、外区内縁に唐草文、外縁に線鋸齒文をめぐらす。平城宮における出土はまれで、平城京域に多い。左京1条3坊15・16坪、同3条1坊15坪、同3条2坊6坪、同4条2坊1・3坪、同5条3坊13坪、同8条3坊10・15坪、東3条大路、右京6条4坊7・10坪、法華寺、栗飯寺、法隆寺東院に同范例がある。第II期にあてられているが、内区文様が藤原宮式6279に近似するので第I期（和銅元年～養老5年）にさかのぼる可能性もある。溝 S D920から1点出土。

新形式1は複弁8弁蓮華文で、断面がわずかに凸レンズ状にふくらむ中房に蓮子を1+4配す。大

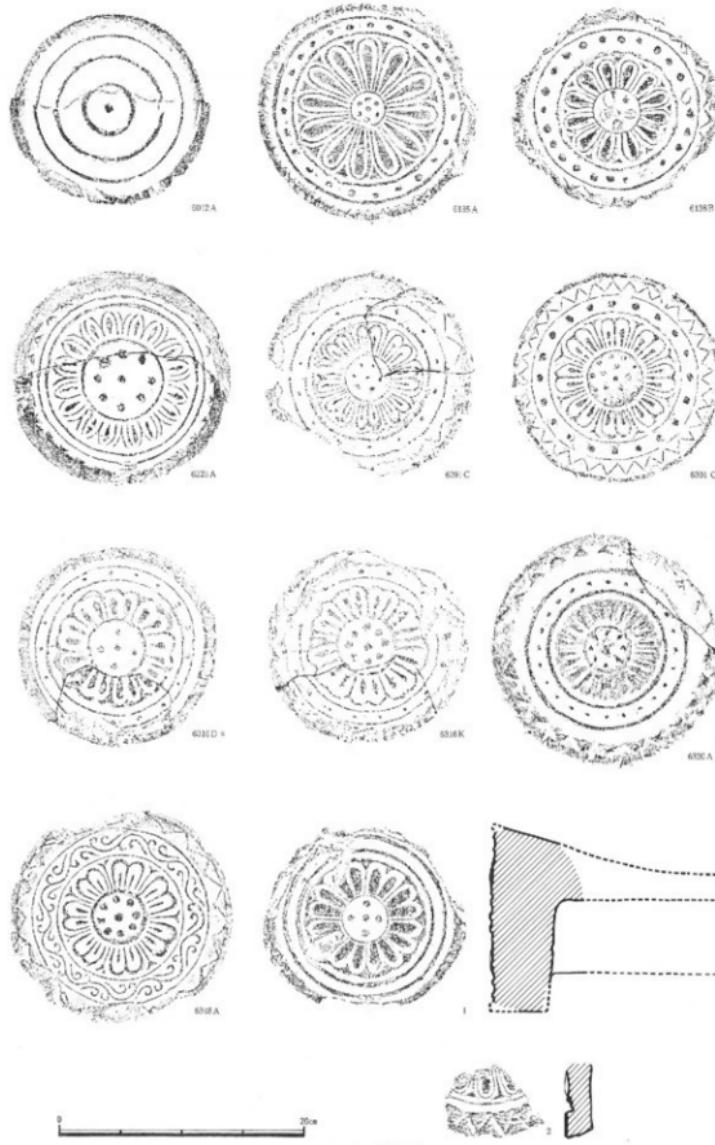


Fig.25 軒丸

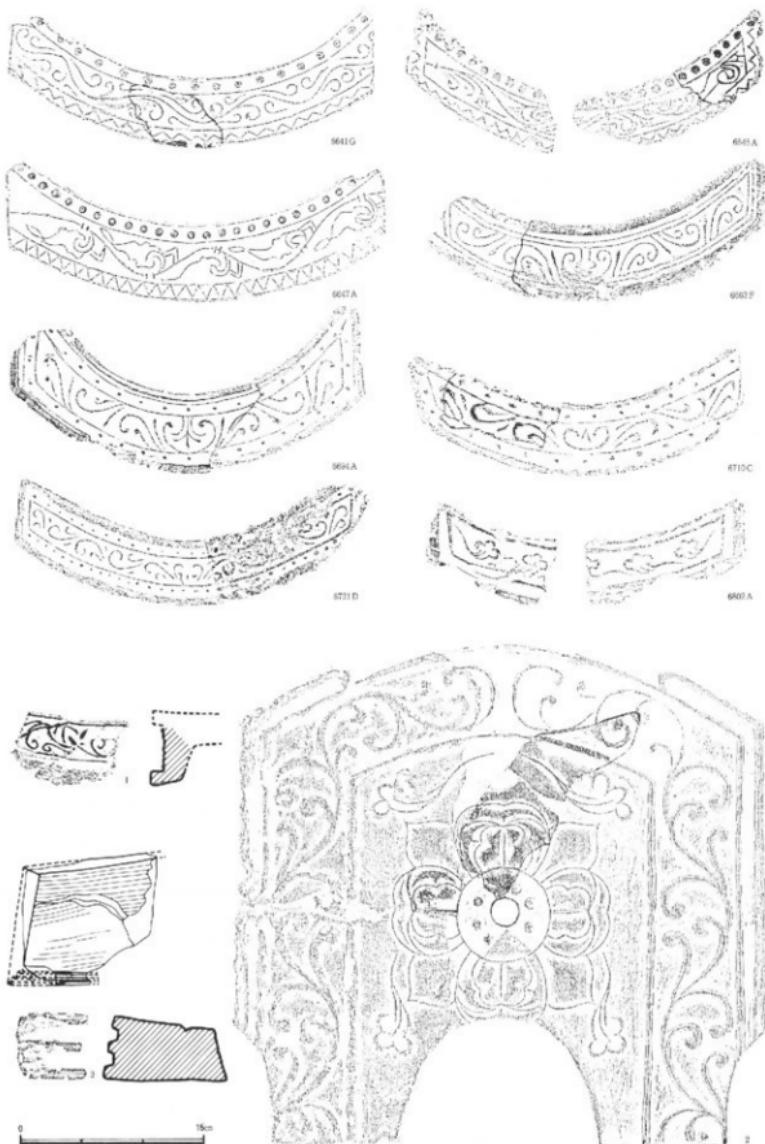


fig.26 肩平瓦・鬼瓦・異形瓦製品

きく低い子葉を分割する線はなく、間弁は外区界線基部にむかってなだらかに傾斜する。外区に二重圓線をめぐらす。丸瓦凹面から瓦当裏面まで布目が連続する。平城宮においては出土例がなく、長岡京にある。溝 S D920第3層から出土したため、奈良時代末か平安時代初頭か決めがたい。ほかに西1坊々間大路 S F910路面を被う遺物包含層からも1点出土。なお胎土は、後述する軒平瓦6802Aや鬼瓦と共に、おそらく6802Aと組み合うのであろう。

新型式2は中房を欠いた小片である。細い単弁で、弁の輪郭線は細く、子葉が高く突出する。間弁は弁をかこまない。内・外区の界線は1重で、内側にわずかに傾斜した広い外線に面違點齒文を配す。大和横井魔寺に類似品がある。溝 S D920から1点出土。

軒平瓦 9型式9種のはか、中世の資料が1点ある。

6641Gは右偏行唐草文で、上外区に珠文、下外区・脇区に線鋸齒文を配す。唐草と逆方向の小支葉がある。薬師寺創建瓦で平城京右京6条3坊4坪に同范例がある。第I期。溝 S D920から1点出土。

6645Aは右偏行変形忍冬唐草文で、上外区が珠文、下外区・脇区が線鋸齒文。興福寺、久米寺に同范例がある。第I期であろう。溝 S D920から1点出土。

6647Aは左偏行変形忍冬唐草文で、上外区・下外区に珠文を配す。藤原宮式で平城宮でも出土する。第I期。溝 S D920から2点出土。

6663Fは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。唐草は界線から発し、第3単位主葉・支葉が脇区界線に接しない。平城宮のはか、平城京左京3条2坊6坪、同5条3坊11坪、東3坊大路に同范例がある。第III期。溝 S D920から1点出土。

6694Aは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。平城宮、平城京左京3条2坊7坪、9条大路、唐招提寺、薬師寺に同范例がある。第III期。溝 S D920から4点、包含層から1点出土。

6710Cは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。平城宮のはか、平城京左京3条2坊10・15坪、朱雀人路、西隆寺に同范例がある。第III期。溝 S D920から1点出土。

6721Dは5回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐる。平城宮人體職・東院地区に多く、右京2条2坊14坪、東3坊大路、山城岡田池瓦窯に同范例がある。第III期。溝 S D920から1点出土。

6802Aは飛雲文で、外区に界線を一条めぐらす。東3坊大路、唐招提寺、長岡宮に同范例がある。奈良時代末ないし平安時代初頭に比定できよう。溝 S D920、遺物包含層から各1点出土。

1は均整唐草文で、外区に一重界線をめぐらす。花文をともなうこと、周縁が高く突出すること、浅額の接合法から13世紀中頃に位置づけできる。溝 S D920を覆う遺物包含層から1点出土。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁が付く。凸面を格子叩きで調整した例は1点で、他は継叩き調整。

平瓦の凸面に格子叩きを施した例は2点しかなく、他は縦位か横位の継叩き。端面に「司」「田」の刻印をもつものが、溝 S D920から1点ずつ出土した。

鬼瓦 蓼華文鬼瓦の小片で、左京8条2坊4坪から本例と同范とみられる資料が出土している。中房の中心に釘孔を穿ち周囲に蓮子を配す。宝相華風の蓮弁と先端が尖る間弁を弁間に配す。内区の4隅に6802Aと同様の飛雲文を配す。内区と外区を太い凸縁で画し、外区に唐草文をめぐらす。6802Aと同時期とみられる。溝 S D920から2点出土。

異形瓦製品 重弧文軒平瓦に似た瓦製品、薬師寺と9条大路に類例がある。溝 S D920から出土。

註1 総合国立文化財研究所が設定した型式番号

2 特別にことわらないかぎり S D920の第3層からの出土である。

3 奈良市教育委員会の発掘調査資料。鬼瓦も同じ。中井公氏に教示いただいた。

4 常盤井智行「井手町岡田池瓦窯出土瓦」『京都考古』第31号1984年。

E 木簡 (P L. 14)

木簡は西1坊々間大路西側溝S D920から合計18点出土し、そのうち、判読可能なものは、以下の9点である。・は駆文の表裏を示し、右端の数字は法量（長さ×幅×厚み）と木簡の型式番号を示す。

(1) 附下田坏廿口 黒萬呂 (189) × 15 × 4 6081

文書木簡の断片。田坏廿口を支給したときのもの。田坏は東大寺文書（大日古4-52.221）にみえる。

(2) • 廣口 □□
• 小飼 (53) × (24) × 3 6081

(3) • □□□
• □□足 (50) × (21) × 3 6081

(4) □□ (44) × (17) × 3 6081

以上の(2)～(4)の3点は文書木簡の断片で同筆・同材である。もともと同一木簡か。

(5) □ 布 春日部□□ 6091

布等の支給伝票か。

(6) • □□□□□□□
• 十一月廿日 (174) × (8) × 6 6081

(7) 黒萬呂 155 × 18 × 5 6031

人名を記した付札、あるいは[8]と同じく米についていた付札か。貢進物の荷札ではないから黒萬呂のもっていた米等の物品につけられていたものか。

(8) 千麻呂米□ (71) × 18 × 5 6039

千麻呂がもっていた米についていた付札

(9) □飛仏生常□□ (141) × 20 × 4 6081

これらの木簡のうち注目されるのは、千麻呂・黒萬呂という人名を記した付札で、このような例は平城宮では少ない。²おそらく千麻呂等の所有ないし管理する米を整理するために作成されたものと思われる。また貢進物荷札が一点も出土していないのも注意をひく。貢進物荷札は、貴族の宅地が建ち並んでいたと思われる二条のあたりまでが限度で、それ以南では東市付近（左京8条3坊）の調査で1点出土しているにすぎない。

註1 本簡の型式番号及び法量の表記法については奈良国立文化財研究所『平城宮木簡Ⅲ』参照。

2 平城宮内で出土した人名のみを記した付札は、S B7802の柱抜取り穴から出土したものがある。衛士の名前のみを記したもので、衛士の持っていた物品につけられていたものと考えられている。奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅸ』参照。

F 木 製 品 (fig.27~30 • PL.15 • 16)

今回出土した木製品には各種のものがあり、その数もきわめて多い。そのほとんどのは、S D 920から出土しており、集中することなく出土した。ここに収録したもののうち39はS E 930からの出土品である。数少ない遺物として、鉄身がついたままの鏃や大小の刀子がある。

(i) 容器等厨戸具

木皿 1は全面黒漆塗りの皿で、本地は針葉樹らしく、厚さ0.3cmの均一な作りである。漆はきわめて平滑に塗られており、下地に布着せはない。外面および底面は多少厚く塗られている。正倉院にはこれと同形でもうひと回り大きい皿がある。径15.5cm、高さ2.5cm。2はロクロ挽きの木皿で、全面に黒漆が塗られている。漆膜は薄く、塗りも粗雑で刷毛目が残る。内面と立ち上り部の外面にはロクロ挽きの条線がよく残っている。底面は刀削りで仕上げられ、中央の1箇所と約3.5cm離れた四周の4箇所に、ロクロ固定用の偏平な爪跡がある。底面には直線状の刃物痕が7~8条交叉している。

曲物 39は径20.6cmの底板に、高さ14.1cmの側板を7箇所で木釘留めしたものである。側板内面には縱方向と斜方向のカキ目をついている。側板の重複する部分に、6.5cmの間隔をおいた2箇所で縦皮継ぎをしている。側板の上端部には相対する1箇所に幅0.6cm、深さ0.3cmのえぐり込みがある。内面全体に黒漆が付着しており、特に底から3/4付近には厚く付いている。また外面の数箇所にも垂れこぼれがある。漆用容器として使用したらしい。側板上端のえぐり込みに棒をさし渡して、刷毛置きにしたのだろう。(S E 930出土)

蓋 5は蓋の断片で、周囲は斜めに切り落され法面となる。容器の蓋だらう。径10cm、厚さ1cm。ヘラ状品 7は厚さ0.3cmの板目材の片方をヘラ状に幅広くして先端を尖らし、他方は次第に細くしてその先端約0.5cmを柄状に作り出している。細くなった軸部は断面が梢円形となる。軸部の柄を何かに突き刺して装飾としたものだらう。長さ22.5cm。8は棒の中ほどから片方を断面三角形にしたうえ、その先端を一面は半円のままで他の2面を船首形に尖らせている。他方は次第に断面を丸く仕上げ柄状となり、先端はほぼ直角に切り落している。使用痕跡は観察できない。長さ23.5cm。

杓子状木製品 厚さ0.4~0.5cmの扁平な板目材を利用した大型の杓子が2点ある。いずれも身の先縁を半円形に作ったもので、身に表裏の区別はない。また身から柄への移行は、次第に幅を狭めて弧状となり、ともに柄は折損している。37は、身の一側縁が欠損しているが、復原幅は約9cm弱となる。身の中央部はやや厚く、両側縁に近づくにつれ薄く仕上げられている。身の先縁には若干の磨滅痕跡がみとめられる。38は、身の幅が約6cm弱で、長さはその約3倍もある長身のものである。身の両側縁は先縁に向って徐々に幅狭くなるとともに、その厚さも減じて先が薄くなる。

(ii) 刷毛等加工のある組み合わせ材

刷毛状品 15は大きく湾曲した板状品で、先方の一側辺が段をなして幅広くなり、他方は幅狭く端部は欠損している。各側辺は面取りされ、全面がていねいな仕上げである。幅広部の長側辺に1.4cm~1.9cm間隔で、径約0.6cm前後の孔が深くあけられている。孔の内面は黒く、焼き火箸であけている。ここへ毛を植えつけてブラシとしたらしいが類例はない。現長21cm、幅広部最大長3.7cm、厚さ1.1cm。

組み合わせ材 9は細長い板材の一端に、幅2.9cmの切り欠きを厚さの中ほどまで施し、そこへX状に5個の釘穴をあけたものである。中央の穴には木釘の一部が残っている。別材が取りつくのだろうが用途は不明である。長さ31.7cm、幅4.4cm、厚さ1.2cm。10はやや偏平な角棒状をし、各面は荒削り

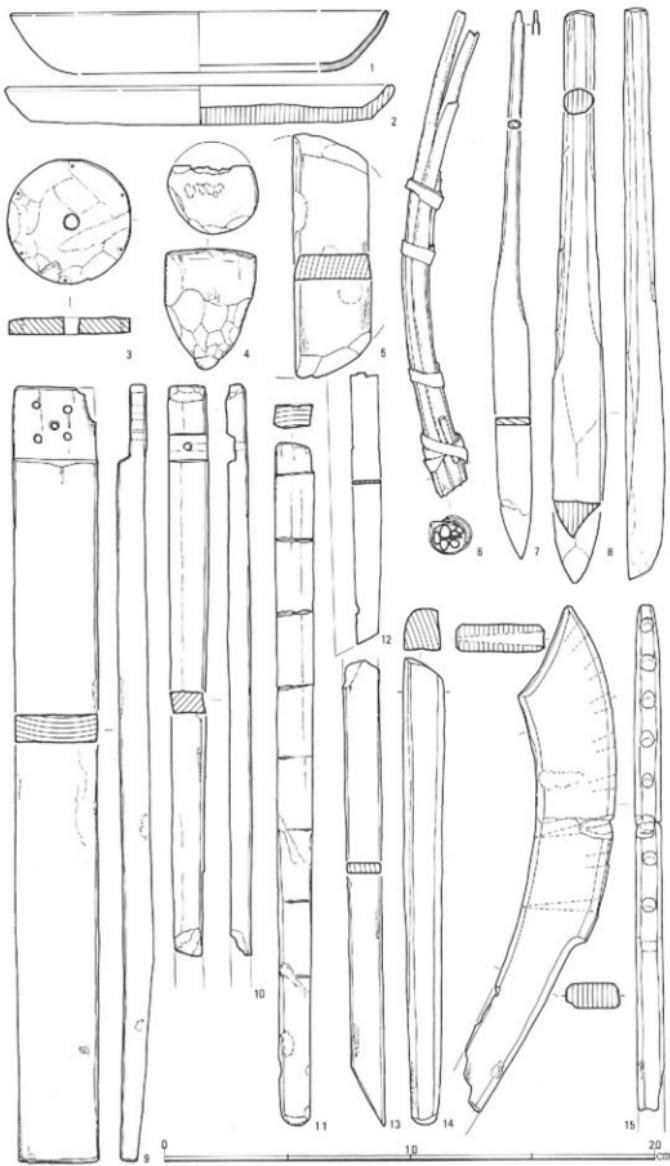


fig.27 木製品実測図

のまま、表裏は若干削って調整している。小口の一端は向面から削り落されて薄くなっている。この小口から2cm内側に、幅1.1cm、深さ0.3cmの相欠きがあり、その中央に釘穴があけられている。ここへ別材が組み合わされて木釘で固定する。用途は不明。現存長23.2cm、幅1.6cm、厚さ0.9cm。

桙巻き棒 6は径0.3~0.6cmの丸棒を4本束ねて、3~5cmの間隔をおいて桜の皮で巻きつけ固定したものである。この桙巻きは、1周のところと3周して強固にしたところがあり、桙の先端は丸棒を裂いて刺し留めている。現存長は20cmあり、他に同様のものが4片あって少なくとも計40cmを越えるものとなる。湾曲しているため、何かの枠になるのであろうか。

(iii) 工具・物差し

錐 40は円柱の柄に断面四角形の刃をはめ込んだもので、現状では刃は1cm弱だけ残り、尖端部はない。茎はX線透過写真でみると3cm余が柄に入っている。現在長14.2cm、柄の径1cm。

刀子 41は柄のみで身は残存しないが、柄中に茎が残る。柄元で観察した茎幅は0.85cmであり、身元は1cm強のものであったろう。茎の長さは6.9cmある。柄元には縫合をはめ込んだ梢円形の溝が残る。柄の背部は平坦に削る。柄尻は欠損している。42は柄に鉄身が約1.3cm残っており、茎の長さは7.1cmある。背幅は0.3cmで、間に段がつき茎は次第に細くなる。柄は背の方向へ若干反り、腹部の断面形は梢円形となる。柄元には縫合をはめ込んだ跡がある。柄尻近くに径0.25cmの紐孔があいている。柄尻は丸く仕上げる。現存長14.9cm。43は柄のみで、その腹部で背方向に屈曲した特徴をもちや大型品である。柄元には茎幅1.2cmの孔があき、茎孔の長さは7cm余である。柄元には縫合をはめ込んだ痕がある。柄の長さ16.1cm。44は長大な鉄身を残した大型刀子で、身は両面平造りである。柄の長さは12.2cmあり、柄元には幅0.6cmの縫合がある。柄の中央よりやや身寄りに径0.6cmの鋲ついた鉄の目釘がある。茎は闊で段をつけて幅狭くなり、長さは10cmある。先の目釘は茎のはば中央の位置にあたる。X線透過写真では、茎にはこの目釘から0.7cm柄尻方向へ離れたもう1個所に、径0.6cmの目釘穴があいているのがわかる。柄にはもともと全面に黒漆が塗られていたが、現状では中ほどから柄尻部分にかけて残っている。また柄尻から2cm余離れたところには、径0.9cmの紐孔があけられている。正倉院にもこのような大型刀子はなく、いまのところ古代では各地の出土品にも例はない。現存長31cm、身幅2.7cm、柄幅3.4cm。

物差し 11は削板材で、板目材の本表に平均2.96cm間隔で断面がV字形の細い切れ目をいれ、9等分の目盛としたものである。一端は折損しているが、他端はもともとの端が腐蝕したのだろう。この各目盛の間隔は、最小が2.74cm、最大が3.16cmあり、不統一でしかも平行せず、かなり粗雑な作りである。目盛線内は墨で黒くしている。

(vi) 祭祀具

すべて西1坊々間大路西側溝からの出土品で人形16点、削り掛け11点、矢形・刀形・馬形がある。

人形 16・17はともに板目材を割り裂いた薄板を荒く削ったものである。左右からV字形に切り込みを入れて頭と胴を区別し、足を切り出しておらず、下端は直線的に切り落すなど同じ作りである。顔面には墨で眉・目・鼻・口を描く。16には下端から頭の方向へ「新羅」近」と墨書きしている。16の長さ11cm、幅1.4cm、17の長さ10.9cm、幅1.7cm。厚さは16・17とも0.15cm。18~23もともに板目材を利用したものである。18の頭は周縁を面取りし丸顔に近くなっているが、他は主頭もしくはそれに近い形をしている。18~21は肩を斜に切り落しているが、22・23は水平である。18~22はともに手を切り込み、足を削り出している。23も同様であろう。19・20・22は手の切り込みが左右3ヶ所ずつあり、

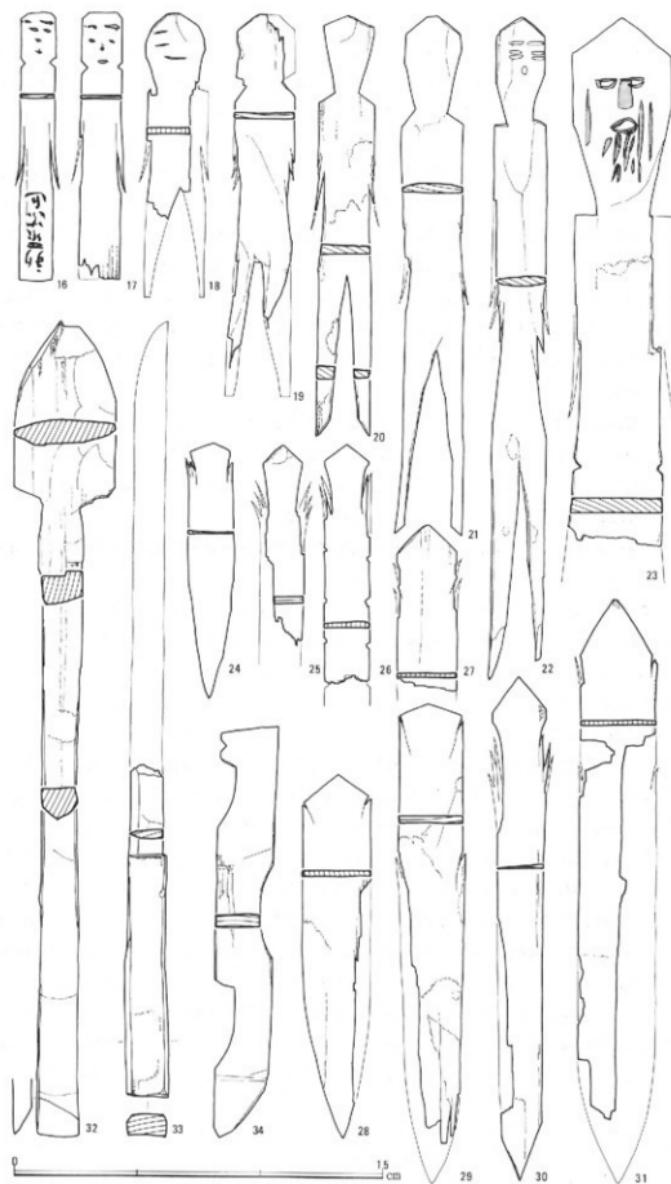


fig. 28 祭祀用木製品実測図

21は2個所であるらしい。19~21の顔面には墨痕はないが、18・22には顔面に眉・目・鼻・口が墨で描かれている。23は眉はないが、髪を表現している。また23には腹部の両側縫にV字形の切り込みがあつて、他と皎べて板も厚く、復原長30cmを越える中型品である。35は復原全長1m近くにもなる大型品で、頭部は丸く眉は斜めに切っている。墨痕はない。

削り掛け 細長い薄板を利用して頭部を主頭にし、下端を剣先状にしたものである。ここでは10.4cmから20cmを越えるものまである。いずれも右両側辺から切り込みをいれている。切り込みは、主頭両端の上面からいたるものと、主頭下部の両側辺の1個所または数個所からいたものの二者に大きくわけられる。前者の切り込みには、28のように1回のものと、24のように複数回いたるものがある。また後者の切り込みには、27・29・31のように1回のものがある間隔をおいていたものと、25・26・30のように複数回切り込んだものがある。31と同大、同形の作りのものが他の2点ある。26は切り込みの下部の両側辺に、一定間隔をおいた対称位置にV字形の切り欠きを4個所以上施しているが、全長は不明である。

矢形 32は極目割板材を荒く削って、一端を鎌形に他を矢柄に仕上げたものである。鎌の両側辺は、表裏両面から斜に削って薄くしている。また先端は片面から斜に削り落しているが、削り残しがあっていねいでない。矢柄は断面方形で、削り立いた面に若干刀を加えて調整しただけである。また末端部も片面から斜に一刀で削り落している。長さ33cm、厚さ1cm。

刀形 33は断面が長方形で、長さ9.8cmの柄に、柄よりもやや幅狭な身を作りだした刀である。身の背幅は、0.3cmで、身の長さは3.8cmのみ残り、大半は欠損している。この種の木製刀形がそうであるように、柄はほぼ中央部で屈曲し柄尻が背方向にわずか反り上っている。現存長13.6cm。

馬形 34は板目材を両側縫からえぐり込んで作ったものである。縫縫は鋭く削って仕上げている。腹部と考えられる側縫の首近くには、支えのための小棒を差し込む小孔があけられている。長さ16.9cm、幅約2.3cm、厚さ0.6cm。

(v) その他の日用品

下駄 36は平面形が楕丸形をした長さ28cm弱の大きな下駄で、板目材の木表を台の上面としている。歯は連齒で、台からノミで作り出したものである。後の歯に枝部の筋があてられている。台には鼻緒孔が三ヶ所あけられているが、全体に腐蝕が著しく、その孔も大きくなっている。

紡錘車 3は中央に径0.6cmの円孔があいた円板である。盤の外周から0.1cm内側で、円周をほぼ6等分した位置に径0.1cmの小孔が垂直にあけられている。円板の両面は刀ではぼ平坦に削られているが一面は外周が外へ向って傾斜して削られ、断面が多少薄くなっている。6個の小孔もこちらの面から開けられている。紡錘車とみられるが小孔の役目は不明でやや精巧である。径約5.0cm、厚さ0.6cm。

独楽 4は円柱を上面から約2cm残して下半部を円錐状に切り落し、さらに小削りして段をつけて芯を作り出した通有の形の独楽である。上面はほぼ平坦に調整されている。径4.7cm、高さ5.1cm。

以上の他に横櫛10点余、曲物や折敷の底板・側板、扁籠、断面を丸く仕上げて工具の柄としたもの、厚さ5cm以上の板材に鉄角釘が打ち込まれたもの等用途不明の木製品も含めて多数出土した。

木製品樹種一覧

針 葉 樹				広 葉 樹			
ヒ ノ キ	ス ギ	カヤ	不 明	アカガシ 並 属	ケヤキ?	不 明	
3, 6~8, 11~20, 22, 25~28, 30~33, 36~38	5, 9, 10, 23, 34	40	1, 21, 24, 29, 35, 39	4	45	2, 41, 42, 43	



fig.29 木製品実測図

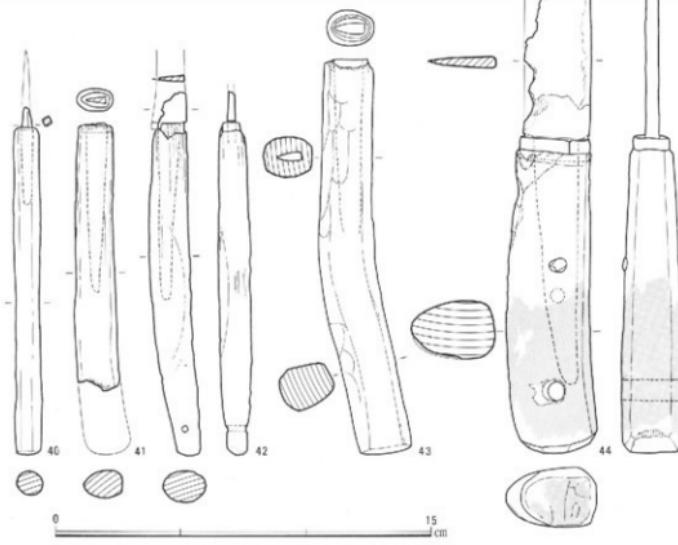
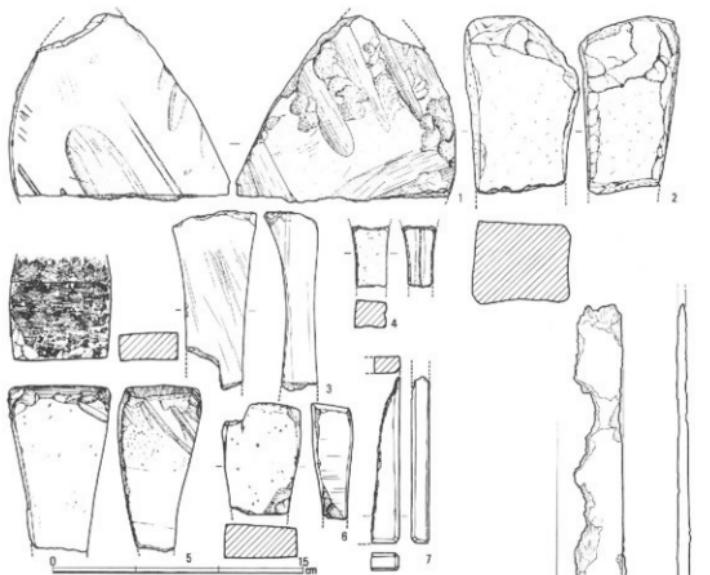


fig. 30 木製品・石製品実測図

G 金属製品・ガラス製品

今回出土の金属製品は総数239点にのぼる。その大部分は西坊々間大路西側溝 S D 920からの出土品で、鉄製品75点、銅製品64点、銅鏡100点からなる。鉄製品は総じて錆化・腐蝕が著しく、相対的な出土量は少ない。これに対して銅製品の遺存状況は良好で出土量も多く、バラエティーに富んだ内容を有している。出土品の中には、甲張りが残る銅鏡と巡方の未製品があり、S D 920から多量に出土した鉢溝や鷺羽口・とりべなどの鋳造関係遺物とともに、付近に鋳造工房が存在したことを示唆している。また刀、鎌鉄、心葉形銅鏡、釣針形銅製品などは、平城宮・京における初めての出土例であり、銅鏡・小銅鏡などの祭祀関係遺物も今回の出土品を特色づけるものとなっている。

(i) 鉄製品 (fig.31, P.L.17)

刀子（1～3） 8点出土。いずれも刀闊と棟闊を明瞭に区別した平造り角棟の一般的な刀子。1は現長8.4cm、棟厚0.21cm、刃元の身幅0.9cmを測る。2と3は別個体。3の茎長は4.7cm、茎尻は丸くおさまる。fig.30-41・42は木柄を残す刀子。刀身を欠失するが柄の中に茎が遺存し、X線写真によりその形状が判明する。茎長は42が7.1cm、41が6.9cm、ともに柄元を鍔で固定する。

刀 4は棟厚0.5cm、身幅2.8cmを測る大刀の切先破片。両面平造りで切先は丸味をもち、棟も丸味を帯びた角棟となる。また黒漆塗り木柄をもつ fig.30-44は、身部上半を折損し刀部の腐蝕も進むが、刃元の身幅2.65cm、棟厚0.35～0.55cm、茎長10.0cm、身部現長18.2cmを測り、小刀もしくは大形刀子になろう。刀身の反りではなく、両面平造り。目釘と鍔で木柄に固定される。X線の透過により、

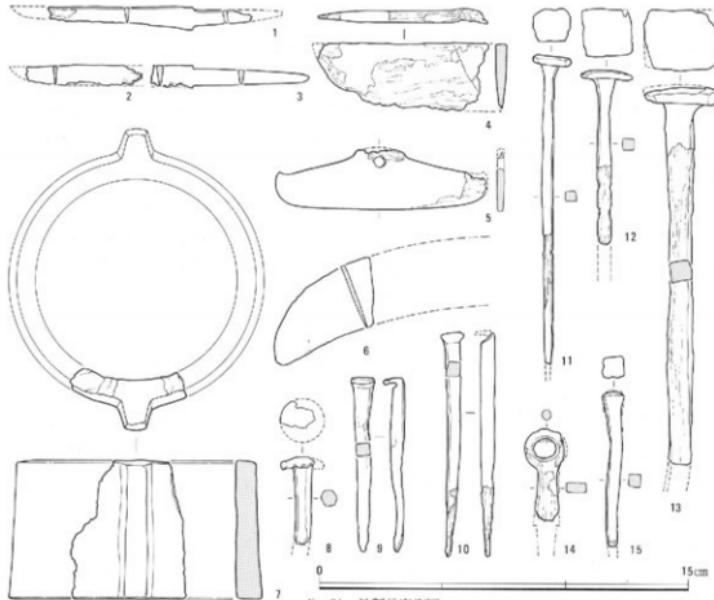


fig.31 鉄製品実測図

目釘直下に径0.55cmの未使用の目釘穴が存在することが明らかになった。茎尻は栗尻となる。

鎌鉄 5は頂部に径0.4cmの円孔をもつ山形の鎌鉄（火打鎌）。横幅8.6cm、縦2.5cm、厚0.3cm。

鎌 6は鎌の刃部先端破片。棟厚0.2cmの薄手のつくりで、現存部の最大刃幅は2.7cmを測る。

車軸頭形鉄器 7は車軸受けの金具と推測される。鋳造品で、円筒の外側に縦位の突帯がつく。全体の1%破片であるが、東三坊大路東側溝出土品に類例があり、径10.4cm（内径8.4cm）の円筒の対称位置に2本の突帯がとりつくことが判る。内面と下面は磨耗により平滑になるが、他は鍛放しのままの粗面を呈する。上端厚0.75cm、下端厚1.0cm、高さ5.7cm、突帯幅1.2cm、突帯高1.0cm。

鑿 8は叩き潰れた頭部と断面六角形の脚から鑿と判断される。東堀河の出土品に類例がある。

釘（9～13） 銚は53点出土した。腐蝕折損し全形を知りうるものは少ない。頭部を欠失した角棒状の鉄製品22点の中には、鉄鎌や鎌の断片が含まれる可能性がある。折頭釘は12点ある。断面長方形の脚の上端を叩きのばし折り曲げて釘頭とする。9は唯一の完形品で長さ7.1cm。10は脚断面が正方形に近い例外的存在。方頭釘は15点出土。方形の頭部を脚頂部に鍛接したもので、脚断面は正方形に近い。いずれも脚下半を折損しており完形品はない。11は現長12.5cm。12は厚さ3.5cmの板材に打たれた状態で出土。13は現長15.3cmの大形釘。15は特別な頭をつくり出さない角錐形の戦頭釘。1点のみ出土。箱や櫃などの接合に用いられた釘であろう。現長6.3cm。円頭釘は2点あるが、腐蝕が著しい。径3cm前後の円形等形の頭部を脚頂に鍛接したものである。14は頭部を断面円形の環状に、脚部を断面長方形につくる環頭釘。折損する脚が下方に向って幅を広めているところから、櫛などにつけられた櫛子用の壺金具と考えられる。1点のみ出土。

(ii) 銅幣金具 (fig.32, PL. 17)

鈎帶の鉗具、丸稱、巡方、鉢尾が20点出土した。京内の調査では最多の出土量を誇る。S D 901出土の鉢尾（36）を除く28点は、すべて西1坊々間路西側溝 S D 920からの出土である。

鉗具（16～18） 5点あるがすべて破損しており完形品はない。16はC字形外枠片、全面に粗い鍔目が残る。基部の一端を折りたれ変形著しいが、縦4.6cmの大形品に復原できる。17・18は2枚留の板金具で、ともに軸棒と外枠の基部を残す。18の板金には刺金を固定するための切込みがなく、刺金を伴わぬ形式の鉗具となる。板金具の周縁は鍔掛けにより斜めに面取りされ、端部に紙留の2孔を穿つ。軸棒には18が長さ2.2cm、一辺0.15cmの角棒を用いるが、17では角棒の角を取り、断面八角形に仕上げている。外枠はいずれも鍔掛けによって断面三角に整形され、基部の軸孔に軸棒を挿入後軸棒の両端を叩きつぶして両者を固定する。16と18には黒漆の痕跡が残る。

丸稱（19～23） 完形に近い表金具が4点、裏金具が1点あり、他に表金具の断片が2点ある。すべて3枚留で、表金具の内面二隅に紙足を鉢出す。20～22は平板状の表金具。21・22は同寸法につくられるが、透し孔に大小の差が著しい。外面は鍔整形により平滑に仕上げ、周縁は斜めに面取りされる。内面は鍛放しのままの粗面を呈し、22では透し上部の紙足側面が三ヶ月形に窪む。23は断面を甲高い台形状につくる表金具。表面は研磨され黒色の光沢をもつ。側面には整形時の鍔目が馴染み残り、透し孔の四隅にも鍔整形時に生じた鍔のアタリを残す。19は透し孔をもつ裏金具。板金に鉢受けの孔を穿ち、側面を斜めに鍔整形する。21・22に黒漆の痕跡が残る。

巡方（24～32） 完形に近いものが11点、破損品が2点ある。24・26・28は平板形式の表金具。内面四隅に紙足を鉢出し、外縁を斜めに面取りする。24は外縁と透し孔内部に甲張りが残る未製品で、全体に外済しており、鉢上がりが悪いために整形を断念した不良品と考えられる。現寸法は横2.66cm、

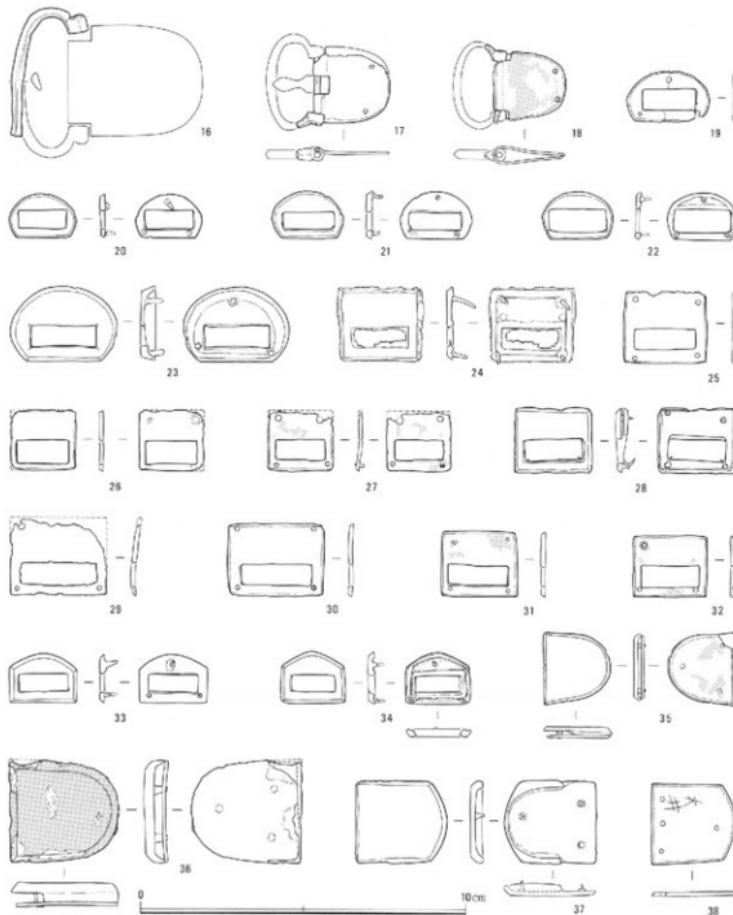


fig.32 带金具実制図

器号	種類	表裏	幅	縦幅	厚	透孔	器号	種類	表裏	幅	縦幅	厚	透孔
19	九 鞍	裏	2.56	1.58	0.1	1.64×0.65	29	巡 方	裏	3.04	(2.37)	0.15	2.34×0.70
20	"	表	2.05	1.33	0.13	1.45×0.53	30	"	"	2.97	2.24	0.13	2.14×0.65
21	"	"	2.20	1.43	0.2	1.58×0.51	31	"	"	2.39	2.00	0.13	1.83×0.58
22	"	"	2.18	1.45	0.15	1.76×0.69	32	"	"	2.27	1.90	0.1	1.76×0.63
23	"	"	3.26	2.29	0.45	1.92×0.59	33	山形巡方	表	2.11	1.50	0.13	1.47×0.52
24	巡 方	表	2.51	2.16	0.2	1.83×0.60	34	"	"	2.04	1.57	0.2	1.32×0.51
25	"	裏	2.52	2.20	0.1	1.85×0.60	35	鉢 尾	表・裏	2.09	2.22	0.32	
26	"	表	2.02	1.83	0.1	1.58×0.68	36	"	"	3.43	3.10	0.7	
27	"	裏	2.02	(1.85)	0.1	1.53×0.58	37	"	表	2.82	2.53	0.4	
28	"	表	2.38	1.99	0.15	1.82×0.71	38	"	裏	2.58	2.46	0.12	
"	"	裏	2.31	1.90	0.1	1.76×0.78							

tab. 6 带金具寸法一覧

縦2.27cmであるが、内面の界線により、仕上り寸法が横2.51cm、縦2.16cm前後に計測されていたことが判る。内面には長さ0.65cmの鋲足が鋲出され、透し孔と外縁に沿つて二重の凸線が巡る。28は同大の裏金具を伴なう。裏金具には表金具よりもわずかに薄い銅板を用いている。25・27・29～32の6点は透し孔をもつ裏金具で、他に断片が2点ある。いずれも板金でつくり、外縁を斜めに鍛整形する。四隅に鍛受けの小孔を穿つが、32には3孔しか認められない。27・30にはかしめとめた鋲足が1鋲ずつ残存する。また27・29～32には黒漆がわずかに残り、27・29・30では黒漆の塗布が内面にまで及ぶ。33・34は上辺が弧をえがき、丸輪と巡方の中間形態をとる山形巡方。ほぼ同寸法の平板形式の表金具で、丸輪と同位置に3鋲を鋲出す。周縁は斜めに面取りされ、33には鍛目が顯著に残る。内面は粗面を呈するが、34は透し孔と外縁に沿つて肉を高めており、24と近似したつくりとなる。

鉈尾（35～38） 完成品が4点出土した。表金具は3点あり、すべて3鋲を鋲出する。35・36には裏金具が鋲留されたまま残る。革帶先端を挟みとめるため、基部の鋲足より先を甲高につくる。裏金具は0.1cm前後の板金でつくるが、表金具に固定後、周縁および表面に鍛掛けを施す。35・36から推定される革帶の厚さは、35が0.15cm、36が0.3cmである。表金具にはいずれも黒漆塗りの痕跡が残る。
38は4鋲留の裏金具。研磨された金具表面に針書による「上井」の大字の線刻文字が認められる。

(iii) 銅製品 (fig.33, P.L.18)

銅鈴（39～43） 5点出土。完成品が3点あり、他の2点は上・下が分離した状態で出土した。いずれも球形の鈴で、下半部を大きめにつくり、上半部に重ねて接合する。鈴は球頂を切りこみ銅板をさしこんでかしめとめる。下面には一文字の切り口が鋲と直角方向にあけられている。39は鍛金の痕跡をよくとどめており、他には黒漆塗りの痕跡が残る。39・43には鉄岸を利用した丸が、40には中空の鉄丸が遺存し、澄んだ金属音を発する。周長は39が8.4cm、40が8.1cm、41が6.6cm、42が7.2cm、43が8.05cmを測り、それぞれ2寸2・4・7・8分の規格でつくられたことが判る。2寸7分以上の鈴の鋲は、頂部の角を落としており、2寸4分以下の鈴の鋲と形態を異にする。

銅針金（44・48・49） 44は先端が尖る径0.35cmの銅線。鍛整形により先端に向ってわずかに径を減する。現長3.6cm。49は鍛金の施された径0.2cmの銅線で両端に切断痕をとどめる。現長3.8cm。48は径0.15cm、長さ6.53cmの銅線に細かな右回転の捩りを加え、一端を直角に折り曲げたもの。

銅切削 50は6弁の花文を截りとった厚0.03cmの銅板切削。片面に鍛金を施す。銅板の一端が残り、花形の弁端を接するように無駄なく同文様を切り抜いたことが判る。他に細板状の切削が4点ある。

銅釣針形金具 51は1本の銅線からなる製品で、釣針に似た形態をとる。鉤状に曲げられた径0.3cmの銅線の上端を徐々に細め、円環部を二重につくり、端部を円環直下の軸部に七重に巻きつける。全長3.8cm。先端近くに鍛で曲げた際のアタリが認められる。物を釣り下げるための金具であろうか。

銅座金具 52は菊形の座金具。裁頭半球形の表面に細かな披瀬の花弁を鋲出す。小破片であるが、高さ0.95cm、外径2.3cm、内径1.1cmに復原される。花弁は26弁前後となろう。弁間に黒漆が残る。

銅飾鋲（53・54） 頭部と脚を一体に鋲出した鋲が2点ある。53は縦1.53cm、横1.4cmの心葉形の鋲頭をもつ。脚は断面円形で先端をくぼむ。現長1.7cm。平城宮・京からの銅鋲の出土例は多く、花形、星形、杏仁形など多様な鋲頭がみられるが、この心葉形鋲は、出土品はもとより正倉院の伝世品にも類例のない特異な形式の鋲である。54は円形の鋲。外縁に切断されたままの甲張りを残す。甲張りの状態から、複数の鋲を一列に並べ同時に鋲出したことがわかる。本例は甲張り切断後の鍛整形を経ない木整品である。脚は細い角錐につくるが、下半を欠失する。鋲頭径1.17cm。現長1.0cm。

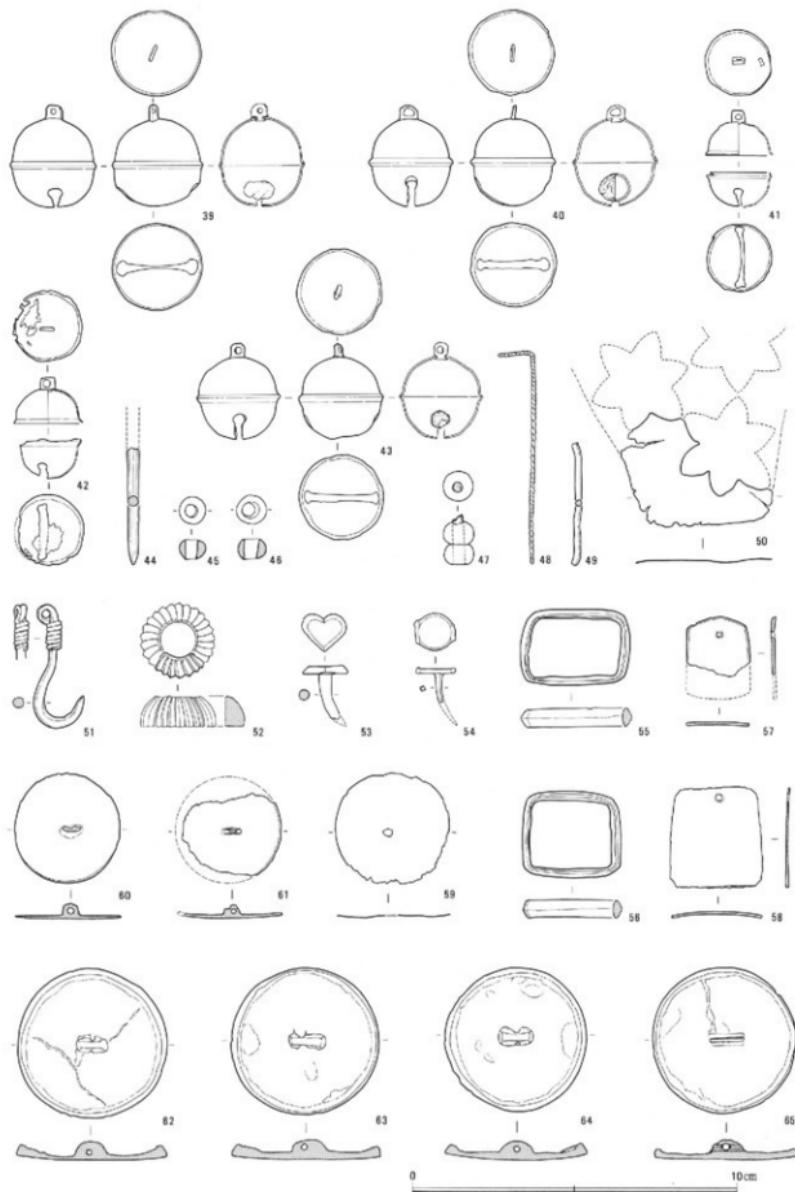


fig.33 銅製品・ガラス製品実測図（銅製品1/2、ガラス製品1/1）

銅留金具（55・56） 方形の棒状金具。接合部のない所から鋳造品とみられる。ともに断面は高さ0.55cm、厚0.25cm前後で、上・下端にわずかな平坦面を残し、鍼がけにより外面中央に縫をつくり、内面を凸面に整形する。正倉院に伝存する馬具の付属金具に近似しており、革紐の先端を固定するための留金具と考えられる。55はわずかに変形するが横3.40cm、縦2.33cm。56は横3.04cm、縦2.64cm。

環珞（57・58） 佐波理鉢の破片を梯形に切断し、上端に径0.2cmの円孔を穿った垂飾。短辺と長辺の両方向にゆるやかな湾曲をもつ。58は周縁に切断時の細かな凹凸を残す。下端には鏡の口縁近くの凹線が残り、全体の湾曲から口径22cm前後の鏡が復原される。上端厚0.05cm、下端厚0.11cm、上辺2.45cm、下辺2.82cm、全長3.09cm。57は下半を欠損する。上辺は山形を呈し、周縁は切断後に鍼整形され平滑になる。上幅1.86cm、現長1.8cm、厚0.9cm。佐波理鉢破片を利用した環珞は、平城京西市や東3坊人路東側溝からも出土しており、定形化した転用製品であることが判る。

銅円板 59は厚0.03cmの薄い銅板を径3.5cmの円形に裁断したもの。周縁の腐蝕が進むが中央に径0.3cmの孔があく。沖ノ島祭祀遺跡出土品にみえる鏡の最も簡略な雛形であろうか。

銅鏡（60～65） 二種の型式からなる素文小鏡が6点出土した。いずれも鋳造品で、鍼がけにより面形を整え、規格された寸法に仕上げられている。素文小鏡A（60・61）は縫をつくり出さない薄い平板状の儀鏡。丁寧な鍼がけと研磨により厚0.1cm前後に整形され、鏡面はわずかに凸面を呈する。面径は60が3.28×3.32cm、外縁を大きく欠く61も径3.3cm前後に復原され、ともに面径1寸1分に規格された鏡となる。60は鈕を除く全面に顯著な鏡目が残り、鏡胎は薄い凸レンズ状に仕上げられる（面中央厚0.12cm、外縁厚0.08cm）。鏡芯からわずかにずれた位置に、幅0.5cm、厚0.1cm、高さ0.35cmの板状の鈕がつき、径0.2cmの円孔があく。61は面中央厚0.12cm、外縁厚0.06cmで全体に反りをもち、端部は斜めに鍼面取りされる。鈕は鍼がけにより一部変形するが、幅0.51cm、厚0.17cm、高さ0.32cmの板状の鈕に径0.15cmの円孔があく。素文小鏡B（62～65）はいわゆる唐式鏡を模した粗雑な素文小鏡で、鏡縁を厚くつくり出す。鏡面は丁寧に研磨されるが背面は鋳放しのままの粗面を呈する。4面とも径4.5cm前後を測り、面径1寸5分に規格統一されている。形態も近似するが、鈕や鏡胎の反り、鏡縁などにわずかな差異がみられるところから、同范鏡とは認めがたい。鏡背は周縁が斜めに鍼整形されたために三角縁に近い縁となり、浅い匙面を形成して中央の素鉢にいたる。鏡面は凸面をなすが、反りの強い62・64と、反りの弱い63・65の二者に分かれる。また鈕は65のみが鍼整形により、Aに似た板状の鈕となる。鈕孔は径0.2cm前後。いずれも鏡背の凹凸激しく、62・65には范傷が認められる。62面径4.60×4.65cm、縁厚0.22～0.38cm。63は面径4.49×4.57cm、縁厚0.22～0.36cm。64は面径4.37×4.39cm、縁厚0.24～0.35cm。65は面径4.42×4.45cm、縁厚0.24～0.33cm。

素文小鏡Bは、三重県八代神社、愛知県西幡豆、石川県寺家などの祭祀遺跡からの出土鏡がよく知られている。奈良県下でも薬師寺企堂木尊須弥壇、大官大寺塔跡、安倍寺などから、地鎮、鏡壇具として出土しており、平城宮内でも数例の出土がある。出土鏡の多くは、本例同様面径1寸5分に規格されており、中には1寸2分・3分につくられたものも若干認められる。素文小鏡Aは、平城京東3坊人路東側溝や石川県寺家遺跡に類例があり、A・B両者とも祭祀用に製作された鏡と考えられる。

(iv) ガラス製品 (fig.33, PL.18)

ガラス小玉（45～47） 緑色を呈するガラス小玉が4点ある。47は芯に銅線が通り2点が連結して誘導する。一部に銀化がみられるが、同系色の発色をしており、一連の製品とみられる。径0.6cm前後、高さ0.4cm前後、内径0.23～0.36cm。蛍光X線回折分析の結果、鉛ガラスであることを確認した。

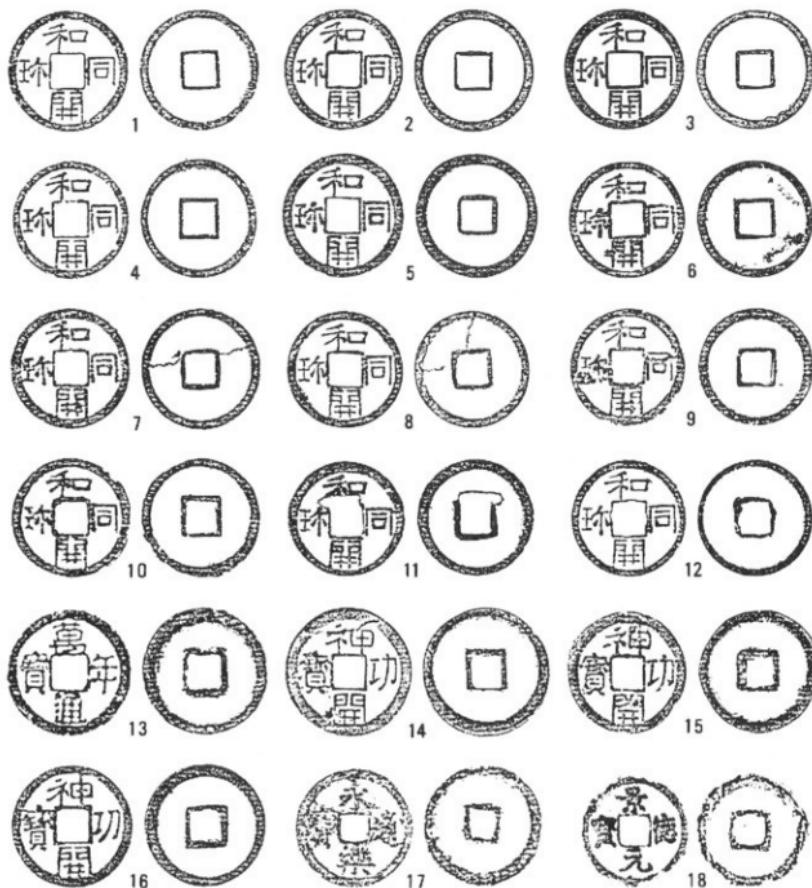


fig.34 錢貨拓影圖

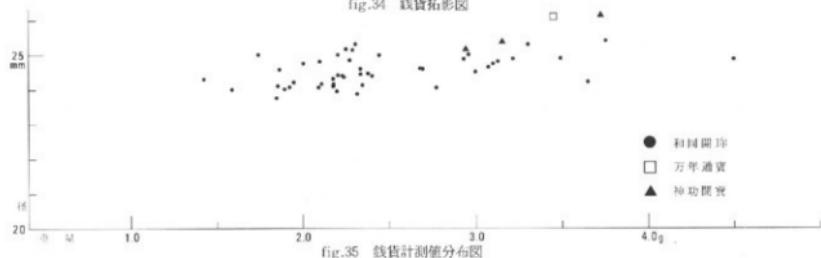


fig.35 錢貨計測值分布圖

(v) 錢貨 (fig.34, Pl.18・19)

5種100点の銅錢が出土した。その大部分を占めるのは和同開珎・万年通寶・神功開寶の3種の皇朝錢で総数98点を数える。これらの皇朝錢はすべて西1坊々間人路西側溝S D920から特定個所に集中することなく、また層位差をもたずに出上したものである。他の2点は中國錢で、包含層出土の景德元寶(1006年初鋤)と、調査区北東部の粘土採掘坑から出土した永樂通寶(1411年初鋤)である。

和同開珎 (1~12) 93点出土。全体に鋤上がりが良く、鮮明な錢文を残す。完形品が50点あり、平均重量2.47g、平均径2.45cmを測る。すべて「開」の字の門構え上部が隸書風に聞いた「隸開和同」で、古和同はない。1~3は全体に字画が細く角張った簡明なもの。最も一般的な和同錢であり、「普通和同」とよばれ和同開珎Aに分類される。周縁部の広狭や字画の配置などに多少のバラエティーがある。4~11は和同開珎Dに属す。錢文は和同開珎Aに類似するが、背面の内郭縁が他よりも大きい点に特徴があり、「背広郭」とよばれる。同型式のものが他に2点ある。5~12は背面の内郭外縁の四隅を丸くつくる和同開珎E。他に6点類品がある。5は今回出土した和同錢中、最大の径(2.54cm)をもつ。6は和同開珎F。「和」の字が内郭寄りに配されたために、和の第三画がわずかに短く、第八画が内郭に近接する。「降和」と称せられるもので、他に2点出土している。和同錢は総じてつくりが良く不良錢は少ないが、范傷をもつものが3点(7~9)あり、鋤上がりが甘く錢文に鮮明さを欠くもの(9~10)もみられる。10は錢文が不鮮明な上に、平均重量の倍近い4.05gの重量を有しており、私鑄錢の可能性もある。また11は内郭孔の甲張りをとる際の鑿切断が狂い、切断が「和」の下半に達したもの。12は鑿の刃に生じた傷が切斷痕に産みとなって現われたものである。

万年通寶 (13) 完形品が1点出土。「萬」の字の下半を「亾」につくり、年の第四画は縦につく。「縱点万年」とよばれるものであるが、背面内郭の外縁四隅が丸く万年通寶Cに属する。背面はわずかに型ずれを起こし、鑄出し浅く不鮮明。重量3.46g、径2.61cm。

神功開寶 (14~16) 4点出土。いずれも鋤上がりは良い。14~15は「功」の旁を「力」に、「開」を正字「不隸開」につくる点で共通しており、「力功神功」とよばれる。神功開寶Bに属するが、14は径が一回り大きく「力功大様」となる。「神」の字に范傷が走り、背面に型ずれを生じる。15は背面内郭の外縁四隅が丸く、内郭孔は鑿打ち放しのまま。外周の鍵仕上げも粗く、不整円形を呈する。16は神功開寶の中では最も類例の多い神功開寶E。隸開につくり、「功」の旁を長くのびた刀で表現するところから「長刀」とよばれる。他の一例も半欠品であるが、本型式に属す。

註1『平城宮発掘調査報告書VI』奈良国立文化財研究所学報第二十三冊 1974

H 鑄造関係遺物 (fig.36, P.L.19)

西側溝S D920からは、とりべ・輪羽口・鉛滓・砥石が多量に出土している。また外面が熱を受けて変色している用途不明の土製品もある。これらの遺物は特に第3層に集中している。

とりべ 50点余出土している。いずれも小破片であるが浅くて底の丸い楕形となるものである。口縁部の破片から判断すると、大小2種の大きさがある。いずれも石英粒を多く含む胎土で、外面黒色、断面灰白色を呈するものが多い。器壁の厚さは1cm前後の場合が多いが、小形のものでは、5mm前後と薄い作りのものもある。このほか、土師器の内面に粘土を塗り重ねてとりべとして用いているものが9点出土している。

輪羽口 30点余出土しており、いずれも灰白色の比較的精良な粘土を用いている。1は炉側先端部

を欠失するが輪側は旧状をとどめる。細長く輪側が八字状に広がる形態。炉内に突出する部分と炉壁に埋め込まれる部分との境には、幅4~5mmにわたり粘土がはがれて溝状となる部分がある。炉内への挿入角38度。炉内に突出する部分は熱を受け紫黒色に変色している。外径4.4cm、通風孔径2.1cm。2と3は炉側先端部が細く他端が太くなる通有の形態。外面の一部は熱を受け灰黒色となる。2は炉側先端部周辺に厚く鉛滓が付着する。外径5.2cm、通風孔径2.2cm。3は外径5.3cm、通風孔径2.3cm。

用途不明土製品 4は灰色の比較的精良な粘土を用いる。各面は平滑に仕上げるが、内彎する面には長辺に平行する棒状圧痕が一部に見られる。縦6.4cm、横5.9cm、折損部の厚さ3.9cm。5は4よりやや砂粒の多い粘土を用いる。一端を欠失するがほぼ全形をうかがうことができる。方錐台形の側面に断面半円形の溝が縦に通る。4と同様に溝には棒状圧痕が見られる。縦8.0cm、横8.7cm、厚さ5.2cm。この2点は、胎土・調整が類似し、内彎する溝状部の径がほぼ一致するなどの類似点が見られる。いずれも一部が熱を受けて変色しているが鉛滓の付着は見られない。真土を塗った痕跡もなく鋳型ではないであろう。

鉛滓 鉛滓は約2.8kg出土している。蛍光X線分析の結果いずれも銅、錫、鉛を主成分とする青銅滓であることが明らかとなった。また溶融した金属が滴状に固まつたものが3点出土しており、この内の2点について原子吸光分析を行った結果、銅86.8%、鉛1.9%、錫0.2%と銅64.4%、鉛1.1%、錫0.2%との結果であった。以上の分析結果よりみて、これらの出土品は青銅製品の鋳造に関してできたものであろう。

I 石 製 品 (fig.30, P.L.19)

砥石 1は、厚さ1~2cmの円盤状で、片面は全面がきわめて平滑に研磨されている。その上面には角ばった直線状の研ぎ痕2本と、幅広く断面が叫レンズ状の研ぎ痕1本がほぼ同一方向にあり、それと交わる方向にもう3本の浅い研ぎ痕がある。背面は平坦面がなく同一方向に6本の研ぎ痕があり、またそれと直角方向にも2本の研ぎ痕がある。外周の一端は円弧状に研磨され、その対面も凹凸はあるが荒い擦痕がある。刃物用の砥石ではなく玉などを磨くためのものであろう。2~6はいずれも破損しているが、本来は長方形をなし断面方形である。表裏側面の四面とも使用し、中央部が擦り減り細くなっている。2~5~6は小口面を使用していない。2は凝灰質砂岩、1~3~6は石英斑岩である。7は厚さ1.1cmの板状で上下面と2側面が平滑に仕上げられ、各角が面取りしてある。特に表と考えられる一面はていねいに仕上げられているが、用途はわからない。滑石製である。

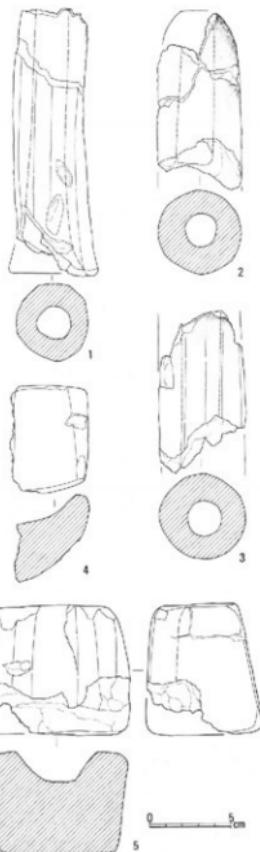


fig.36 銅造関係遺物実測図

J 動 物 遺 存 体

(i) 西側溝出土動物遺存体の概要

発掘時に採集した動物遺存体の破片数は700点あまりであるが、保存が悪く同定できたものは150点弱であった。溝に埋没した骨は地下水の作用で骨に含まれる構分が溶け、地下水に含まれる鉄分と化合して藍鉄鉱 ($\text{Vivianite}, \text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_{10} \cdot 8\text{H}_2\text{O}$) と呼ぶ濃青色のガラス質結晶を折出して脆くなっている。同定できた資料には歯が多いが、これは歯のエナメル質が特に腐食に強く、残り易かったためである。四肢骨の内部にはゼラチン状の物質が残るが、これは脂肪、蛋白質、コローゲン物質が水を媒介にミセルと呼ぶ物質を形成し、一見コロイド状の化合物となつたものである。同定できた動物種には次のようなものがある。骨の大半は、奈良時代末～平安時代初めの第2層から出土した。

- (1) ウマ *Equus caballus*
- (2) ウシ *Bos taurus*
- (3) イヌ *Canis familiaris*
- (4) シカ *Carus sp.*

(1) ウ マ

上記の動物中、最も多くの出土量があった。歯によるとすべて成歯である。小地区別の出土量を見ると特定の小地区に出土が集中する (fig.38)。その集中しているところでは歯や顎骨、四肢骨が1頭分、稀には2頭分みられる。このことからこれらの骨が集積する部分にはウマが死んで投棄され、腐って埋まるまでに部分的には流されても遺体のかなりの部分が埋没していたと考えられよう。そこで以下、このように骨が集中する個所ごとに出土状態を述べる。

OF91・OG91 発掘時に全身骨格の存在を確認したが取り上げが困難な状態であったため、整理段階で同定できたのは頭骨・左橈骨・右尺骨・右中手骨・左右大脛骨・左右脛骨・左膝骨・左右距骨・左基節骨であった。頭骨は石膏で補強して採集した。計測量は以下の通りである (計測値は注記のない限りmm単位である)。眼窓横径56.0、同縦径52.0、上顎臼歯全長170、同前臼歯長97.0、下顎臼歯全長175、前臼歯全長94、後臼歯全長84.0。他の計測値は鼻骨・後頭骨被損のため計測不可能。

ON92・93、OO92・93、OP92 左下顎骨、頭骨破片、寛骨、左上腕骨、右尺骨、右中手骨、右脛骨、右中足骨、右中筋骨が出土している。計測値は左下顎臼歯全長175である。

OR93、OS93 上・下顎骨の臼歯が左右ともすべて揃っている。この他に右上顎第2後臼歯が1本存在するので、別個体の骨もある。右中足骨が同定できたが細片が多い。左下顎前臼歯全長80.2。

NA91・92・93 左右下顎骨、別個体の右下顎骨が存在する。四肢骨は右中手骨・左中足骨・左大脛骨・右距骨・頭骨が同定できた。下顎臼歯全長170、前臼歯長88.5、後臼歯長82.0、別個体のものは右下顎臼歯全長167、前臼歯長81.5、後臼歯長78.5。

(2) ウ シ

OR92より左右上顎歯8本、NC93で右中足骨、OF92で右中手骨各1点が出土している。歯の状態は磨耗が少なく比較的若い個体であったと考えてよい。

(3) イ ヌ

OF92より下顎骨3点が出土した。うちの2点は同一個体のものである。計測値は後臼歯長28.8、もう1例は28.3である。

(4) シカ

OF 92より右中手骨、または中足骨遠位端が1点出土している。骨端部は癒着が終了しているが非常に小さい。(下端最大幅28.8、最大厚20.0)

(ii)まとめ

古代にはウシやウマが農耕儀礼等により犠牲にされる例があるが(土肥1983)、今回のウマやウシの出土状態からはそのような証拠は見られなかった。

遺跡から出土するウマの形質については林田重幸らの研究が詳しく(林田1956、林田・鈴木1974)、今回の資料をそれと比較する。下顎臼歯全長を例にとると、本資料は175、170、170、167であるのに対し、古墳時代の岡山県川入遺跡では161.0、上東遺跡では156.0である。また現生のトカラ馬(体高109.5cm)では157.0、御崎馬では166.0である。四肢骨でただ1例全長を知り得た中手骨では265をはかり、推定体高132以上で神奈川県材木座出土の軍馬の平均体高129.5cmをも上まわる。今回得られた資料は保存も悪く、計測値も少ないが、これらを持って奈良時代末~平安時代初めに平城京で銅されていたウマの形質を代表できるとするならば、すでに平城京では中世のウマと変わらない大きさのウマが銅されていたことになる。今後資料の増加を待って詳しく論じたい。

ウシの遺存体はウマに比べるとかはるかに数が少ない。この傾向は同じ平城京内の東堀河での発掘所見とも一致しており(松井 1983 P.32)、京内ではウシよりウマの方が数が多かったと言えよう。

註1 布吉畠農大 中野益男氏の御教示による。

参考文献

- 上記 1983「日本古代における犠牲馬」『文化財叢書』pp.388~400
- 林田重幸 1956「日本古代馬の研究」『人間学雑誌』第64巻4号、pp.197~210
- 林田重幸・鈴木孝司 1974「川入遺跡出土の馬骨について」『金剛市上東遺跡出土馬骨について』『山陽新幹線建設に伴う調査 II』pp.364~367、岡山県教育委員会
- 松井 京 1983「動物遺存体」『平城京東堀河』p.32、奈良田川文化財研究所編

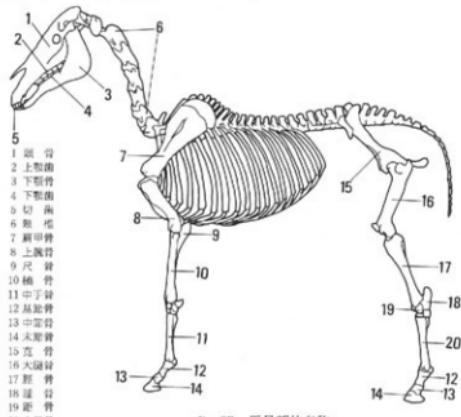


fig.37 馬骨部位名称

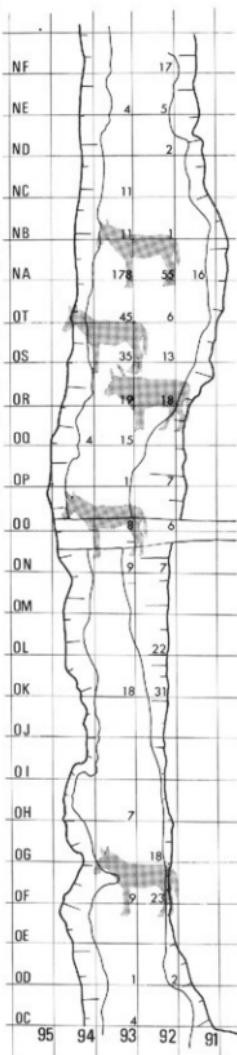


fig.38 動物遺存体出土分布

ウ マ							
上顎第1切歯 P ¹	OS93 左	OF92 左					
上顎第2切歯 P ²	OS93 左	OF92 左					
上顎第3切歯 P ³	OS93 左	OF92 左					
上顎第2前臼歯 P ⁴	OS93 右 L 35.1 W 23.2	OF92 左右					
上顎第3前臼歯 P ⁵	OS93 右	OF92 左右					
上顎第4前臼歯 P ⁶	OS93 左右 L 28.5 W 27.5	OF92 左右 W 25.2	OR93 左				
上顎第1後臼歯 M ¹	OS93 左右 L 25.0	OF92 左右 W 25.5	NF92 左 L 25.0	NF93 右 L 25.0 W 20.0			
上顎第2後臼歯 M ²	OS93 右 L 24.0 W 23.1	OF92 左右	ND92 右	NE93 右 L 23.5	OS93 右 L 24.0 W 23.2		
上顎第3後臼歯 M ³		OF92 左右					
上顎臼齒 同定不能	NA92 左	NA92 左	NA93 左	NA92 左	NE92 左	NA93 右	NA93 右 NA92 右
上顎骨	ON92 左右	OF92 左右	OO93 左				
下顎第2前臼歯 P ₂	OS93 左右 L 30.7 W 13.8	OF92 左右	NA92 右	OO93 左	OR93 左 W 15.4	OK92 左	
下顎第3前臼歯 P ₃	OS93 左右 L 28.0 W 15.2	OF92 左右	NA92 右	OO93 左	OR93 左 L 23.2 W 15.3	OK92 左	
下顎第4前臼歯 P ₄	OS93 左右 L 23.0 W 13.8	OF92 左右	NA92 右	OO93 左	OR93 左 L 23.5 W 17.8		
下顎第1後臼歯 M ₁	OS93 左右 L 23.6 W 13.1	OF92 左右	NA92 右	OO93 左			
下顎第2後臼歯 M ₂	OS93 左右 L 27.6 W 11.7	OF92 左右	NA92 右	OO93 左		OK92 左	
下顎第3後臼歯 M ₃	OS93 左右 L 27.6 W 10.5	OF92 左右		OO93 左		OK92 左	
下顎臼齒 同定不能	OR93 左	OO92 左	NE92 左				
下顎骨	ON92 右	NA93 左	ON92 左右	OR93 左	OK92 左	OF92 左右	NA92 左右
頭骨 (破片)	ON92 左右	OF92 左右					
寛骨	ON92 左	NA93	OF92			ウ シ	
上腕骨	NC93 右 体部	NF92 右 遠位	OO93 左 体部			OR92 左 P ³ L 40.0 W 18.8	OR92 左 P ⁴ L 39.0 W 25.5 L 33.3 W 24.3
膝骨	OF92 左 遠位	NF92 左 体部				OR92 左右 M ³ L 35.5 W 23.0	L 33.6 W 27.2
尺骨	ON93 右 体部	OF92 右 遠位				中手・中足骨 OF92 右 体部	NB93 左 体部
中手骨	NA91 右 遠位	OF92 右 近位	ON92 右			イ ヌ	
大腿骨	OG92 右 遠位	OF92 左 体部	NA93 左	OG92 右 体部		下顎骨 OF92 左右	OF92 右
脛骨	OF92 右 遠位	OF92 左 体部		ON92 右 体部		シ カ	
腓骨	OG92 左					中手・中足骨 OF92 右 遠位	
趾骨	OG92 左	OG92 右	NA93 右			。上下の矢印は同一個体のものであることを示す。 。他の下段の数字はLが奥突長、Wは歯冠幅を示す。(いずれもエヌメル語)	
中足骨	OS93 右 近位	ON92 右 近位	OO93 右	NA93 左 完存		。四肢骨で体部とあるのは脊椎、上下の関節部を矢くもの。近位 というものは中軸骨、脊椎、頸部に近い関節端、遠位というものは そこから遠い関節端を示す。	
中手・中足骨 同定不能	OT93 遠位	OR92 左 遠位					
基節骨	OF92 左						
中節骨	ON92 右						

tab. 7 動物遺存体部位別出土地表

2 平城京以前の遺物

このたびの調査範囲内では、平城京の造営以前に該当する遺構は何も見つかっていないが、特に S D920の堆積土からは、奈良・平安時代の遺物に混って、縄文時代の石器、弥生式土器や石器、それに古墳時代の土器等が少量発見されている。

A 土器

弥生式土器、古墳時代の土師器、須恵器、埴輪等がある。これらはいずれも元の位置を保つものではなく、奈良時代の土器に混在していたものであって、付近に何らかの遺構あるいは包含層の存在を推測させる。5が井戸（上層）出土で、他はすべて西側溝 S D920出土である。

弥生式土器 壺または甌の底部が2点ある。10は平らな底部に木葉圧痕がある。底部から外にのびる体部の割れ口は内傾する擬口縁状を呈する。暗褐色で胎土に砂粒を多量に含み焼成は軟質である。器面は荒れて手法は観察できない。底径8.2cm。9は平らな底部で中央が小さく窪む。内底部は齒の巣状の調整痕を残す。茶褐色で砂粒を少量含む。軟質の焼成。底径6.6cm。9は後期（第V様式）、10は中期前葉（第II様式）の可能性がある。

土師器 杯・高杯・甌・瓶がある。杯は口縁部に段をもつもので、布留式の小型3種の器種を構成するもの（1点）。高杯は脚部の破片（11点）。甌は多孔式のもの（1点）で小片のため図示できない。須恵器 杯身（10点）、杯蓋（6点）、鉢（1点）、甌（1点）、提瓶（1点）、瓶（1点）のはか不明品（2点）がある。

8はミニチュアの瓶である。片方の把手を欠くほか完存する。平らな底面に口縁部が直線的に開く。やや偏平な感じを与える。底面には中央に1個、その周囲に5個の釦孔を焼成前にあけている。釦孔は刃物で抉りとっている。体部中位や上より外面に角状把手をつける。口縁部は内丸し、凹面をなす。把手はヘラケズリとナデで調整する。口縁部内外面はロクロナデ、底部はナデ、底部周縁は手持ちのヘラケズリで調整する。底部外面に薄く粘土を補強（穿孔前）している。暗灰色、硬質の焼成である。口径8.0cm。高さ4.2cm。

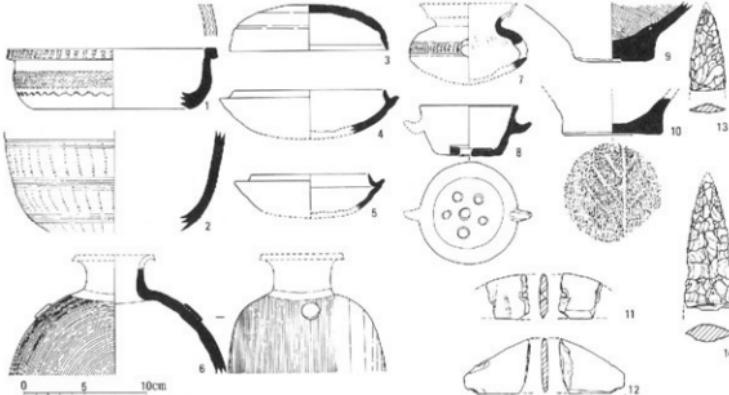


fig.39 京造営以前の土器・石器実測図

7は偏平な体部中位に上下を沈線で区画した縦の列点文をめぐらす縁で、1孔（径1.1cm）を外面からあける。肩部内面にシボリメがある。青灰色で砂の少ない精良な胎土で堅く緻密な焼成。

5は内傾する短い立上がりに外上方に伸びる受部がつく杯身。底部中央よりにヘラケズリの痕跡がわずかに残る。表面が暗青灰色で断面は暗紫色。白色粒子をごく少量含む。極めて堅い焼成である。受け部に重ね焼き痕跡がある。口径9.8cm。

4は丸い底部に短い立上がりをもつ杯身。青灰色を呈し、白砂を含む。硬質の焼成である。復原口径12.4cm。

3は杯蓋である。頂部と口縁部との境は浅い凹線をなす。頂部中央はロクロケズリ調整（ロクロは右回転）。内面中央はナデ。青灰色。白色砂粒を多量に含む。硬質の焼成。口径13cm。高さ3.7cm。

1は体部がまるい楕形で、外方に折返し気味に肥厚させた口縁部をもつ土器。口縁部上面は平坦にする。底部はあげ底になる。口縁部上面と体部中位に櫛描波状文を飾り、口縁部外側に刺突による列点文をめぐらす。体部の波状文の施文の順位は、1条の波長の大きな波状文が先でその上の5条1組の波長の小さな波状文が後とみられる。櫛描波状文と列点文とは施文原体が同一の可能性がある。口縁部外側折近し下のロクロナデは波状文の施文より後に施される。表面は暗茶褐色、断面は茶褐色ないし暗紫色を呈する。胎土には白色の微粒子を多量に含むが緑じて緻密な胎土といえる。焼成は極めて硬質である。口径17.0cm、高さ5.0cm。日本の須恵器には例をみず、新羅の陶質土器などの外国製品の可能性がある。

2は鉢と考えられる。まるくひらく体部に2条及び3条1組の沈線をめぐらしその間に突刺し列点文を縱に並べる。沈線は1本ずつつけたもの。口縁部内面から底部はナデ調整。青灰色で白色細砂を含み硬質な焼成である。

6は提瓶である。偏平な器体の横に孔を開け、別作りの頸部を取付ける。両肩部に把手の退化したボタン状の薄い小円板を貼りつける。片面はカキメ、片面はロクロケズリ（ロクロん回り）で調整する。青灰色で胎土に白色の微細な砂粒を含み、極めて硬質の焼成である。体部の復原径18.0cm。

埴輪 円筒埴輪の小片が1点ある。うち1点は朝顔形円筒埴輪である。埴輪はすべて土師質のものに限られ、須恵質の焼成のものはない。

B 石器

石器には、縄文時代に属すると想われる凹石1点、弥生時代に石包丁2点、石槍2点がある。

凹石 長径10.1cm、短径8.3cmの楕円形をしており、厚みは6.3cmあってやや偏平である。上・下面のほぼ中央には径2cm前後、深さ0.5~0.6cmの凹みがある。楕円形の外縁にはほぼ一周して敲打痕があり、両面の凹みに指をあてがって石塊を握り、聚果類を漬すのに用いたものだろう。

石包丁 2点ともに片岩系の石を使用し磨製で、以下以下の断片であるが、片刃で直線刃半月形をしたものであることがわかる。11は両端が欠損しているが、身幅のほぼ中央に紐孔が1ヶのみ残っている。両面より直接穿孔している。刃先には使用痕はほとんどみられない。12は一端のみ残り紐孔もない。刃面は狭く、刃先には使用による摩滅痕がある。

石槍 いずれもサヌカイト製で、13は薄身で小型、14は厚身で中型品といえる。

以上のはか同溝からは、サヌカイトの大小剣片20点余、黒曜石剣片1点が出土している。

IV まとめ

1. 西1坊々間大路と東西両側溝

第Ⅱ章でもふれたように、今回検出したS F 910、S D 880、S D 920が平城京西1坊坊間大路とその東西両側溝であることは、遺存地割や、発掘調査の結果明らかとなつた道路幅員、平城宮南面西門（若犬養門）との関係等によっては確定づけられたといつてよい。しかし、他の大路側溝には類例をみないほど東側溝に比して西側溝の規模が大きく、排水だけでなく、他の機能をもあわせもついていたものと推測される。1975、1982年の調査で明らかとなった平城京東堀河の幅員は約11.0m、深さが約1.3～2.0mで、今回の西1坊々間大路西側溝とはほぼ同程度の規模である。また、今回の調査区の西約400mの位置には西市の存在が確認されている。従って、西1坊坊間大路西側溝は、東堀河と同様に市から平城宮内に物資を運搬するための運河として利用された可能性は極めて高いといえる。

ところで、このような大規模な運河の起点と終点はいったいどこに求め得るであろうか。

平城宮跡第125次調査で得た、同じ西1坊坊間大路西側溝は、9条大路北側溝との合流点において幅員3.0～7.5m、深さ2.0m以上を測り、西側溝は今回検出した溝の規模をほぼ踏襲しつつ9条大路まで南流していたことがわかる。そして、9条大路を横断して京外濠へ排水されていた可能性も示唆されている。

これ以外に西側溝を検出した調査例は現在のところないから、本調査や第125次調査で明らかとなつた大規模な溝の起点を京内のどの位置に求め得るかは明確に断定することはできない。しかし、第141～4次調査では、若犬養門の南約80mの位置の西1坊坊間大路東側溝が幅員約2.0m、深さ約0.60mと小規模であることが判明しており、主たる排水機能は西側溝が持っていたものと考えられる。それ故、本調査で明らかとなつた西1坊坊間大路西側溝の規模を、2条大路との交差点付近までさかのぼらせることが可能である。

また、第133次調査では、2条大路北側溝は朱雀門前から西流し、若犬養門西側で幅員約12.0m、深さ2.0mにまで拡大し、物資運搬のための船つき場として機能した可能性があることが判明している。門西側の平城宮南面大垣には暗渠が設けられ、宮内の池状構造からの排水も同時に行われていた。しかし、西1坊坊間大路西側溝が門前において2条大路北側溝と連続していた痕跡は確認されていない。同調査では、平城宮西南隅部を玉手門付近から若犬養門にかけて東南流する奈良時代以前の旧流路を検出しており、西1坊坊間大路西側溝は、この旧流路を踏襲する形で敷設されたものと考えられる。おそらく、秋篠川は、平城宮及び平城京造宮に伴って西1坊大路の西側に付けかえられ、2条大路北側溝は、若犬養門において東からの流水と宮内からの排水と、それに秋篠川から流れこむ水とを集水し、平城宮西南隅部と若犬養門との間にいづれかの地点で2条大路を横断し、西1坊坊間大路西側溝へと連続していたのではなかろうか。

さて、このような運河の水量は、いったいどこから確保されていたのであろうか。

現在の地形では、西1坊大路と東2坊大路にはさまれた南北の帯状区域が京城で最も低地にあたり、現河川もこの部分を蛇行しながら南流している。これらの河川は京造宮に際して南北方向に整然と付けかえられたものと考えられるが、一旦豪雨にみまわれれば流路はまたたく間に変形したであろう。

とりわけ秋篠川は、西1坊大路以西の京城約800haにも及ぶ広大な面積に降った雨を排水する機能を持っている。しかも、右京城西半部は丘陵と谷筋があり乱れる比較的急峻な地形であり、秋篠川は

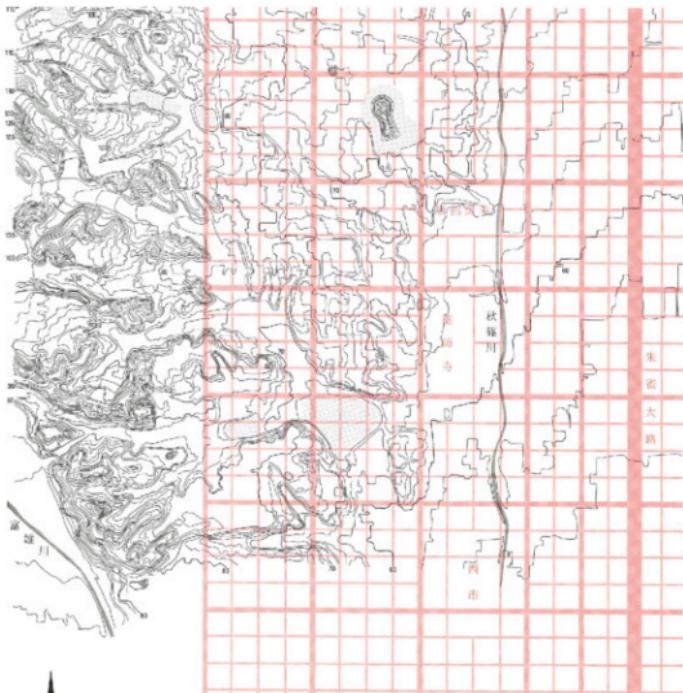


fig.40 現地形と復原条坊

丘陵から平地への地形転換点に位置している（fig.40）。従って、降雨の流入時間も比較的短いと考えられ。流水断面積は相当大きなものでなければならぬ。今でこそ河川改修によって堤防も整備されているが、奈良時代には氾濫もしばしばのことであったにちがいない。こうした氾濫を防ぐために、秋篠川以東の低地に今ひとつ放水路を設けて、右京城のいくつかの箇所で、この放水路に分流していたことも考えられる。そういう意味では、今回の調査で検出した西1坊坊間大路西侧溝が、規模の大きさから判断して秋篠川の放水路であった可能性は充分想像に値する。

因みに、今回の調査で得た西側溝の底面と、第133次調査で得た2条大路北側溝の底面とを結ぶ平均河床勾配を推定復原すると、 $1/300$ となる。江戸時代に、物資運搬のために三十石船が往来した大阪淀川の枚方市付近における現在の河床勾配が $1/4000$ であるから、いかに急勾配であるかがわかる。このような急勾配の運河を上り下りの舟運に利用するためには相当量の人力を要したであろう。

2 祭 祀

今回の調査では、西1坊々間大路西側溝から多数の祭祀関係遺物が出土した。それらは、木製の人形・馬形・刀形・鎌形・斎串、人面墨書き土器、模型カマド、土馬、青銅の鏡・鈴などである。こうした祭祀遺物が、いかなる祭祀に用いられたのか考えてみよう。

人形は、呪詛、病氣治療などにも使われたが、^{220mm}罪穢や悪気を人形に移し、流れに投する祓が、その一般的な使われ方であった。奈良時代における祓の代表は、6月と12月の晦日に宮中で実修された大祓である。1980年に実施された平城宮壬生門（南面東門）の調査では、壬生門前を流れる2条大路北側溝から、207点もの人形が出土した。平安時代編纂の『法曹類林』卷二百に引く式部文には、大祓を人伴門（朱雀門）と壬生門の前の大路で行うとみえ、上に述べた人形の出土状況ともよく一致することから、これらの人形が天平の初め（730年頃）の大祓に用いられたことが明らかになった。

本遺跡の16点の人形も、こうした祓に使われた後、溝に投げられたのであろう。ここで重要なことは、作りや表現、大きさも同巧の人形（fig.28）があり、一方には、下端部を上にして「新羅〔近〕」と人名が書かれていることである。名を記した人形は、平城宮・京跡では3例目で、作りや表現で同巧の人形が2枚・3枚と組みになって使われたことは、上述の壬生門の発掘によって明らかになっている。この人形は、「新羅〔近〕」の形代で、2枚組で使われたことがわかる。次に、人形の法量に注目すると、全長が10cm程度のもの、15cm前後のもの、30cm程度のもの、それを越える大型の等身人形があり、同じ型式の人形に、大・中・小のグループがある。同じ傾向は、年代的に近い長岡京跡左京2条2坊6町の溝S D1301出土品にも認めることができ、ここでは、大きさに関係なく墨書きの表現が共通していた。詳細は省くが、奈良末以降、大・中・小の人形を2・3枚組みにして使うことが行われたようで、本遺跡はそうした一例といえる。

祓の人形を流れに投げる時点で、馬形が登場する。本遺跡の馬形は、腹部に小孔があり、細棒で地上に押し立てたものである。馬は汎世界的に水神と結びつけられることが多い、後に述べる奈良時代の土馬も水神への祈願に、流れに投じたとする見方がある。しかし、水野正好氏は、行綏神の乗り物とする説を提唱されている。最近報告された山形県俵田遺跡（『第10回古代東北域櫛官街道跡検討会』1984）では、蓋に入れられた人形の周囲から、木製馬形や斎串・刀形が出土した。遺物分布図によると、人形のまわりに馬形・斎串を立てて、囲んでいたようである。『延喜式』の四時祭・祝詞の大祓条によると、一触一吻した人形を四国占部が祓所に解除することがみえている。俵田遺跡の状況は、この祓所にあたり（水野正好氏御教示）、馬形は御祓を負った人形を他界へ運ぶため、人形の傍に立てられたのであろう。この行為は斎串を立てた空間内で行われた。つまり斎串は結界を表し、外部の悪気を遮断するとともに、人形が負った罪穢を外に漏らさぬ役割を果したのであろう。

本遺跡の人形・馬形・斎串は、出土状況から相互に関連づけることはできないが、前述した例を参照することで、具体的な祭祀の状況を推定することができる。

人面墨書き土器（以下人面土器と略称）は、文字通り壺の外側に人面を墨書きしたもので、その顔は恐ろしげなものが多いが、なかに額の象徴か斜線だけを引く例や、口縁にそって波文だけを描く例もある。人面土器は、平城宮土器編年の「平城Ⅲ」以降、独特の形態・製作手法をもつにいたる。ここでは、墨書きのないものも含め、同じ特徴の土器を人面上器として扱う。

人面上器は、身中にたまつた罪穢を気息とともに壺に封じこめ、祓去ろうとするもので、穢を帯び

た壺は流れに投じられた。西1坊々間路西側溝における人面土器の出土数は多く、約460個体、分布も南北70mの発掘区全体に及ぶ。出土した人面土器は、日常の甕と、人面用土器の小型と、大型的一群があり、10形態に分類できる。人面土器の使用が比較的長い時間にわたるのであろう。では、大小の土器をどう考えるべきか。今、大小ある人面土器のうち、計測可能な資料を選び器高と口径の比を示す器高指数をとってみると大小ある土器も、大きさに関わりなく、ひとつのグループに含まれる。これは、人面土器の製作がある規格性に従ったこと、製作の段階で、大小の組み合わせを前提にしていたと考えられないか。つまり、先に見た人形と同じ様に、人面土器も単独ではなく、複数、または大小の組み合わせを想定するのである。編纂の年代は降るが、「延喜式」四時祭大祓条には、中臣の女が小石の入った壺(壺)を天皇に供する記録がある。この壺は人面土器のことと考えられているが、この場合前段で、下部2人が各々壺を執っている。つまり壺2個が1単位となり、その各々に天皇は氣息を吹きこむのである。この記事は『延喜式』撰進(927年)以前のある時期の使用法を記録したものには間違いない。本遺跡の人面土器は、型式や器高指数、墨書の有無を勘案すると、同形の墨書の有無のものが基本的な単位となり、条件によって、数の増や大小の組み合わせがあったのではないか。余談だが、江戸時代の『呪祖重宝記大全』「長病人體鬼まつりの事」に、病人の干支に定められた2~8人の怨鬼の字を符に書くことがみえ、人面土器の顔の数との関連が問題にされたことがある。仮に、両者に関連があったとすると、人面土器の顔の数は2面が多く、干支に定められた数は、土器の数によって調節したと想定することもできる。

平城宮・京において、人面土器は、荒津一郎の集計によると、18箇所から発見されている。このうち、京内では、宮の東南隅に沿う2条大路、西1坊々間大路、9条大路の各側溝、東堀河などからまとめて出土。京外では、下つ道と平城京の東南を迂回した河川とが交叉する稗田遺跡から多量に出上し、京内の井戸や他の溝からは発見されていないようである。つまり、どこでもということではなく、人面土器を流す場所が決っていた。本遺跡の人面土器は、上述のごとく、発掘した西側溝全体に分布し、無数の人が、比較的長期間に溝に投じた可能性が強い。ここを含め、人面土器がまとまって出土する地点は、人形や、後述の土馬などもまた多い。こうした点からみて、本遺跡は、平城京における祓所の一一所ではなからうかと考える。

土馬は、行疫神の乗り物との見方があることはすでに述べた。土馬は141片が出土したが、ほぼ形のわかるもの50個体、残りは足や尾などの小破片である。完形品がなく、破片が多いことは、ここだけではなく、東堀河でも同様であった。京跡やその近傍の祓所と考える遺跡で、土馬が、人面土器や人形などと伴うことを考えると、土馬は祓柱として作られたもので、行疫神が猛威を振るわぬように意識的に損壊し、流したとの見方は肯ける。土馬は平城京に限ったことではないが、溝や井戸からだけではなく、土壤や丘陵上の遺跡からも出土する。土中に埋めることは、水に流すことに通じ、祓の一形態として認められるので、この場合も、溝に投げるのと同じ趣旨と考えてよいだろう。西1坊々間大路西側溝では、土馬は人面土器と同様、発掘区全域に分布する。これらは7型式に分かれ、人面土器と同じく、比較的長期に多数の人々によって溝に投じられたのであろう。この場合も、人形などと同じく、複数の使用を考えている。

模型カマドは、人面土器、土馬にくらべて少なく約30個体、大半が破片である。甕や瓶も少ない。小型だがやはり大・中・小がある。これは、平城京の祓所と推定した9条大路北側溝、東堀河、稗田遺跡などから出土している。町田章は、中国における電神信仰と結びつけ、祓柱の一種とされてい



fig.41 西側溝出土祭祀遺物

る。鬼神は荒神とされているが、それは年に一度、年末に昇天し、その家族の年間の功過を天帝に報告、天帝がそれに相応の罰を下すことに由るのではなかろうか。竈の模型は鬼神を和めるためか、逆に損壊し、鬼神の働きを封じる意味であろう。

金属製の祭祀具として鏡と鈴がある。鏡のうち4面は、素文ながら唐式鏡と呼ばれるものである。唐式鏡は、平城京の祓所の一一所と推定する9条大路北側溝から、小型の海獸葡萄鏡が出土し、8世紀中葉から後半の年代が与えられている。本例はこれに次ぐ。

小型の唐式鏡は、石川県寺家遺跡や、三重県神島など各地の祭祀遺跡から出土している。小型鏡は『延喜式』で伊勢神宮の造営関係の祭りや八十鳩祭の祭料としてあがっている。伊勢神宮の場合、鉄人像などとともに宮地鎮料と記されている。八十鳩祭の祭料には、5寸と1寸の鏡があり、5寸は2面、1寸は天皇・中宮が80面、東宮が38面と多数である。八十鳩祭の意義については諸説があるが、天皇の即位の翌年に難波津で行われる一代一度の禊祓との説が有力である。この鏡の形などは審らかでないが、1寸の鏡は、大きさでは2面の儀鏡に近い。その用法も明らかではないが、日本神話などを参照すると、人形や人面上器のように、卯穂を直接祓うものではなく、柳の枝にとり懸けて、祭場の表示、浄化といった機能を果したのではないだろうか。

唐式鏡は、4面が相接して、儀鏡も2面が接近して出土した。2とか4とかいった複数を用いることは、すでに述べた人形や人面上器の用数と共通した意識であろう。片式鏡は、近くに鈴を伴っていた。鈴もまた祭祀には欠かせぬもので、八十鳩祭では、天皇・中宮が80口、東宮が30口とある。出土状況からみて、鏡とともに用いられたのであろう。

これまで、西1坊々間大路西側溝から出土した祭祀遺物について、その多くが、直接、間接に祓に関したものであることを述べてきた。ここと同種の遺物を出す遺跡は、平城京内では宮東南隅に沿う2条大路北側溝、9条大路北側溝、東堀河があり、京外では羅城門南の稗田遺跡がある。都城にこうした祓所が複数あることで想起するのが、平安京の七瀬祓である。これは文字通り7箇所の瀬で祓をするもので、文献上は10世紀末に初現するが、考古学上では未確認である。平城京から平安京へという都城発達史を考えると、上に見た平城京の祓所は、平安京において七瀬祓として定着してゆく前段階の状態を示すものではなかろうか。

3. 結語

調査は、西市東辺の坪の利用状況を把握することと西1坊々間大路の検出を目的に行った。しかし、調査区のほぼ全域にわたる中世に行われた大規模な上取りのため11坪の遺構は大半破壊を受け、坪の利用状況に関しては、ほとんど資料を得ることができなかった。以下、今回の調査で知りえた成果をまとめて結語としたい。

11坪の状況 上取りによる破壊のため掘立柱建物1棟・塀5条・井戸1基等を検出したにすぎない。掘立柱建物・塀については全体の規模は知りえないが、いずれも小規模な柱掘形で柱痕跡も細く、雜舍もしくは左京8条3坊9坪等で知られている下級役人あるいは庶民の住宅を想起させる内容をもっている。しかし、井戸S E990からは庶民の生活には直接縁のない漆容器（漆の詰った須恵器蓋や曲物容器）・漆をのばすために使ったパレット（上漆器の皿）や道教をその思想背景にもつ符咒を墨書きした土器が出土している。また坪の東辺を流れる西1坊々間大路西側溝からも京の美絶に際して投棄されたとみられる漆容器が大量に出土しており、このような点を加味すれば、11坪は庶民など身分の低かった人々の住居ではなく、漆器工房である可能性も考えておく必要があろう。

西1坊々間大路 西1坊々間路の路面舗装や両側の築地については削平のため検出しえなかつたが、東西両側溝を検出し、路面幅は両溝各間距離で8丈であることが判明した。また両側溝の東西に人走りを設けず基底巾7尺の築地を想定し、その心々間距離を復原すると約10丈になり延喜式記載的道路幅員に一致することも分った。これまで西1坊々間路については文献・平安京古図・遺存地割から大路規模と目されていたが、今回の調査で初めてそれを実証することになった。また今回の調査でえた西1坊々間大路の芯の国土座標と若犬養門の中心の国土座標から西1坊々間大路の振れについても具体的な数値がえられ、条坊復原、殊に右京側の条坊復原に対して新しい資料を提供することになった。

西1坊々間路の両側溝のうち西側溝は道路側溝としては破格の規模で、東市を貢流する東堀河にも優るとも劣らない規模をもつことが明らかになった。西1坊々間路を大路規模で計画しながら路面幅を揆め、わざわざ西側溝を堀河並に掘削した理由についてはIV-1でも詳述しているが、今一度、別の側面からその事情を考えてみよう。西1坊々間大路は平城宮内面西門（若犬養門）に通ずる道路であることは言うまでもない。宮に南面する他の門（朱雀・壬生両門）の背後には朝政や儀式を行なう場がひかえ、両門およびそれに面する道路は祭祀の場として使用されたことが文献や発掘調査で明らかになっている。従って、南から平城宮に物資を搬入する場合には、若犬養門とそれに通ずる西1坊々間大路が専らその役割を果したにちがいない。また西1坊々間大路と西市とは8条付近では400m程しか離れておらず、市から物資を搬入するのにも極めて便利である。まさにこうした事情が西側溝を堀河並の規模に掘削して運河として使用したもう一つの理由にあげることができよう。

西側溝出土遺物 西側溝からは上器・瓦・木器等整理箱にして2千箱に近い量が出土し、11坪周辺の様子や当時の生活風俗などを知る上で貴重な資料を提供することになった。出土遺物から11坪周辺に企飼工房・漆器工房が存在することが知られ、また祭祀に関係する遺物も多量に出土し、西側溝は運河としての機能の他に祓川としての機能もあったことが知られる。

昭和50年に当研究所が行った東市周辺の調査（左京8条3坊9坪）で検出した東堀河からも、西側溝と同様な性格の遺物が出土している。前述の調査および今回の調査成績から、市周辺の様相が遺物の上からもある程度推測できるようになったのも大きな成果の一つである。

PL-1



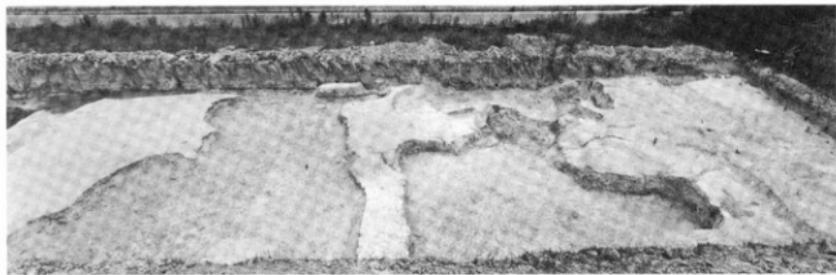




1 発掘区全景（東南から）



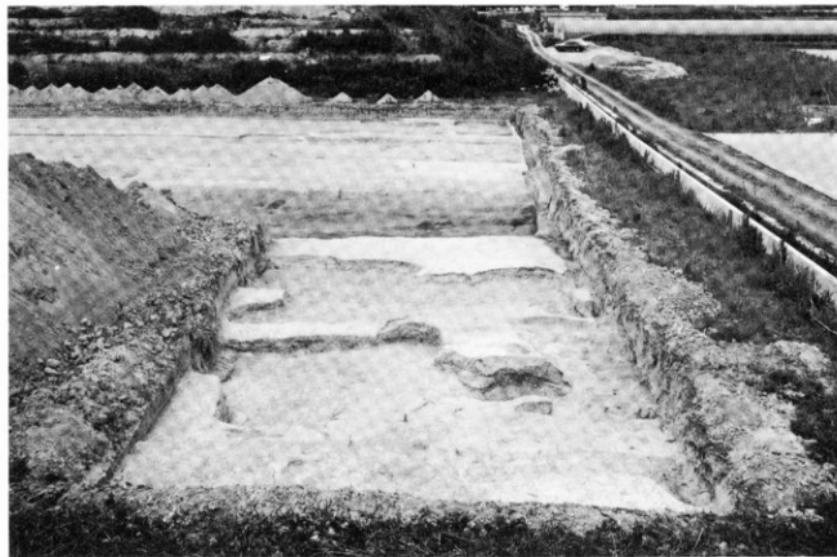
2 発掘区全景（西から）



3 西1坊坊間大路路面
(南から)



1 西1坊坊間大路（西から）



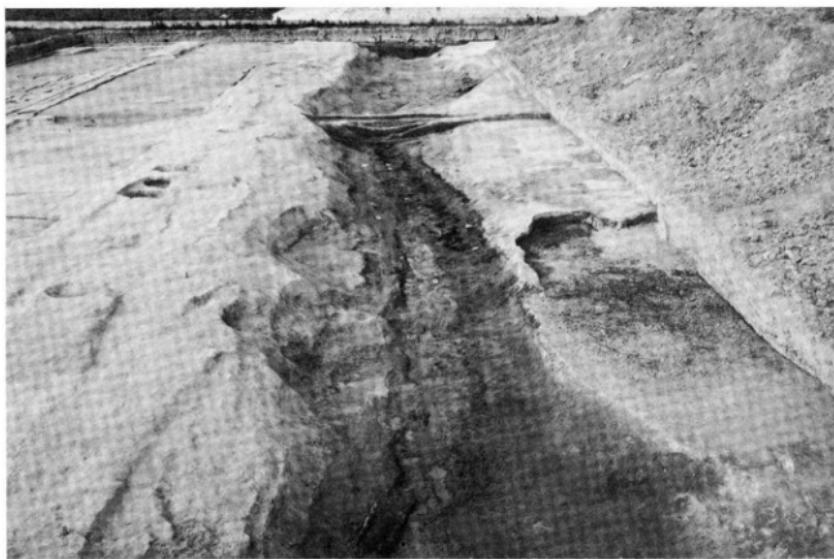
2 西1坊坊間大路（東から）



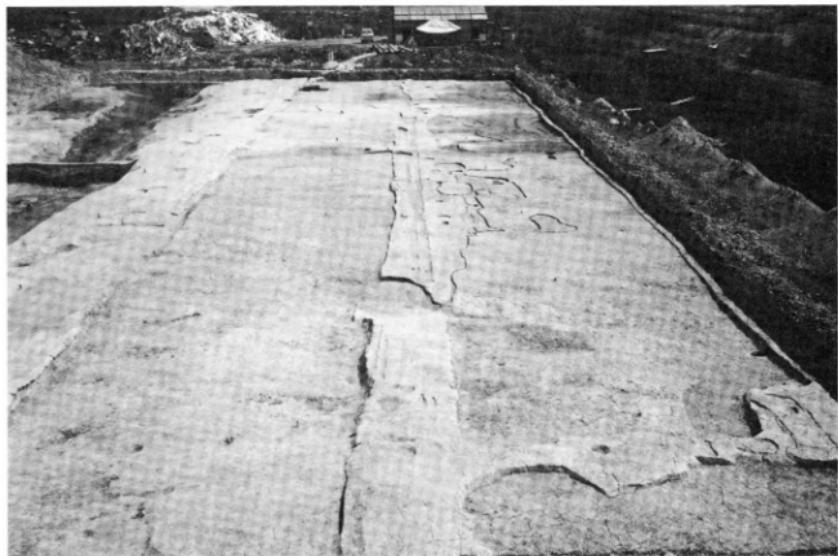
1 SD 920 (西1坊坊間大路西侧溝)
(北から)



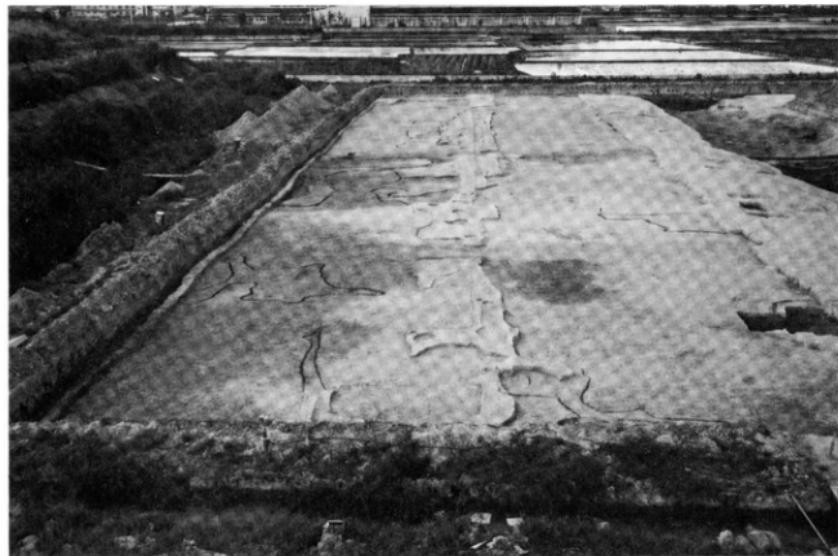
2 SD 920 (西1坊坊間大路西侧溝) (南から)



3 SD 920 (西1坊坊間大路西侧溝) (南から)



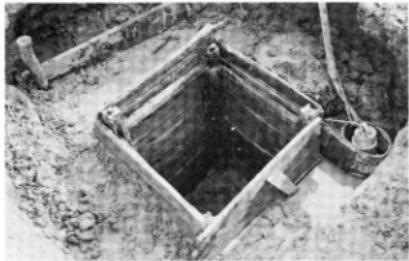
1 11坪全景（北から）



2 11坪全景（南から）



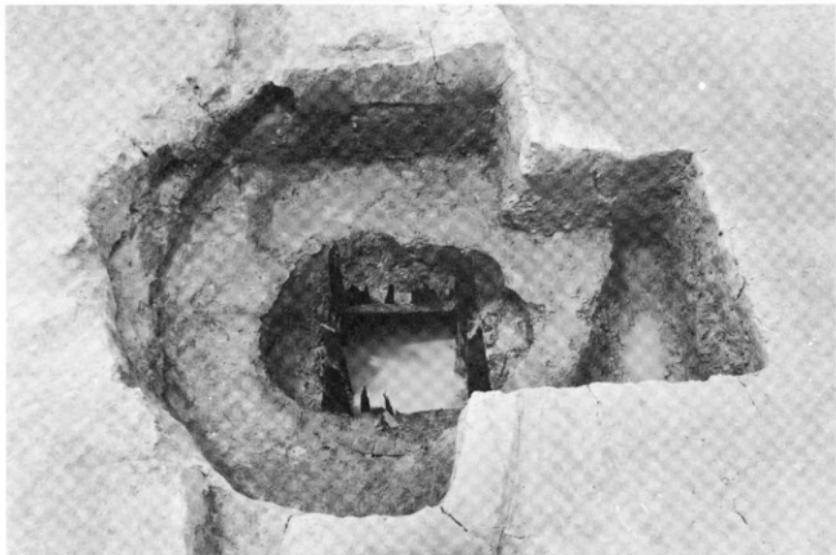
1 SE 930上部の縦板組（東南から）



2 SE 930下部の横板組（東北から）



3 SE 930 下部（西から）



4 SE 930 全景（北から）



西侧溝出土土器1) (奈良時代前半)



西側溝出土土器2(奈良時代後半~平安時代初)



1 小型模型土器

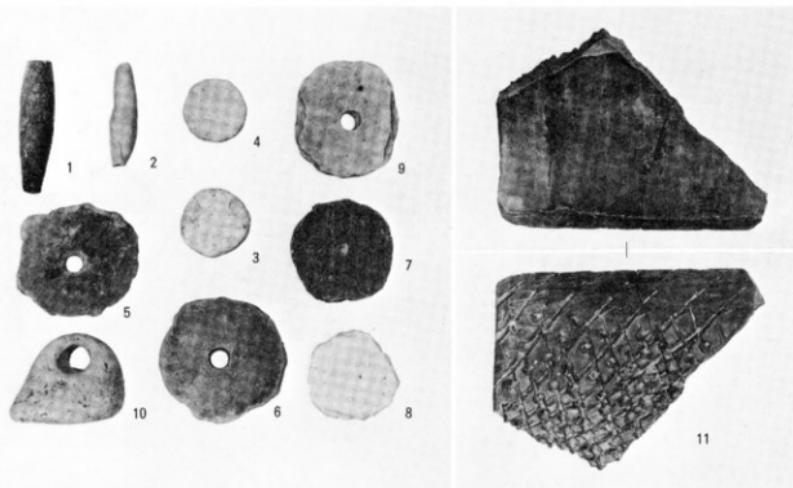


2 墨書き人面土器





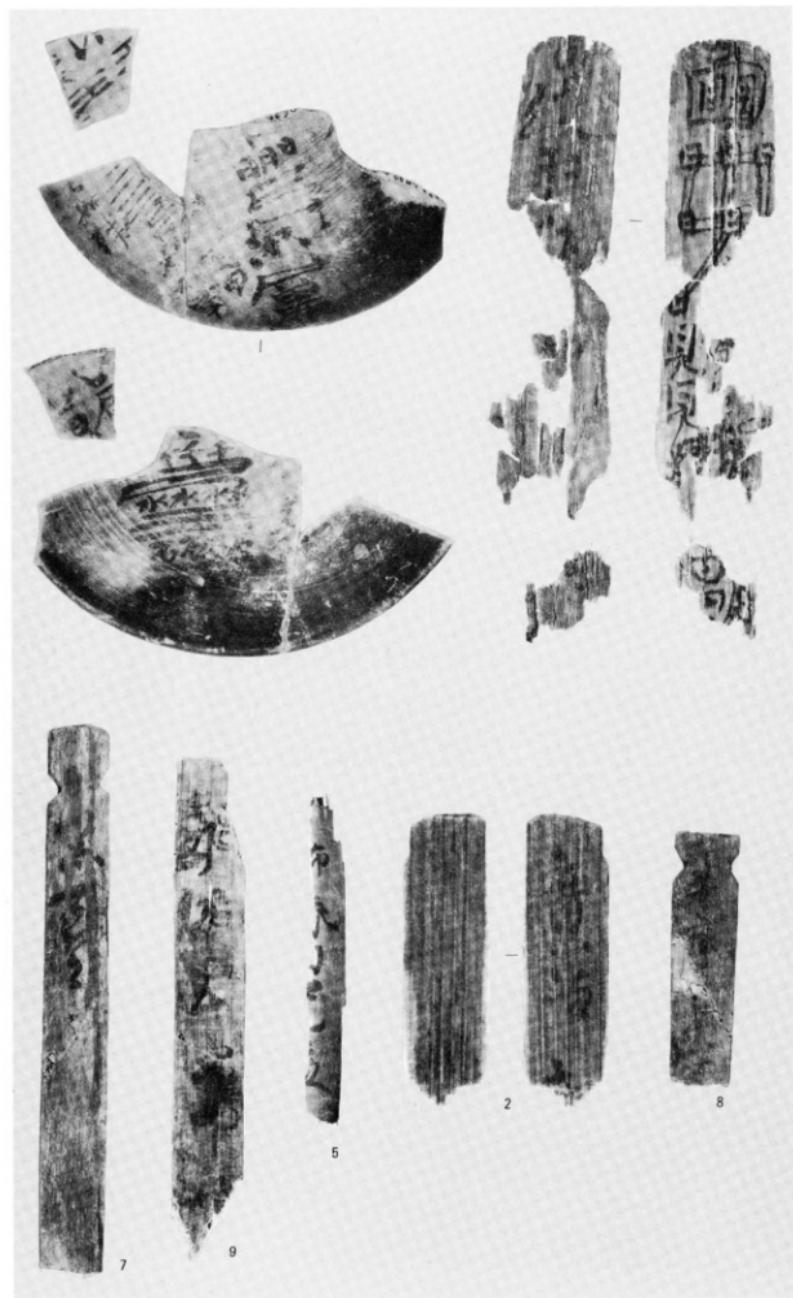
1 土馬



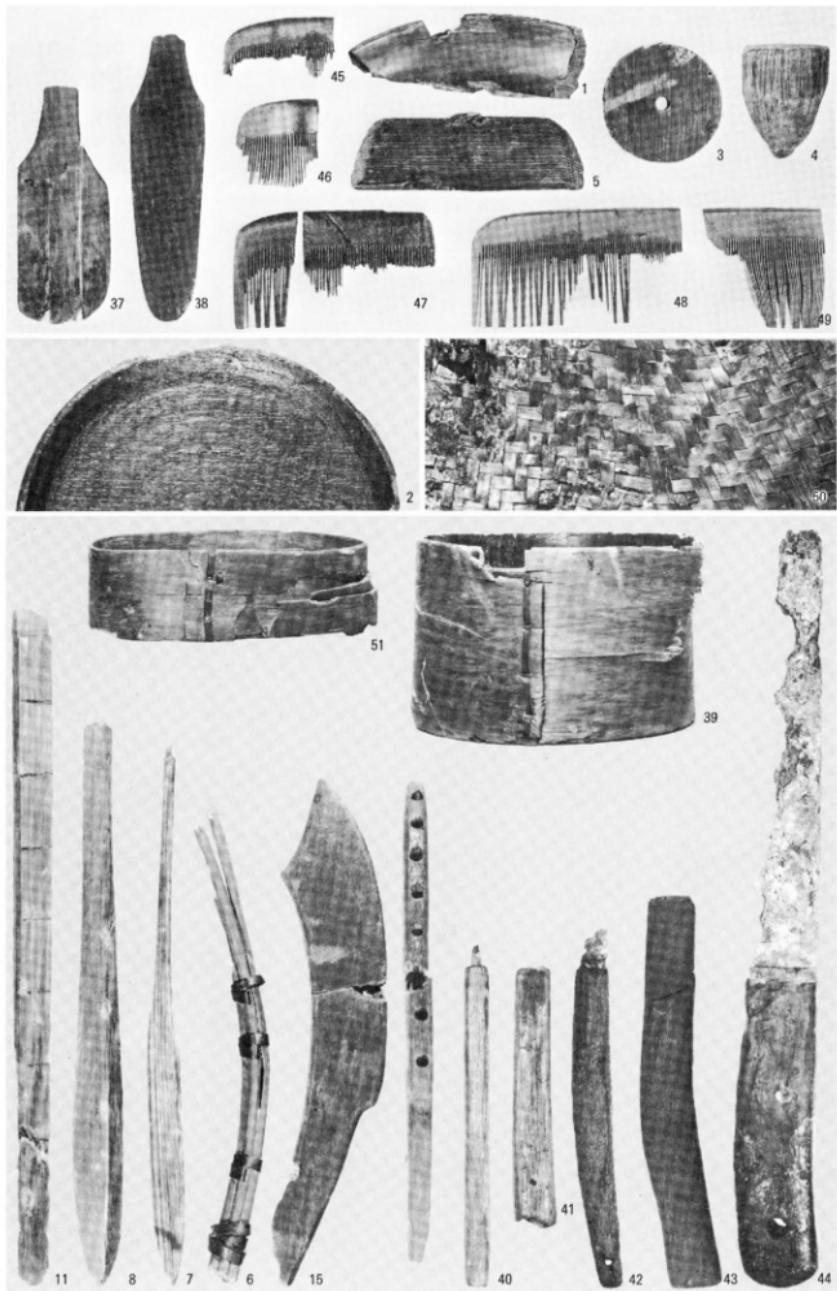
2 特殊土製品



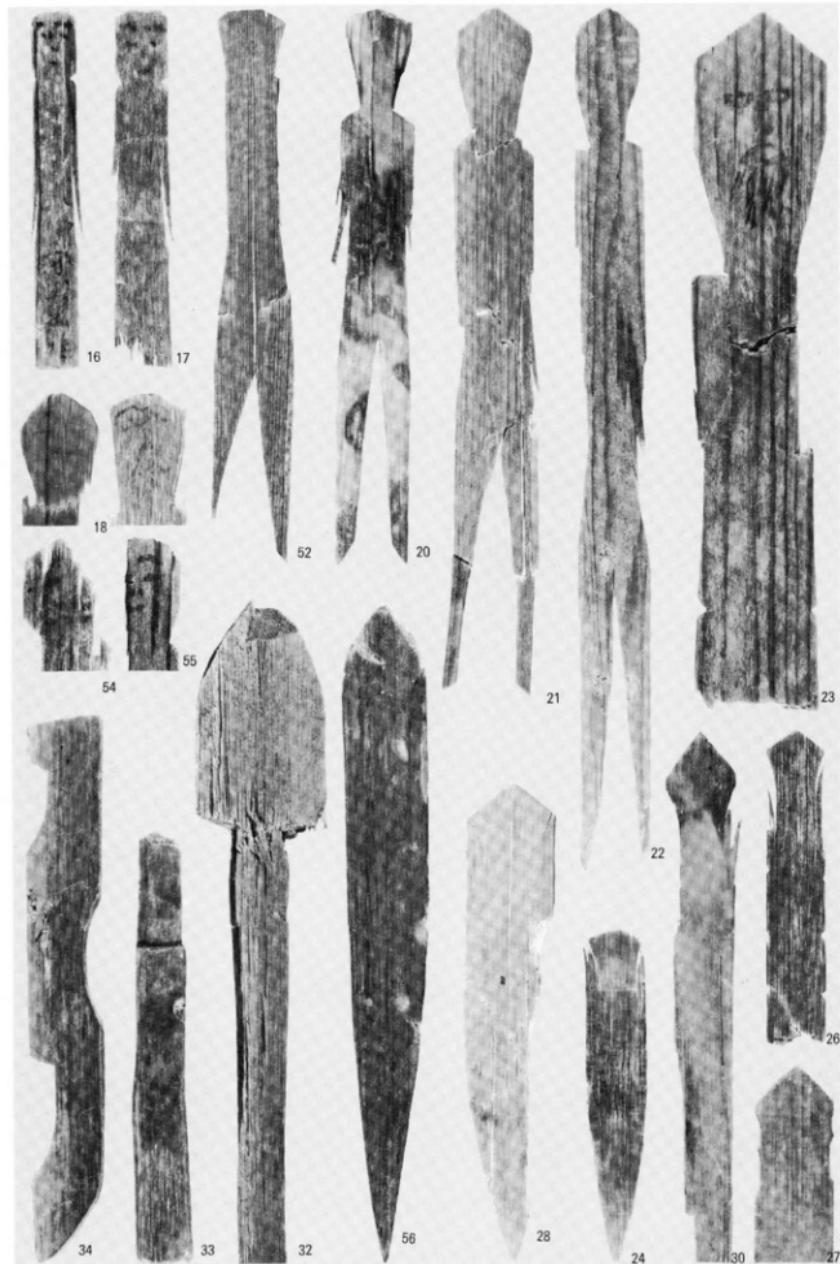
西侧出土墨书土器 (1:1)

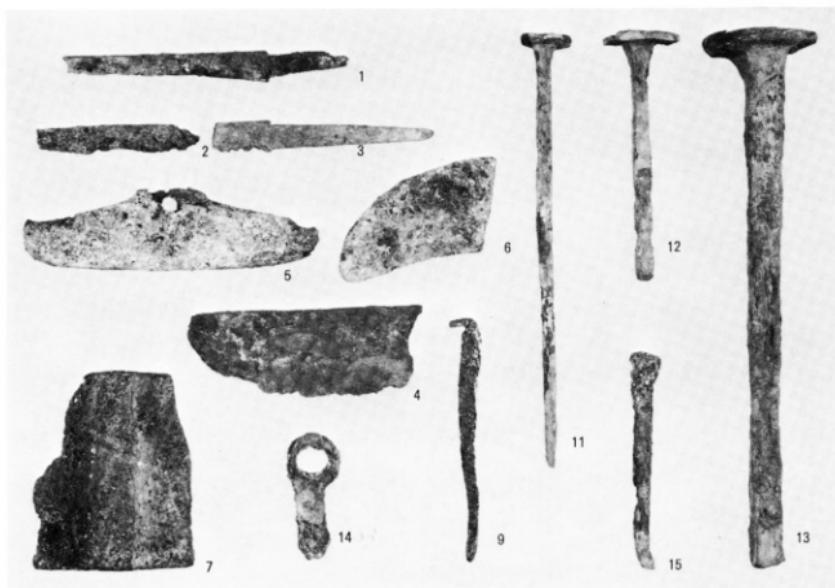


墨書き器・木簡 (右上は藤原京出土況符木簡)

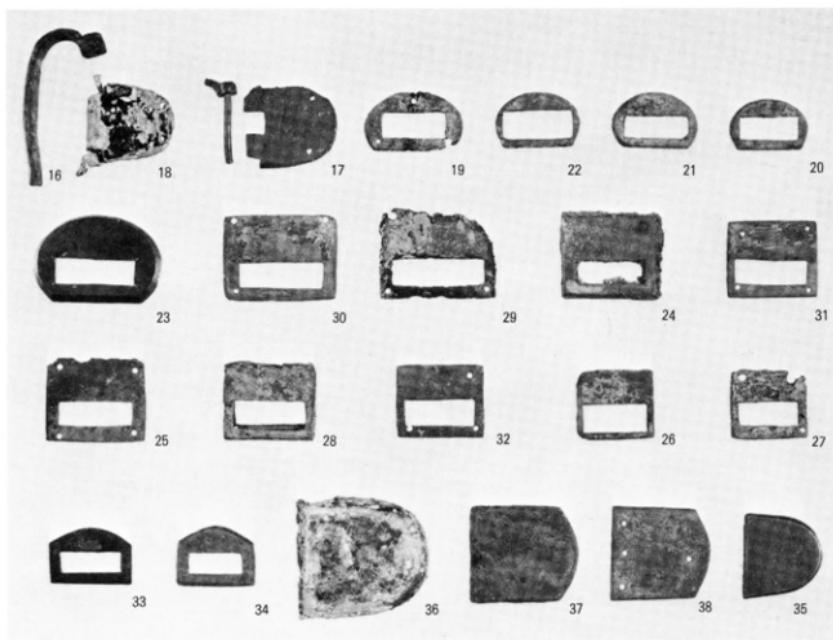


木製品 (37~39, 51は1/4 他はすべて1/2)

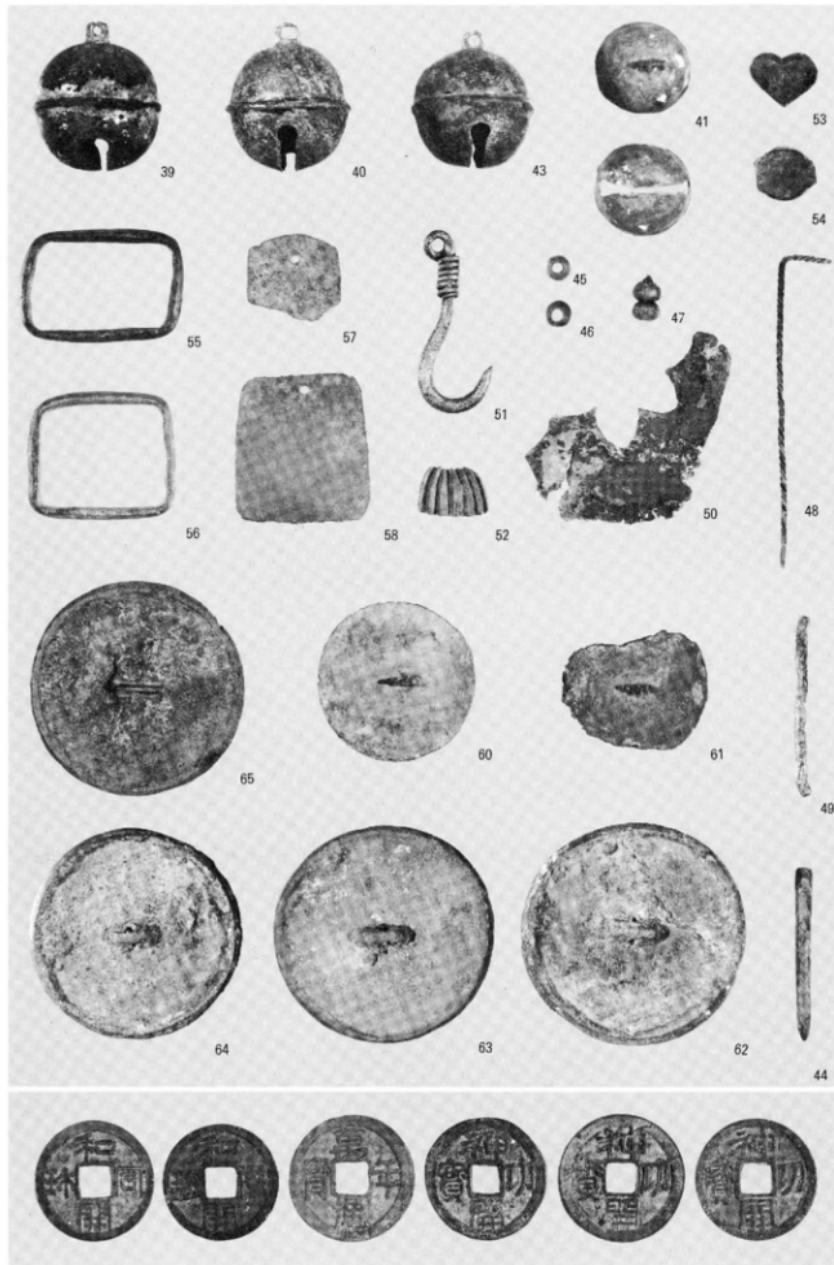


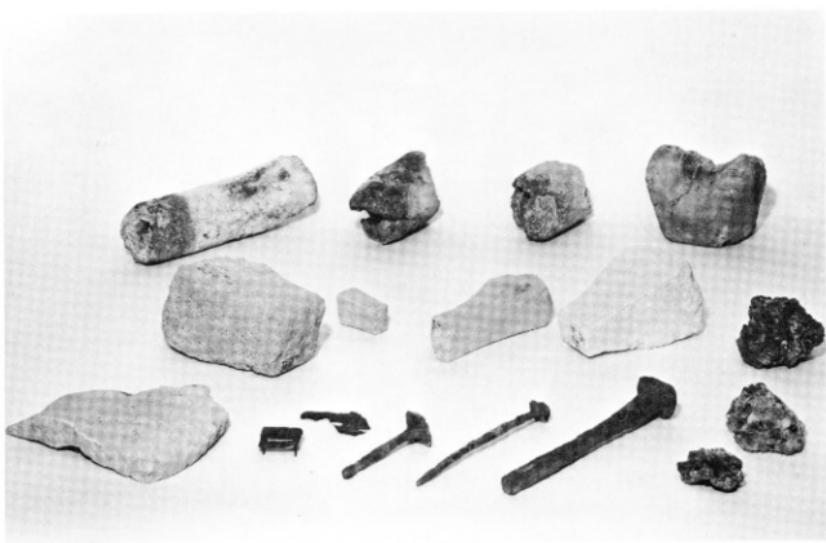


1 鐵製品



2 蒜金具

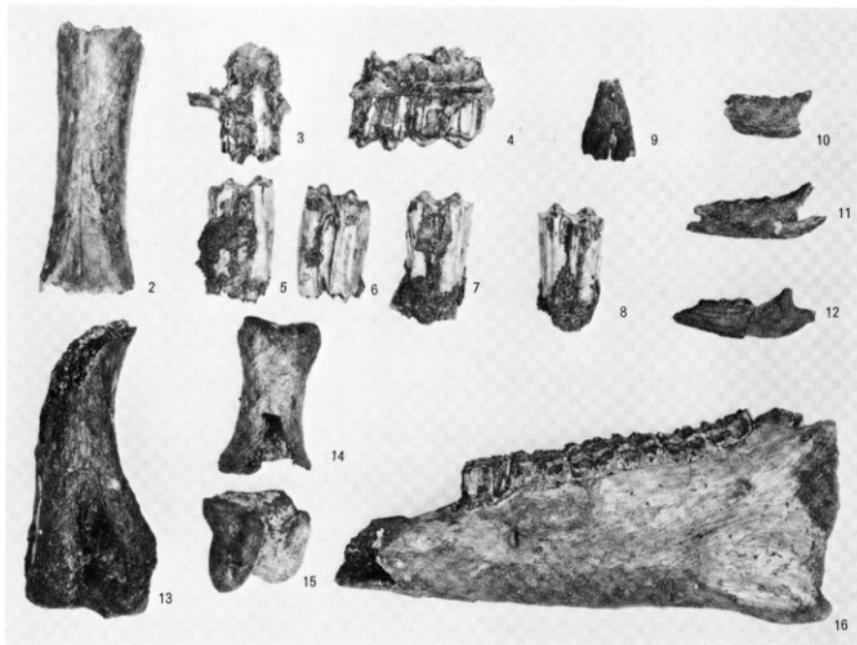




鋳造関係遺物と錢貨



1 動物遺存体 1 ウマ頭骨左側



2 動物遺存体 2 ウシ中手骨左体部

3—8 ウシ上顎骨

9 シカ中手骨又は中足骨遠位端

10—12 イヌ下顎骨

13 ウマ上腕骨遠位端

14 ウマ基礎骨左

15

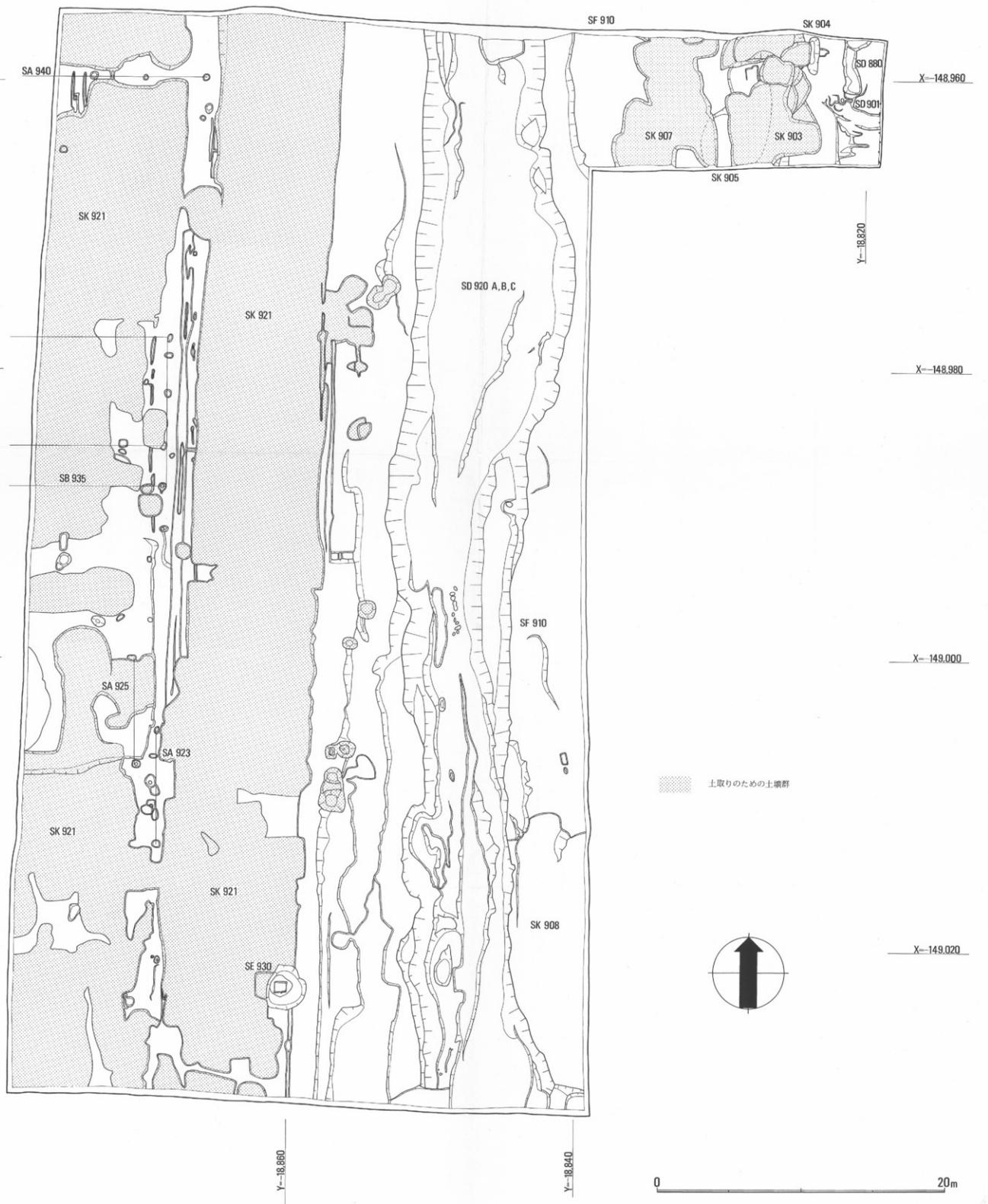
ウマ

睡骨左

16

ウマ

下顎骨下



平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書

昭和59年3月30日発行

編集・発行 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

印 刷 奈良明新社
奈良市橋本町36番地
